

隠川(3)遺跡

—国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

1997年3月

青森県教育委員会

序

津軽平野に位置する五所川原市には、観音林遺跡や前田野目の須恵器窯跡をはじめ数多くの埋蔵文化財が包蔵されております。青森県教育委員会では、国道101号浪岡五所川原道路（津軽自動車道）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を平成7年度から実施しております。

この度、平成7年度に発掘調査した五所川原市隠川(3)遺跡の報告書がまとまり、これを刊行することになりました。

調査の結果によると、縄文時代の土坑や平安時代の住居跡、縄文時代と平安時代の遺物が出土し、縄文時代と平安時代の複合する遺跡であることが判明しました。

この調査成果が広く文化財の保護と研究に活用され、また地域社会の歴史学習や地域住民の文化財保護の意識の高揚につながることを期待したいと存じます。

最後に、平素より埋蔵文化財の保護に対し御理解を賜っている建設省青森工事事務所並びに五所川原市教育委員会と、発掘調査の実施と報告書の作成にあたり御指導、御協力を賜った関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

青森県教育委員会
教育長 松 森 永 祐

例 言

- 1 本報告書は、青森県教育委員会が平成7年度に実施した国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う隠川(3)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、平成4年3月に青森県教育委員会が編集発行した『青森県遺跡地図』に遺跡番号05063として登録されている。
- 3 本報告書は青森県埋蔵文化財調査センターが編集作成した。執筆者名は文末に付した。なお、遺跡周辺の地形と地質については、青森県埋蔵文化財調査センター総括主査伊藤昭雄が執筆した。
- 4 挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、遺物写真の縮尺は統一していない。
- 5 本報告書に掲載した地形図(遺跡位置図)は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1の地形図を複写して使用した。
- 6 遺構・遺物の文・図中での表現は、原則として次の様式・基準によった。
 - (1)土層等の色調観察には「新版標準土色帖」(小山正忠、竹原秀雄 1967)を用いた。
 - (2)北の方位は全図とも座標北である。
 - (3)竪穴住居跡の主軸方向はカマドの主軸方向によっている。
 - (4)遺構関係のスクリーントーンは、カマド火床面、焼土等に用いた。
 - (5)遺物には観察表を付し、出土地点、法量及び諸特徴の欄からなり、計測値の単位はcm、重量はgである。
 - (6)遺物実測図で使用したスクリーントーンは、黒色処理、火ダスキ等に用いた。
- 7 引用・参考文献については巻末に収めた。
- 8 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 9 発掘調査及び本報告書作成にあたって、下記の諸氏から御協力・御助言を得た(敬称略・順不同)。小林達雄、市川金丸、工藤竹久、葛西励、高橋潤、古屋敷則雄、遠藤正夫、田中寿明、瀬川滋、長尾正義、半沢紀、斎藤淳、工藤清泰、木村浩一、新谷雄蔵、山口義伸

目次

序
例言
目次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査要項	1
第3節 調査経過、調査方法	3
第2章 遺跡周辺の地形と地質	5
1 地理的位置と周辺の地形	5
2 周辺の地質及び遺跡の土層	5
第3章 検出遺構と出土遺物	13
第1節 縄文時代の遺構と遺物	13
1 土坑	13
2 遺物	19
第2節 弥生時代の遺物	23
第3節 平安時代の遺構と遺物	24
1 竪穴住居跡	24
2 溝跡	48
3 遺構外遺物	51
第4節 時期不明の遺構	56
1 井戸跡	56
2 溝跡	56
第4章 調査の成果と考察	57
1 検出遺構について	57
2 出土遺物について	58
第5章 まとめ	62
引用・参考文献	62
写真図版	63
報告書抄録	76

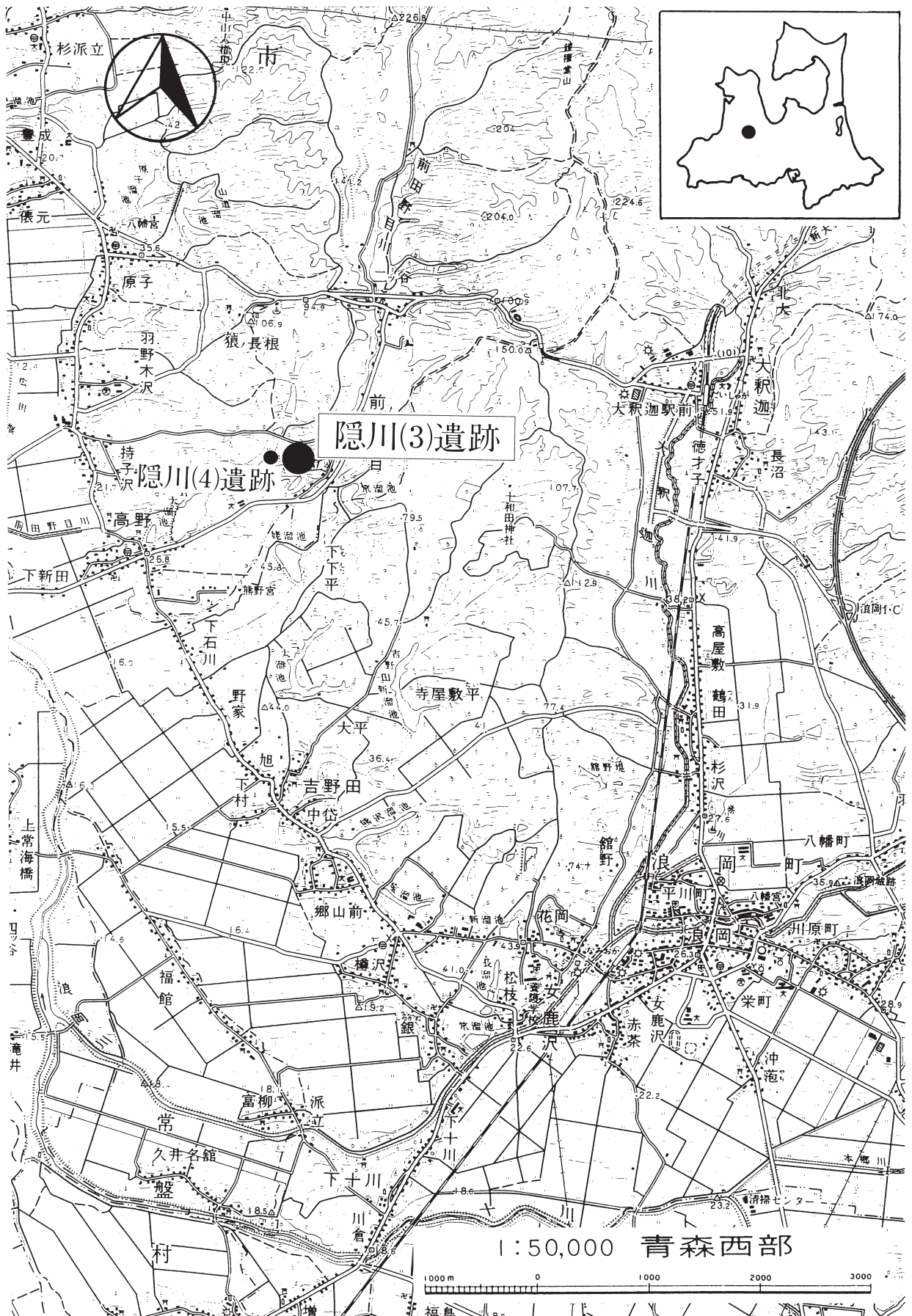


図1 遺跡位置図

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

国道101号浪岡五所川原道路は、南津軽郡浪岡町から五所川原市までの全長15.7kmを結ぶ自動車専用道路で、津軽自動車道の一部を形成するものである。平成3年度に青森県の事業として着手され、平成5年度からは建設省の事業となっている。

青森県教育庁文化課では、平成3年度に津軽自動車道建設事業と文化財保護の調整を図るため分布調査を実施した（『青森県遺跡詳細分布調査報告書Ⅳ』青森県埋蔵文化財報告書第146集）。

隠川（3）遺跡はその際に新たに確認された遺跡で、青森県遺跡番号は05063、平安時代と近世の遺跡とされた。

平成7年度に隠川（3）遺跡の発掘調査を青森県埋蔵文化財調査センターが実施することになり、平成7年4月24日から調査を開始した。（木村鐵次郎）

第2節 調査要項

1 調査目的

国道101号浪岡五所川原道路建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する隠川（3）遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

2 調査期間

平成7年4月24日から同年11月2日まで

3 遺跡名及び所在地

隠川（3）遺跡（青森県遺跡番号05063）

五所川原市大字持子沢字隠川52、外

4 調査面積

12,200平方メートル

5 調査委託者

建設省東北地方建設局青森工事事務所

6 調査受託者

青森県教育委員会

7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査協力機関

五所川原市教育委員会、西北教育事務所

9 調査参加者

調査指導員	村越 潔	青森大学教授（考古学）
調査協力員	釜菴 裕	五所川原市教育委員会教育長
調査員	佐藤 仁	弘前市文化財審議委員（歴史学）
	赤沼 英男	岩手県立博物館専門学芸員（保存科学）
	赤平 智尚	青森県立柏木農業高等学校教諭（考古学）

10 調査担当者

青森県埋蔵文化財調査センター

副参事 調査第一課長	北林八洲晴（平成8年3月31日退職）
主 幹	木村鐵次郎（現、調査第四課長）
主 事	田澤 賢治
調査補助員	長内 孝幸、大引 徳恵、杉田 幸子、濱田 恵

第3節 調査経過、調査方法

1 調査の経過

4月24日、調査器材等を現地に搬入し、環境整備を行うとともに、暫定的に20m×20mの大グリッドを設定して一部粗掘りを開始した。翌日からグリッド設定のための杭打ちを始めた。東西方向に数箇所トレンチを設定し、先行して掘り下げを進めたが、基本的に粗掘り作業は西側から行い、順次東側へ拡張していった。

6月上旬、調査区西側で、平安時代の竪穴住居跡の他、土坑、溝跡が比較的まとまって検出され、確認できたものから順次精査を開始していった。竪穴住居跡は調査区全体に点在していたが、果樹園造成時の大規模な削平により、遺構の遺存状態は極めて悪く、遺構確認作業に手間取ったため、精査には、遺構数に比して多くの時間を要した。

7月下旬からは、西側に隣接する隠川(4)遺跡の一部粗掘りに入り、調査予定面積5,000m²のうち3,500m²の粗掘り及び遺構確認を行った。

10月いっぱい遺構精査を終え、11月2日には調査器材・出土遺物を搬出し、現地調査の全日程を終了した。

2 調査方法

調査区域設定にあたって、道路建設用幅杭No.162の南側幅杭と北側の暫定杭を結んだ直線を南北方向の基準線とし、この基準線に直交する線を東西方向の基準線とした。No.162北側暫定杭をF-65と称して起点とし、4m×4mを1グリッドとする小グリッドを設定した。各グリッドは、南北線の北から南へアルファベットA・B・C…、東西線の東から西へ算用数字1・2・3…、を付して、これらの組み合わせで示した。具体的にはそのグリッドの北東隅の基準杭の表示とした。グリッドの南北方向線は、座標北より2°東へ傾いている。

測量原点は、工事中測量原点からレベル移動を行い、調査区域内に数箇所設置した。

調査は、調査区西端から20m×20mの大グリッドを設定して粗掘りを進めるのと並行して、東西方向にトレンチを設定し数地点を掘り下げ順次拡幅していった。また、K-10・11、F-72の各グリッドを深掘りし、土層の堆積状況を観察した。

遺構の精査は、確認順に番号を付した後、原則として四分法を用い、規模の小さいものは二分法、その他を用いた。遺物は遺構及び層位ごとに取り上げることを原則とした。遺物の出土地点を記録し、層位・標高を図に記入した。遺構外出土遺物はグリッドごとに取り上げた。

実測は遣り方測量を用い縮尺は20分の1を原則とした。写真撮影は、35ミリのモノクローム、リバーサルの2種類のフィルムを使用して、作業の進展にともない必要に応じて行った。

(田澤賢治)

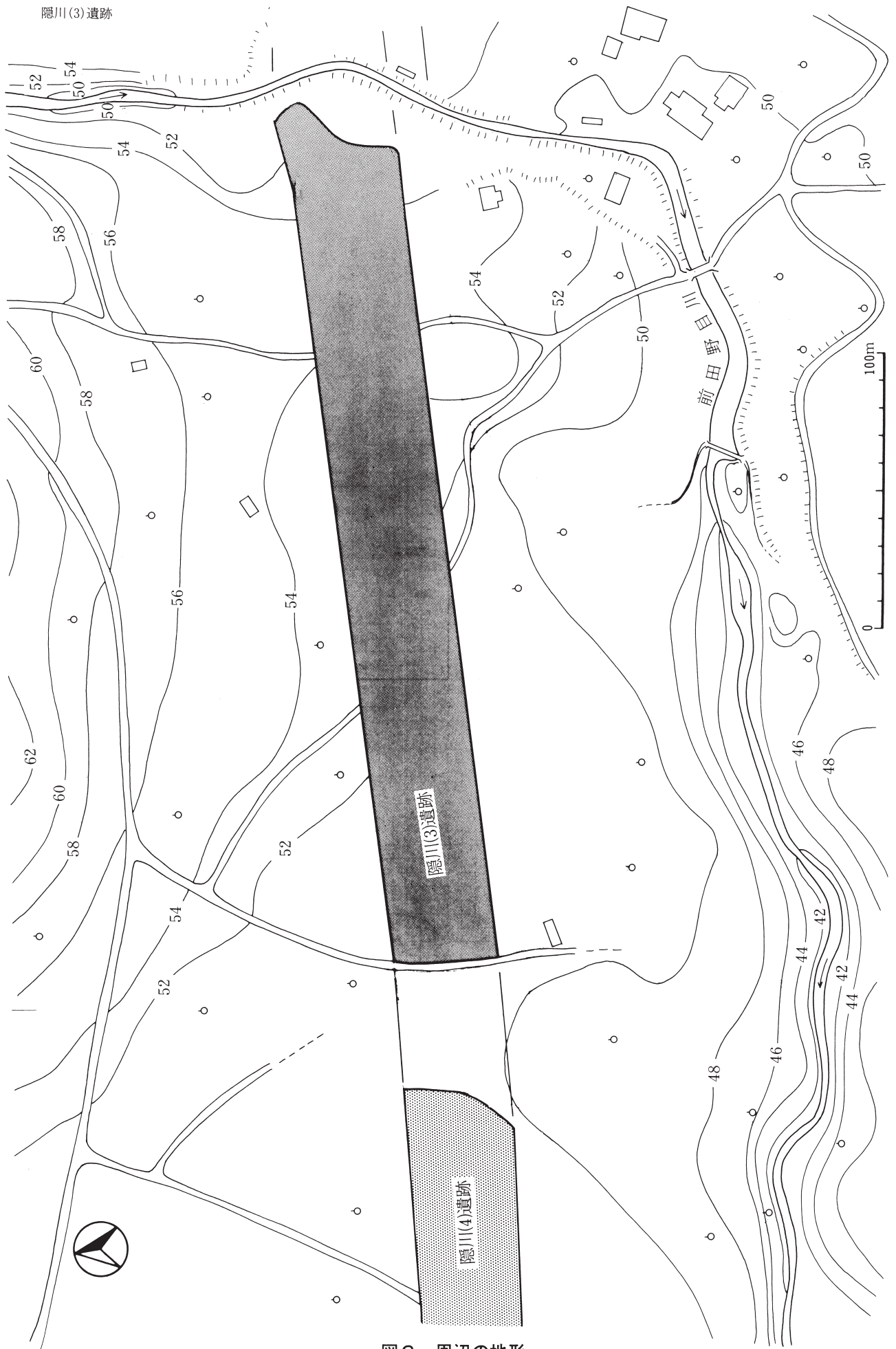


図2 周辺の地形

第2章 遺跡周辺の地形と地質

1 地理的位置と周辺の地形

隠川(3)遺跡は、標高が50～55mの、全体的に南へ緩く傾く段丘面上にある。勾配のほとんどは17%内外で、東端の前田野目川に臨むところだけ90%に達する。前田野目川は本遺跡東端より100mほど南までは概ね南南西へ流れるが、そこからは西南西へ急に向きを変え、大小2つの溜池を経由して3km強西の板柳町五林平南端で十川に合流する。本遺跡はもとはリング畑であり、この辺一帯にはリング畑が広がっている。

本遺跡からは、西付近より岩木山の山体が始まり、西南西約23kmに至って標高1625mの岩木山山頂を見ることができる。その後方、西南から南にかけては、白神山地等県境の山々が低い屏風のように峰を連ねている。外は、北や東の尾根、それに根を張る杉林・松林等針葉樹のため展望は望めない。

水野・堀田(1983)は、本遺跡に係る5万分の1図幅「青森西部」地域において、津軽平野と大釈迦丘陵の間に分布する、海成段丘を中心とした砂礫台地を前田野目台地と呼び、標高・傾斜・開析状態・構成物等をもとに、Gt I面・Gt II面・Gt III面の3段に細分している。図3はその地形分類図である。Gt I面(上位面)は標高50～70mで、大釈迦丘陵の縁辺に分布し、表面は侵食により波状を呈する。Gt II面(中位面)は標高30～40m、地形面は平坦で、寺屋敷平・羽野木沢周辺で広く、開析谷には多くの溜池が見られる。Gt III面(下位面)は標高20～30mで、Gt II面の前面に断片的に分布する。本遺跡は、このうちGt II面に位置する。

吾妻(1995)は、津軽半島に分布する地形面を、その分布形態と高度により、I面～V面の5段の段丘と沖積面に区分している。このうち、海成段丘は、高位よりI m面・III m面・V m面の3段、河成段丘は、同じくII f面・III f面・IV f面の3段である。III m面・V m面は、それぞれ小貫ほか(1963)の山田野段丘・出来島段丘に相当する。先のGt II面は、本遺跡付近ではI m面に相当するものとみられる。ただ、前田野目川がI m面を刻んで形成した河成段丘のII f面の可能性もある。なお、中川(1972)は、県下の段丘を、最高位、高位、中位、低位の4群に大別し、山田野段丘を中位段丘としている。山田野段丘は、岩木川と日本海岸に挟まれた地域および岩木川東岸に主に分布し、面はほぼ水平、高さは15～20mである。中位段丘は、下北では田名部段丘、県南東部では高館段丘で、県下の海岸地域に最も普遍的に分布し、古くは海岸平野であったとみられている。

吾妻(1995)は、I m面について、砂・シルトを構成層とし、III m面との間にほかの海成面がないことから、最終間氷期よりも1つ前の間氷期(約20～22万年前)に形成されたと考え、より古い可能性もあるとしている。また、II f面については、I m面を刻む開析扇状地を形成し、その末端をIII m面に切られるので、I m面形成以降、最終間氷期前の低海水準期(約14～16万年前)に形成されたとみている。最終間氷期は、欧州ではリス・ウルム間氷期、その1つ前はミンデル・リス間氷期と呼ばれている。

2 周辺の地質及び遺跡の土層

本遺跡を含む津軽山地南部の地質構造は、馬ノ神山ドームに大きく影響されている。従って、堆積岩では馬ノ神山付近に見られる新第三系中新統の長根層が最も古く、ここから周囲へ離れるにつれ、

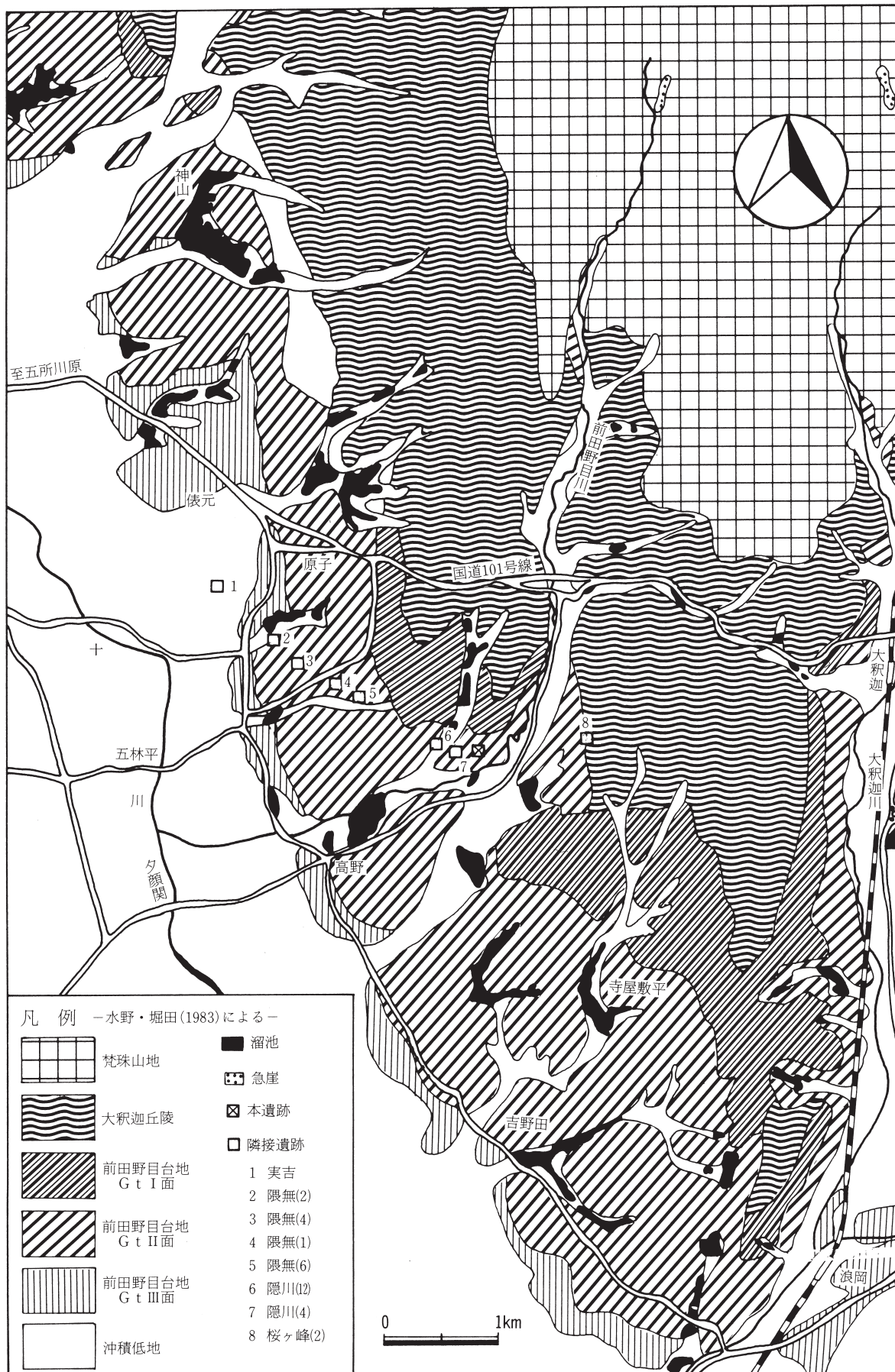


図3 五所川原市七和地域の地形分類図

順次新しい新生界が出現する。すなわち、中新統の馬ノ神山層・源八森層・不動の滝層・大滝沢層、鮮新統の大釈迦層・鶴ヶ坂層、そして更新統の前田野目層である。なお、馬ノ神山ドームの東半3分の1ほどは、津軽山地分水嶺のすぐ東側にあつて、それとほぼ並行して延びる津軽断層によって切られており、ここでは中新統は最上部の大滝沢層に限られ、ほとんどは鮮新世以降の新しい地層が堆積している。岩佐(1962)によれば、津軽断層は、三厩湾より大釈迦に抜ける延長約50kmの衝状性逆断層で、その最大落差は津軽山地中央部付近で1000mにも及ぶという。

本遺跡の基盤層は、分布が前田野目台地のそれと概ね重なる前田野目層である。本層の模式地は前田野目川下流一帯で、岩井(1965)によれば、模式地付近では鶴ヶ坂層を不整合におおひ、灰色の浮石質砂岩、青灰色シルト岩および細円礫等からなり、最上部は黄褐色の浮石質火山灰および同色のローム質粘土よりなるという。シルト岩層中には泥炭の薄層(30~50cm)を2枚挟在している。全体的に津軽盆地の中心に向かって3°前後の傾斜をなしているが、最下部のものは局部的だが、10~5°傾斜しているのも見られるという。

本遺跡周辺に分布する、前田野目層以外の新生界の層相等は下の通りである(岩井, 1965; 北村・岩井・多田, 1972; 岩井・沢田・大久保, 1983)。

沖積低地堆積物(泥・砂)……十川・浪岡川等によって供給された泥や砂で、津軽平野を構成する沖積統である。

沖積低地堆積物(砂・礫)……前田野目川・大釈迦川等、津軽山地の山間部を流れる小河川によって供給された砂や礫で、それら小河川沿いの谷底平野や前田野目台地周縁の津軽平野を構成する沖積統である。

段丘堆積物……細~中円礫で、前田野目台地のGtIII面を構成する洪積統である。

鶴ヶ坂層……中礫大の浮石を含んだ、淡灰色~紫灰色の浮石質~砂質凝灰岩である。全体的に塊状無層理で、主に火山砕屑流によって形成された鮮新統である。なお、村岡・高倉(1988)は、八甲田カルデラの形成に伴って噴出した2つの主な火砕流堆積物のうち、古い方を八甲田第1期とし、従来、鶴ヶ坂層と呼ばれた海底火砕流堆積物に対比し、その形成年代を、K-Ar法より65万年前の更新世としている。岩井(1965)も、本層からは化石が発見されず、時代決定は困難で、下位の大釈迦層と同じ構造運動に支配されることから、一応第三系として取扱っているにすぎない。

大釈迦層……主として中~粗粒砂岩からなり、細円礫岩およびシルト岩をしばしば挟在する。一般に下部はシルト岩が、上部では砂岩が優勢である。本層には軟体動物や有孔虫等の浅海性海棲動物化石が豊富に含まれ、大釈迦動物化石群として一般に知られている。鮮新統である。

大滝沢層……主として灰白色~白色の浮石質~砂質凝灰岩からなり、中新統である。

不動の滝層……主として、塊状~微層理を示す暗灰色珪藻土質シルト岩からなり、前田野目川流域では葉理を示す細粒砂岩の斑点を含む。全体的に貧化石帯となっているが、珪質海綿のサガリテスがほとんど全ての部分に含まれていることから、中新統である。サガリテスは日本の中新統上部、特に油田地域の泥岩中に多産する。

源八森層……板状層理を示す黒色頁岩からなり、下位の馬の神山層より漸移する。サガリテスを普遍的に含む中新統である。

馬の神山層……主として、硬質頁岩・縞状頁岩からなり、層厚変化の著しい凝灰岩(太田凝灰岩部層)

を挟在する。この部層は、淡青緑色～白色ベントナイト質細粒～火山礫凝灰岩からなり、泥岩を挟む。サガリテスを含む中新統である。

長根層……馬ノ神山山頂一帯に分布し、淡緑色～灰褐色凝灰質砂岩・凝灰角礫岩からなる。流紋岩の熔岩を挟在する中新統である。

前田野目層・鶴ヶ坂層及び大釈迦層は、国道101号線沿い二ツ谷東方のメイプルビレッジ(有)北の露頭において、詳細に観察することができる。ここでは、大釈迦層がみかけ上西に30度前後傾斜しており、この上に塊状無層理を呈する鶴ヶ坂層が不整合に重なっている。鶴ヶ坂層の上には前田野目層がほぼ水平な層理を有して重なり、層厚は数メートルで、この上にローム層を載せている。

隠川(3)遺跡における土層観察用として、西端付近のF-72、前田野目川に近い東端付近のJ-10・11の各グリッドを一部深く掘った。観察した壁は、前者は北、後者は南である。本遺跡における標準土層は、堆積上安定したF-72北壁を採った。J-10・11南壁の土層は、これと対比させ、さらに追加もした。各土層の詳細は下の通りである。各グリッドの土層実測図は図4に示す。

F-72北壁(標準土層)

- I層 黒褐色土 10YR 2/2 ローム粒・粘土粒・粘土ブロック(径10mm大)微量混入。しまりあり。
- II層 黒色土 10YR 2/1 ローム粒・ロームブロック(径10mm大)微量混入。しまりややあり。
一本グリッド南東約15mの本層下位には白頭山苦小牧火山灰(B-Tm)とみられる細粒火山灰を確認できる。一
- III層 鈍い黄橙色ローム 10YR 7/4 しまりあり。粘性ややあり。
- IV層 灰白色粘土質ローム 5Y 7/2 III層との境界は明瞭。

J-10・11南壁

- Ia層 黒褐色土 10YR 2/2 炭化物少量・ローム粒中量・浮石微量混入。
- Ib層 暗褐色土 10YR 3/3 鈍い黄橙色土中量混入。
- IIIa層 鈍い黄橙色ローム 10YR 7/4 炭化物微量・暗褐色土少量混入。粘性なし。
- IIIb層 鈍い黄橙色ローム 10YR 7/2 灰白色土少量混入。粘土質。
- IIIc層 鈍い黄橙色ローム 10YR 7/3 粘性なし。
- IIId層 明赤褐色ローム 5YR 5/8 しまり・粘性なし。
- IVa層 灰白色粘土質ローム 2.5Y 7/1
- IVb層 浅黄色砂質ローム 2.5Y 7/4 しまり・粘性なし。
- IVc層 浅黄色粘土質ローム 2.5Y 7/3 浮石微量混入。
- IVd層 褐色砂質ローム 10YR 4/6 細礫少量混入。
- Va層 鈍い黄橙色砂 10YR 6/3 炭化物少量混入。
- Vb層 灰黄褐色砂 10YR 6/2 炭化物微量・褐色土少量・粘土ブロック(径20mm大)混入。
- Vc層 鈍い黄橙色砂 10YR 7/3 細礫・炭化物少量・粘土ブロック(径30mm大)混入。

吾妻(1995)は、Im面とIIIf面には、上より黄褐色軽石質火山灰・褐色ローム・暗褐色シルト質火山

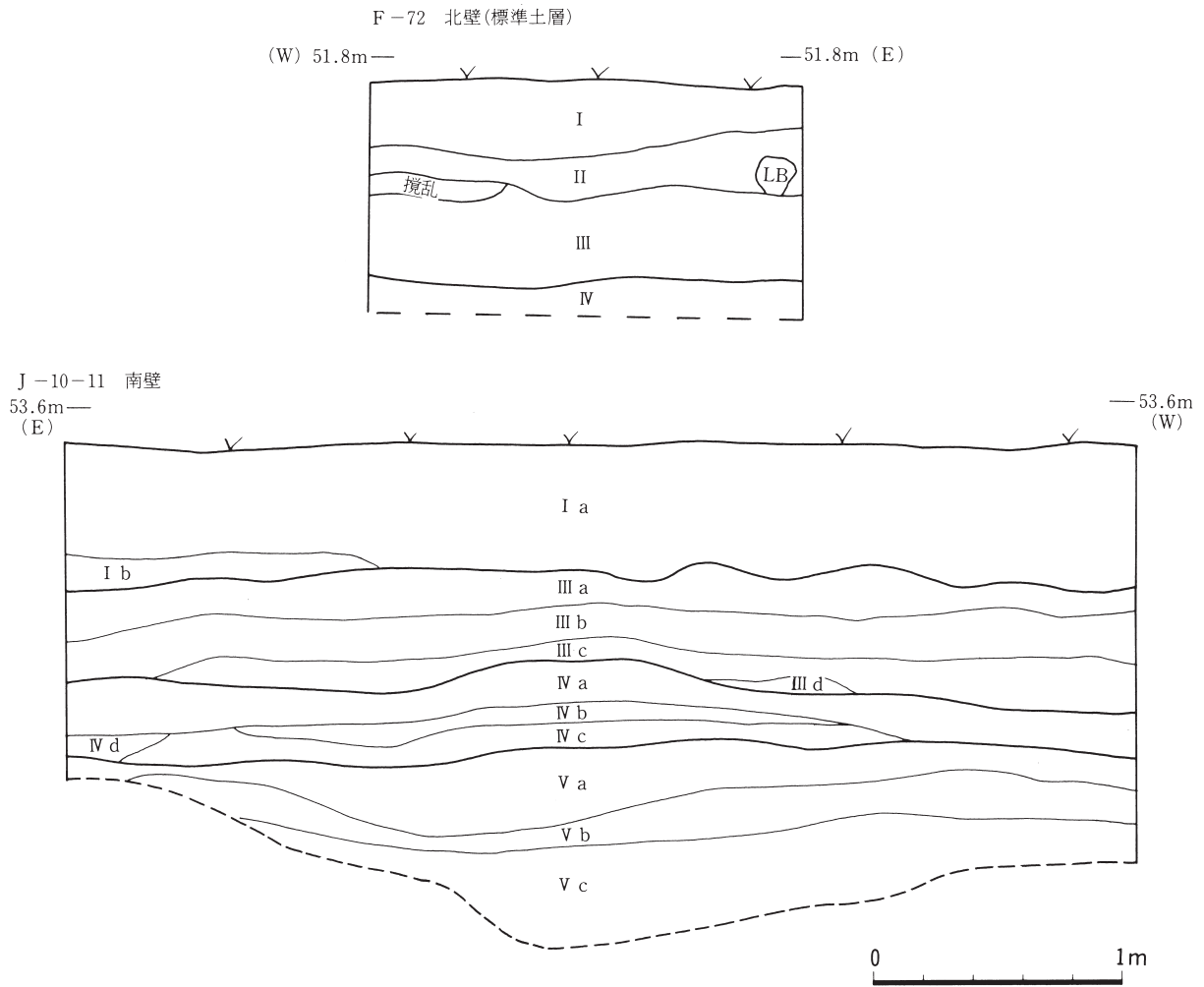


図4 隠川(3)遺跡内土層実測図

灰(以上上部火山灰)、洞爺火山灰(Toya)および下部火山灰の5層が模式的に載るとしている。ただ、両面の下部火山灰層の厚さを比較すると、後者は前者の約半分という。このうち、津軽半島南部によく分布する黄褐色軽石質火山灰は、火山ガラスの屈折率から十和田八戸テフラ(To-HP)に対比される可能性が大きいという。To-HPは、いわゆる八戸火山灰であり、その降下年代は12000~13000年前である。また、上部火山灰と下部火山灰を区切る、白色で細粒のToyaは、北海道の洞爺湖を給源とする広域火山灰で、層厚は20cm前後である。町田・新井(1992)は、Toyaの噴出年代を10~13万年前としている。

本遺跡におけるⅢ層はTo-HPに対比される。このⅢ層は、本遺跡西北西約1800mに位置する隈無(4)遺跡のⅥ層に対比できるものである。隠川(3)遺跡のⅥ層は、褐色ローム以下に対比されるが、詳細は不明である。遺跡東端付近の前田野目川に近いグリッドで確認できる砂主体のⅤ層は、下部に細礫・中礫等が見られる(特に最下部では多量)ことから、前田野目川がかつてここを流れていた時の堆積物である。

(伊藤昭雄)

引用・参考文献

- ・岩佐三郎（1962）青森県津軽地方の含油第三系とその構造発達史について。石油技術協会誌，27，197-231.
- ・小貫義男・三位秀夫・島田昱郎・竹内貞子・石田琢二・斎藤常正（1963）青森県津軽十三湖地域の沖積層。東北大地質古生物研報，58，p. 1-36.
- ・岩井武彦（1965）青森県津軽盆地周辺に発達する新生界の地質学的並びに古生物学的研究。弘大教育学部紀要，14，p. 85-155.
- ・北村信・岩井武彦・多田元彦（1972）青森県の新第三系。青森県の地質，p. 5-70，青森県。
- ・青森県農林部土地改良第一課（1983）土地分類基本調査「青森西部」。
- ・日本の地質『東北地方』編集委員会（1989）日本の地質2 東北地方。共立出版，338p.
- ・須崎俊秋・箕浦幸治（1992）青森地域上部新生界の層序と古地理。地質学論集，37，p. 25-37.
- ・中川久夫（1972）青森県の第四系。青森県の地質，p. 71-120，青森県。
- ・梅津正倫（1976）津軽平野の沖積世における地形発達史。地理学評論，49，p. 714-735.
- ・角田清美（1978）津軽屏風山砂丘地帯の地形について。東北地理，30，p. 15-23.
- ・村岡洋文・高倉伸一（1988）10万分の1八甲田地熱地域地質図説明書。特殊地質図（21-4），地質調査所，27p.
- ・箕浦幸治・中谷周（1990）津軽十三湖及び周辺湖沼の成り立ち。地質学論集，36，p. 71-87.
- ・町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラスー日本列島とその周辺。東大出版会，210p.
- ・梅津正倫（1994）沖積低地の古環境学。古今書院，270p.
- ・吾妻 崇（1995）変動地形からみた津軽半島の地形発達史。第四紀研究，34，p. 75-89.
- ・日本第四紀学会第四紀露頭集編集委員会（1996）第四紀露頭集ー日本のテフラ。日本第四紀学会，352p.

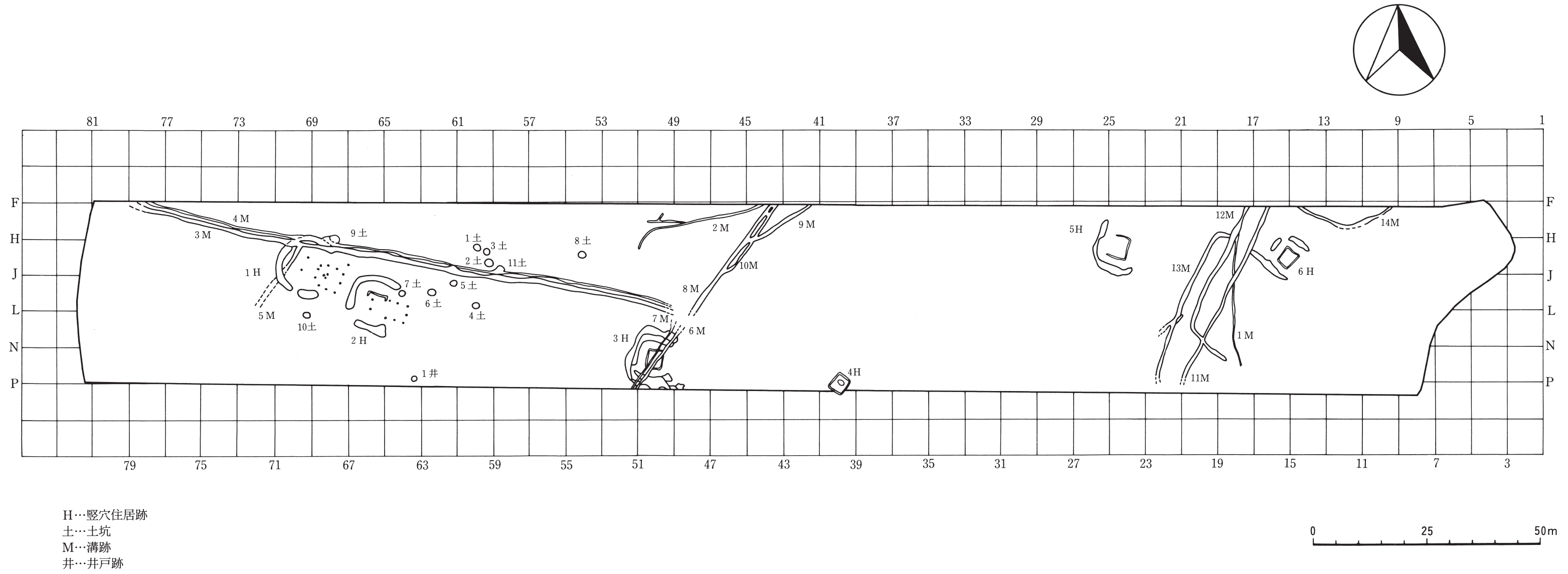


図5 遺構配置図

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物

1 土坑

縄文時代の遺構は、土坑が11基検出された。調査区西側のG～L-54～69グリッドの範囲に集中している。伴出遺物は、第2号、第4号、第7号土坑の覆土中から、縄文時代後期のものと思われる土器片がわずかに出土したに過ぎず、これらの土坑が構築された時期は断定し得ないが、遺構の検出状況から、同一時期に構築されたものと思われる。以下、検出された各土坑について述べる。

第1号土坑(図6)

[位置]H-59・60グリッドに位置する。

[重複]なし。

[平面形・規模]平面形は楕円形を呈する。長軸144cm、短軸124cm、深さ44cmを計測する。

[壁・底面]底面はやや起伏がある。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。

[堆積土]堆積土は5層に分層される。人為堆積の様相を呈する。全体にローム粒を含む黒～黒褐色土である。

[出土遺物]なし。

第2号土坑(図6)

[位置]I-59グリッドに位置する。

[重複]なし。

[平面形・規模]平面形は不整形円形を呈する。長軸176cm、短軸160cm、深さ60cmを計測する。

[壁・底面]底面はやや起伏がある。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。

[堆積土]堆積土は7層に分層される。人為堆積の様相を呈する。黒色土が大半を占める。

[出土遺物]覆土より縄文時代後期の粗製土器の口縁部が出土した。

第3号土坑(図6)

[位置]H-59グリッドに位置する。

[重複]なし。

[平面形・規模]平面形はほぼ円形を呈する。長軸156cm、短軸144cm、深さ52cmを計測する。

[壁・底面]底面はほぼ平坦である。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。

[堆積土]堆積土は6層に分層される。自然堆積の様相を呈する。全体に黒～黒褐色土である

[出土遺物]なし。

第4号土坑(図6)

[位置] K-60グリッドに位置する。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸164cm、短軸136cm、深さ50cmを計測する。

[壁・底面] 底面はほぼ平坦である。壁は北、西壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南、東壁はやや緩やかに立ち上がる。

[堆積土] 掘り上げてしまったため、堆積土については不明である。

[出土遺物] 覆土より縄文時代後期の土器片が出土した。

第5号土坑(図7)

[位置] J-61グリッドに位置する。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は不整形円形を呈する。長軸122cm、短軸120cm、深さ36cmを計測する。

[壁・底面] 底面は起伏があり、中央部からやや東寄りに深さ4cmほどの落ち込みが認められる。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。

[堆積土] 堆積土は3層に分層される。自然堆積の様相を呈する。全体に黒色土である。

[出土遺物] なし。

第6号土坑(図7)

[位置] J-62グリッドに位置する。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。長軸166cm、短軸158cm、深さ28cmを計測する。

[壁・底面] 底面はほぼ平坦である。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。

[堆積土] 堆積土は4層に分層される。自然堆積の様相を呈する。全体に黒色土である。

[出土遺物] なし。

第7号土坑(図7)

[位置] J・K-63・64グリッドに位置する。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。長軸150cm、短軸144cm、深さ50cmを計測する。

[壁・底面] 底面は起伏が多い。壁は底面から緩やかに立ち上がる。

[堆積土] 堆積土は7層に分層される。人為堆積の様相を呈する。主体は黄褐色土とローム・ブロックを含む黒～黒褐色土である。

[出土遺物] 覆土より小型土器の完形品が1点出土した。

第8号土坑(図7)

[位置]H-54グリッドに位置する。

[重複]なし。

[平面形・規模]平面形は円形を呈する。長軸170cm、短軸156cm、深さ46cmを計測する。

[壁・底面]底面はほぼ平坦である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。

[堆積土]堆積土は4層に分層される。自然堆積の様相を呈する。全体にローム粒を含む黒色土である。

[出土遺物]なし。

第9号土坑(図8)

[位置]G・H-67グリッドに位置する。

[重複]第4号溝、第1号住居跡外周溝と重複する。新旧関係は、本遺構が最も古い。

[平面形・規模]平面形、規模とも不明であるが、検出部分より、長軸255cm、短軸190cmの楕円形を呈すると推測される。深さは56cmを計測する。

[壁・底面]底面は起伏が多い。壁は底面から急に立ち上がる。

[堆積土]堆積土は7層に分層される。人為堆積の様相を呈する。全体にローム粒、ローム・ブロックを含む黒～黒褐色土である。

[出土遺物]覆土より土師器片が出土したが、むしろ外周溝に伴う可能性がある。

第10号土坑(図8)

[位置]K・L-69グリッドに位置する。

[重複]なし。

[平面形・規模]平面形は円形を呈する。長軸154cm、短軸148cm、深さ28cmを計測する。

[壁・底面]底面は起伏が多い。壁は底面から緩やかに立ち上がる。

[堆積土]堆積土は3層に分層される。自然堆積の様相を呈する。主体はローム粒を含んだ黒色土である。

[出土遺物]なし。

第11号土坑(図9)

[位置]I-58グリッドに位置する。

[重複]第4号溝と重複し、本遺構が古い。

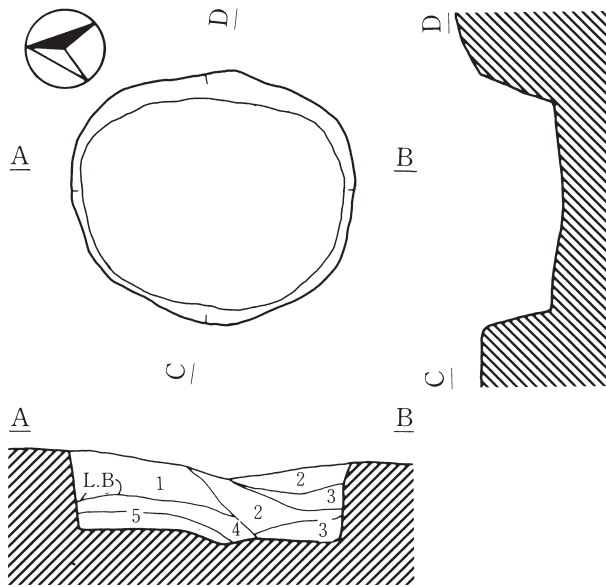
[平面形・規模]平面形は楕円形を呈する。長軸200cm、短軸170cm、深さ60cmを計測する。

[壁・底面]底面は起伏が多い。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。

[堆積土]堆積土は5層に分層される。自然堆積の様相を呈する。全体にローム粒を含む黒～黒褐色土である。

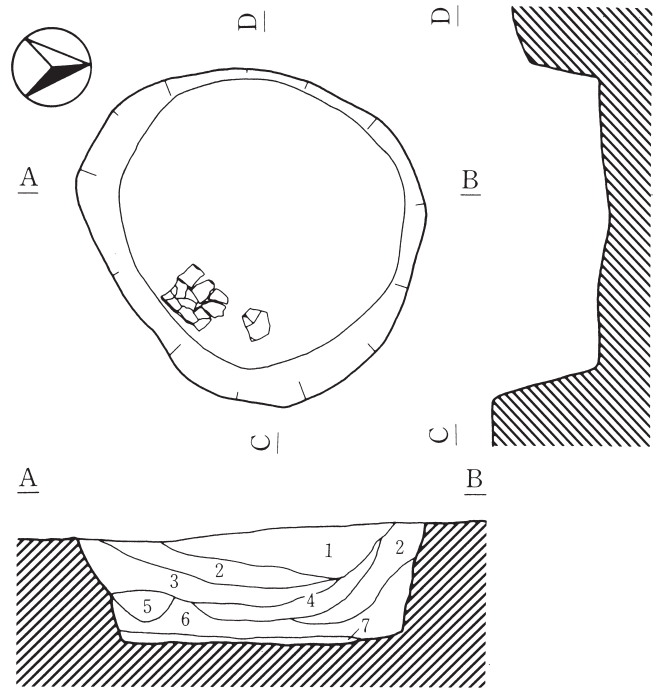
[出土遺物]覆土より縄文土器と思われる細片が一片出土した。

第1号土坑



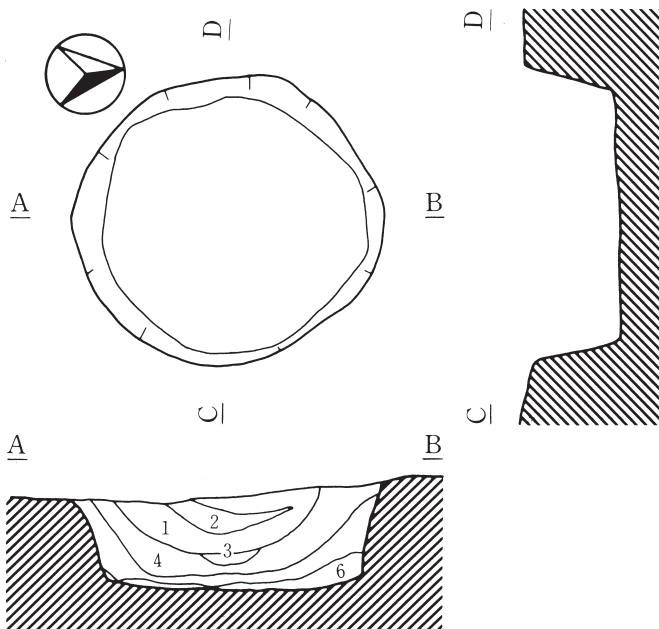
- 第1号土坑
 第1層 黒色土 10YR2/1 ローム粒、L.B、小礫極微量含む。
 第2層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒、L.B少量含む。
 第3層 黒褐色土 10YR2/2 黄褐色土多量含む。
 第4層 黒色土 10YR2/1 ローム粒微量含む。
 第5層 黒色土 10YR2/1 L.B多量含む。

第2号土坑



- 第2号土坑
 第1層 黒色土 10YR2/1
 第2層 黒色土 10YR2/1
 第3層 黒色土 10YR1.7/1
 第4層 黒色土 10YR2/1 ローム粒、L.B多量含む。
 第5層 黒色土 10YR1.7/1 ローム粒、L.B中量含む。
 第6層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒、L.B中量含む。
 第7層 黒褐色土 10YR2/2 粘土粒、粘土BL、炭化物中量含む。

第3号土坑



- 第3号土坑
 第1層 黒色土 10YR2/1
 第2層 黒褐色土 10YR2/2 褐色土(10YR4/4)含む。炭化物微量含む。
 第3層 黒色土 10YR1.7/1
 第4層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒微量含む。
 第5層 黒色土 10YR2/1 ローム粒微量含む。
 第6層 黒色土 10YR2/1 L.B含む。

第4号土坑

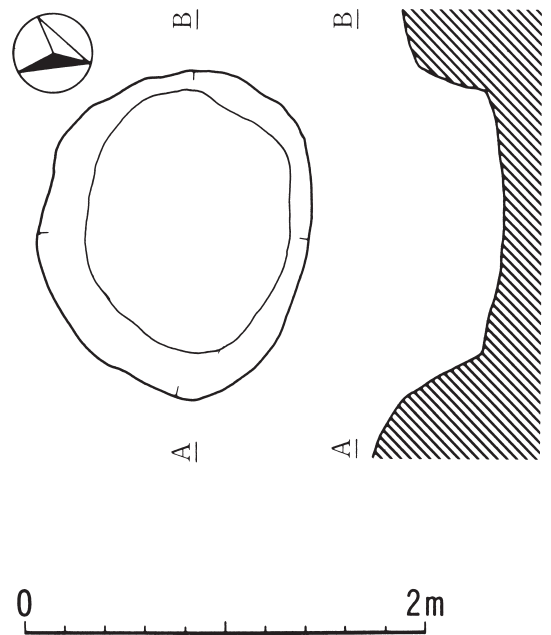
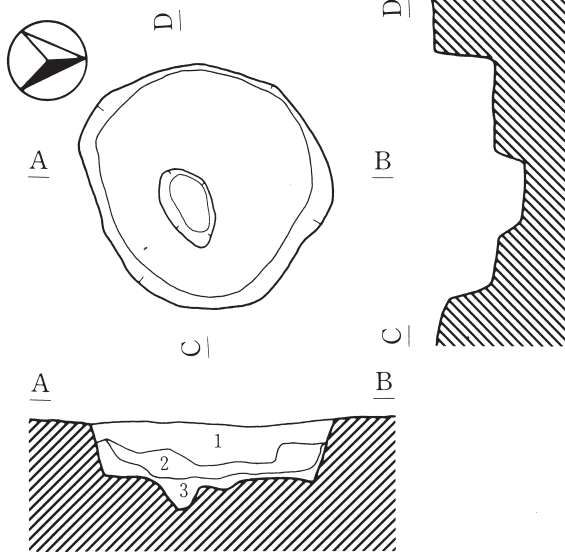


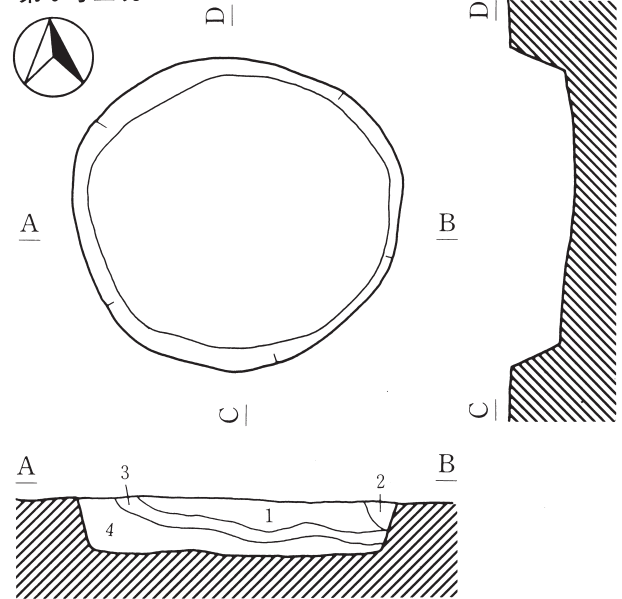
図6 第1～4号土坑

第5号土坑



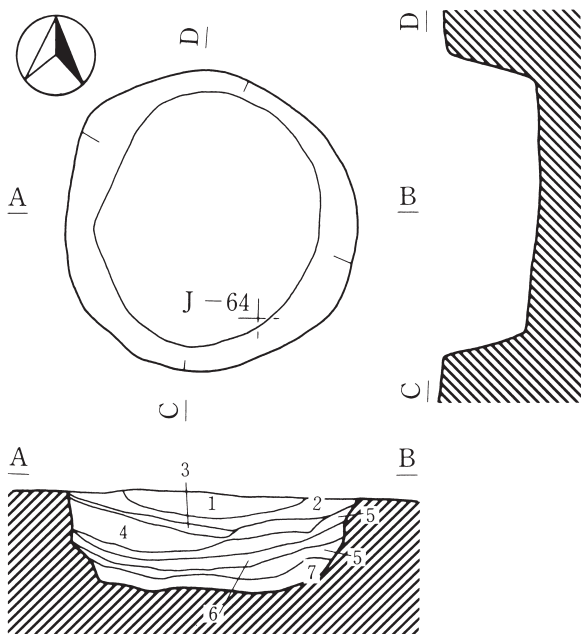
第5号土坑
 第1層 黒色土 10YR2/1
 第2層 黒色土 10YR2/1 ローム粒微量含む。
 第3層 黒色土 10YR2/1 ローム粒、L.B、黒褐色土少量含む。

第6号土坑



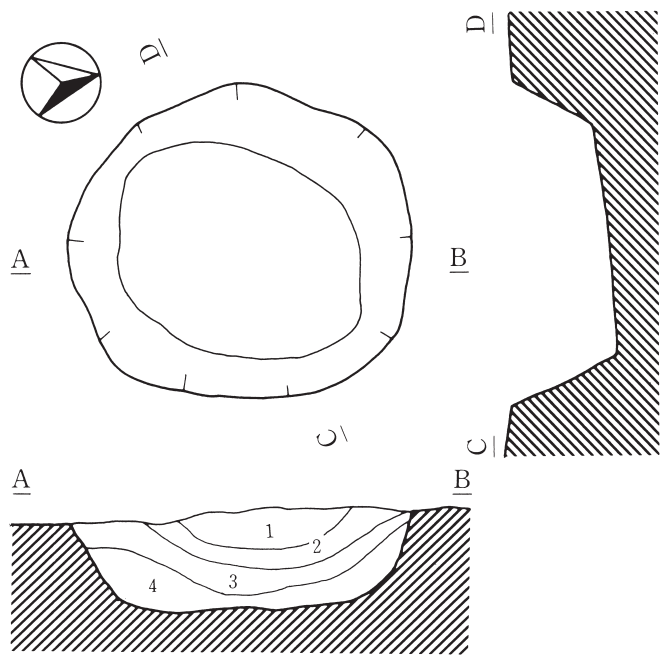
第6号土坑
 第1層 黒色土 10YR2/1 ローム粒微量含む。
 第2層 黒色土 10YR1.7/1黄褐色土(10YR6/5)含む。
 第3層 黒色土 10YR2/1 ローム粒、L.B少量含む。
 第4層 黒色土 10YR2/1

第7号土坑



第7号土坑
 第1層 黒色土 10YR2/1 黄褐色土少量、浮石極微量含む。
 第2層 黒色土 10YR2/1 ローム粒、L.B微量含む。
 第3層 黒色土 10YR2/1 L.B、炭化物少量、黄褐色土中量含む。
 第4層 黒色土 10YR2/1 L.B中量、炭化物少量、黄褐色土多量含む。
 第5層 黒褐色土 10YR2/2 L.B、黒色土少量、黄褐色土微量含む。
 第6層 黒色土 10YR2/1 L.B少量、黄褐色土微含む。
 第7層 黒褐色土 10YR2/2 粘土粒、粘土BL多量、炭化物微量含む。

第8号土坑

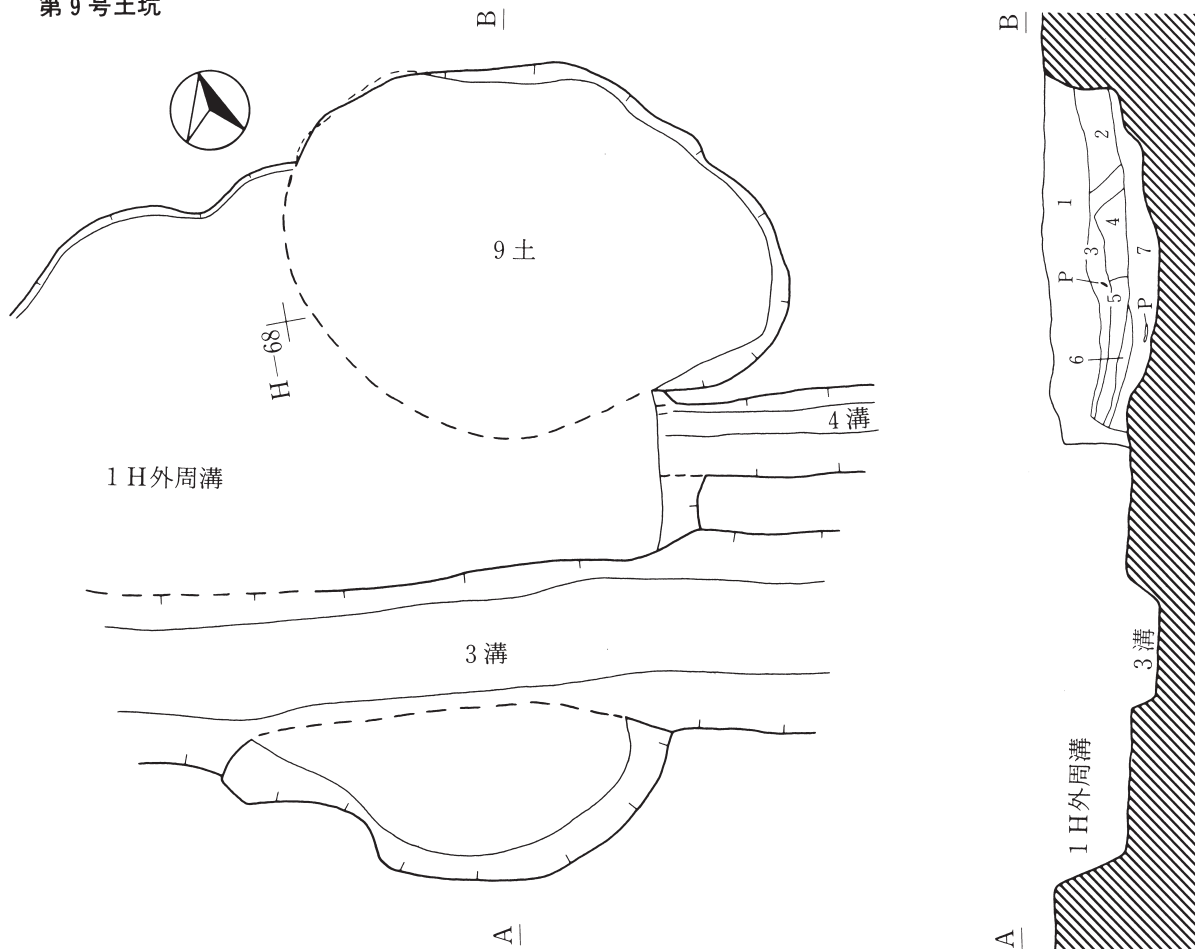


第8号土坑
 第1層 黒色土 10YR1.7/1ローム粒少量含む。
 第2層 黒色土 10YR2/1 ローム中量含む。
 第3層 黒色土 10YR2/1 ローム粒中量含む。
 第4層 黒色土 10YR2/1 ローム粒中量、浮石少量、黄褐色土、暗褐色土中量含む。

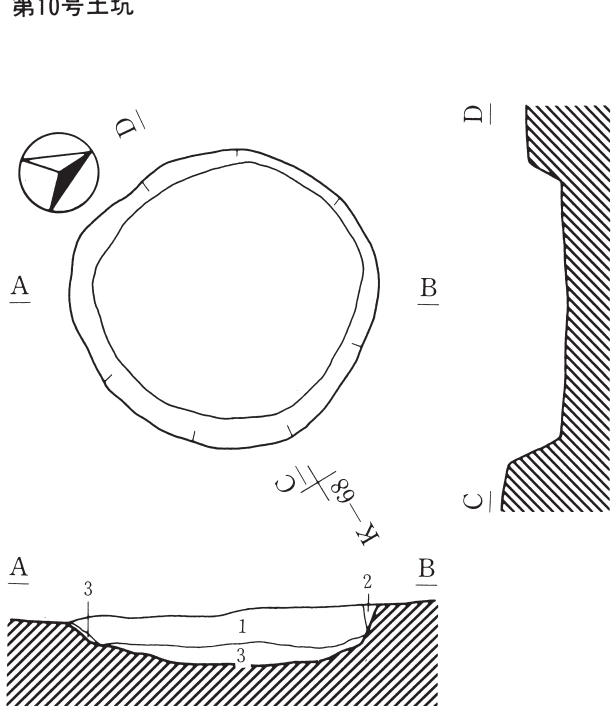
図7 第5～8号土坑



第9号土坑



第10号土坑



第9号土坑

- | | | | |
|-----|------|---------|-------------------------|
| 第1層 | 黒色土 | 10YR2/1 | ローム粒、L.B少量含む。 |
| 第2層 | 黒色土 | 10YR2/1 | ローム粒、L.B少量含む。 |
| 第3層 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | ローム粒、L.B、粘土BL、小礫微量含む。 |
| 第4層 | 黒色土 | 10YR2/1 | ローム粒、L.B少量、粘土粒、小礫微量含む。 |
| 第5層 | 黒褐色土 | 10YR3/2 | ローム粒、L.B中量、粘土BL、炭化物含む。 |
| 第6層 | 黒色土 | 10YR2/1 | ローム粒、L.B、粘土BL、炭化物、小礫含む。 |
| 第7層 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | ローム粒、炭化物微量、粘土BL多量含む。 |

第10号土坑

- | | | | |
|-----|------|-----------|---------------------|
| 第1層 | 黒色土 | 10YR1.7/1 | ローム粒少量、炭化物、小礫微量含む。 |
| 第2層 | 黄褐色土 | 10YR6/5 | 暗褐色土微量含む。 |
| 第3層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | ローム粒、粘土粒多量、炭化物中量含む。 |

0 2m

図8 第9・10号土坑

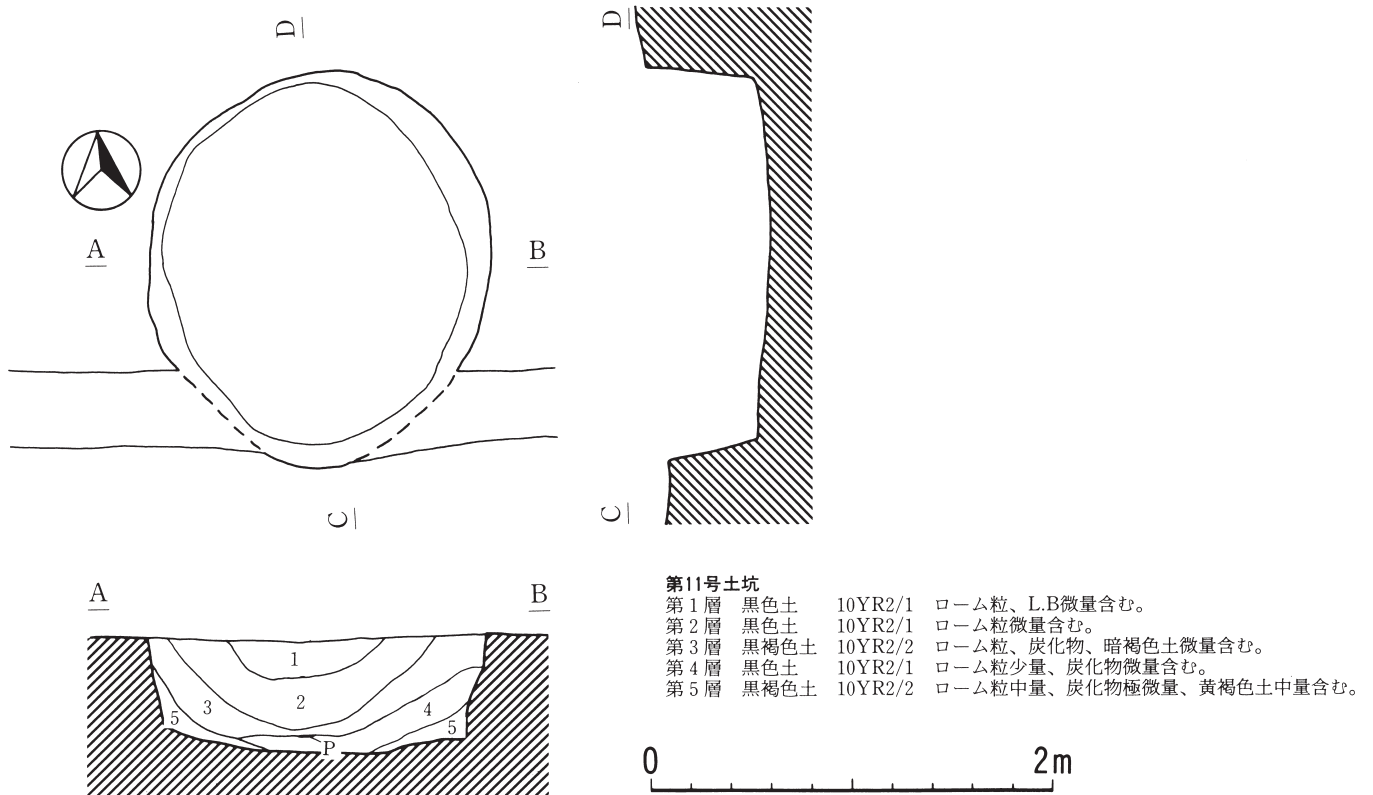


図9 第11号土坑

2 遺物

(1) 土器(図10・11)

総量は平箱で1箱程度と非常に少ないため、平安時代の遺構を含め、遺構内外出土の土器について一括して記述する。

第1群土器：縄文時代前期の土器

第2群土器：縄文時代後期の土器

第3群土器：縄文時代晩期の土器

第1群土器

縄文時代前期の土器を一括した。5は隆帯部分。6は胴部。ともに繊維を含む。大変磨滅が著しいが、2点とも円筒下層b式に属すると思われる。

第2群土器

縄文時代後期の土器を一括した。7は直線主体の入組文様。11は口縁部が磨かれ、2条の平行沈線を施文。ともに十腰内I式に比定されると思われる。1・2・3・13・14は粗製土器の口縁部。2は局部的に条痕がみられ、口唇部にススが付着する。1はRL、13は無節R、3・14は条痕を施文。8・9・10は十腰内II式に比定されると思われる。8・9は入組磨消縄文を施文し、沈線文に沿って連

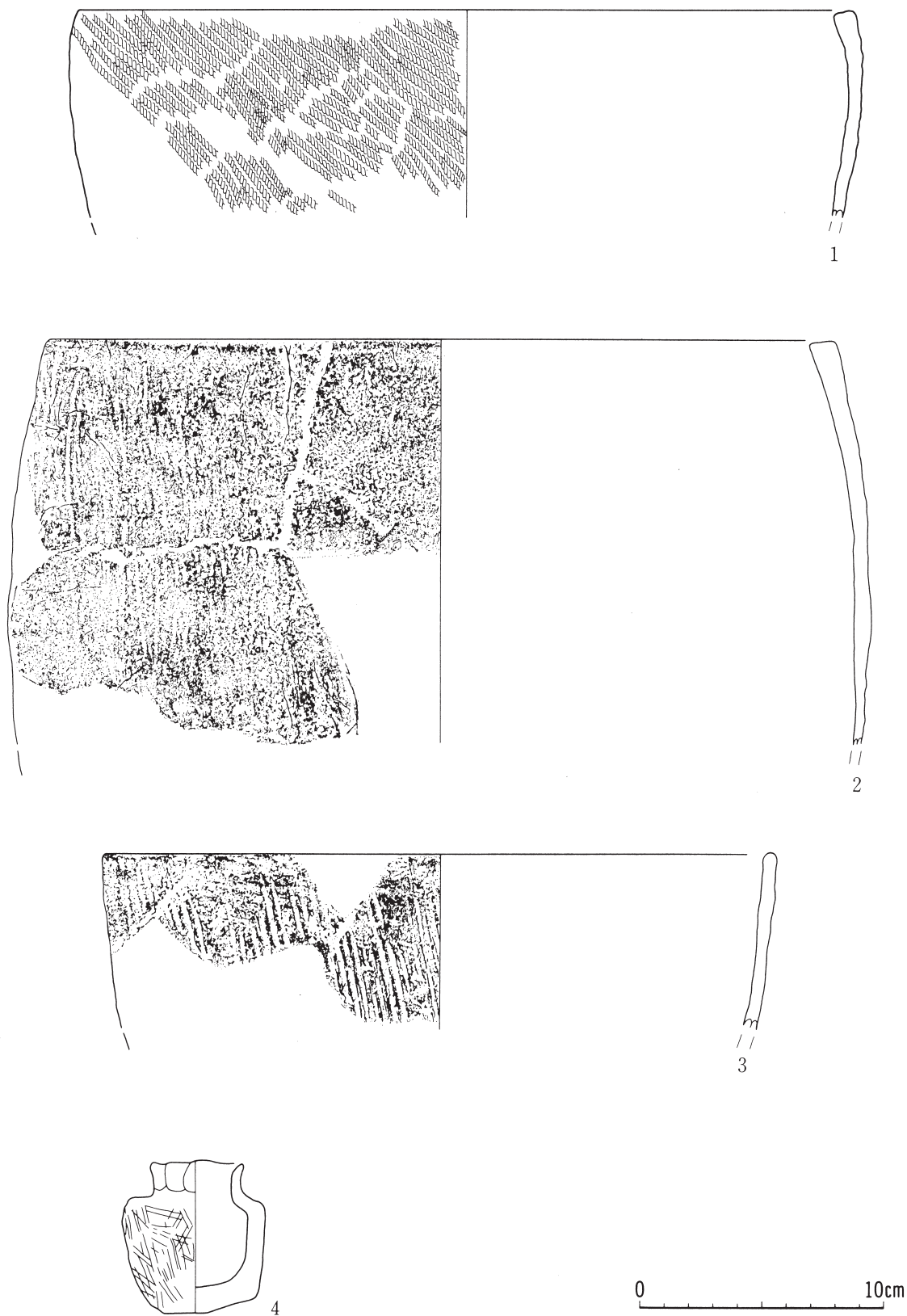


図10 縄文時代出土遺物(1)

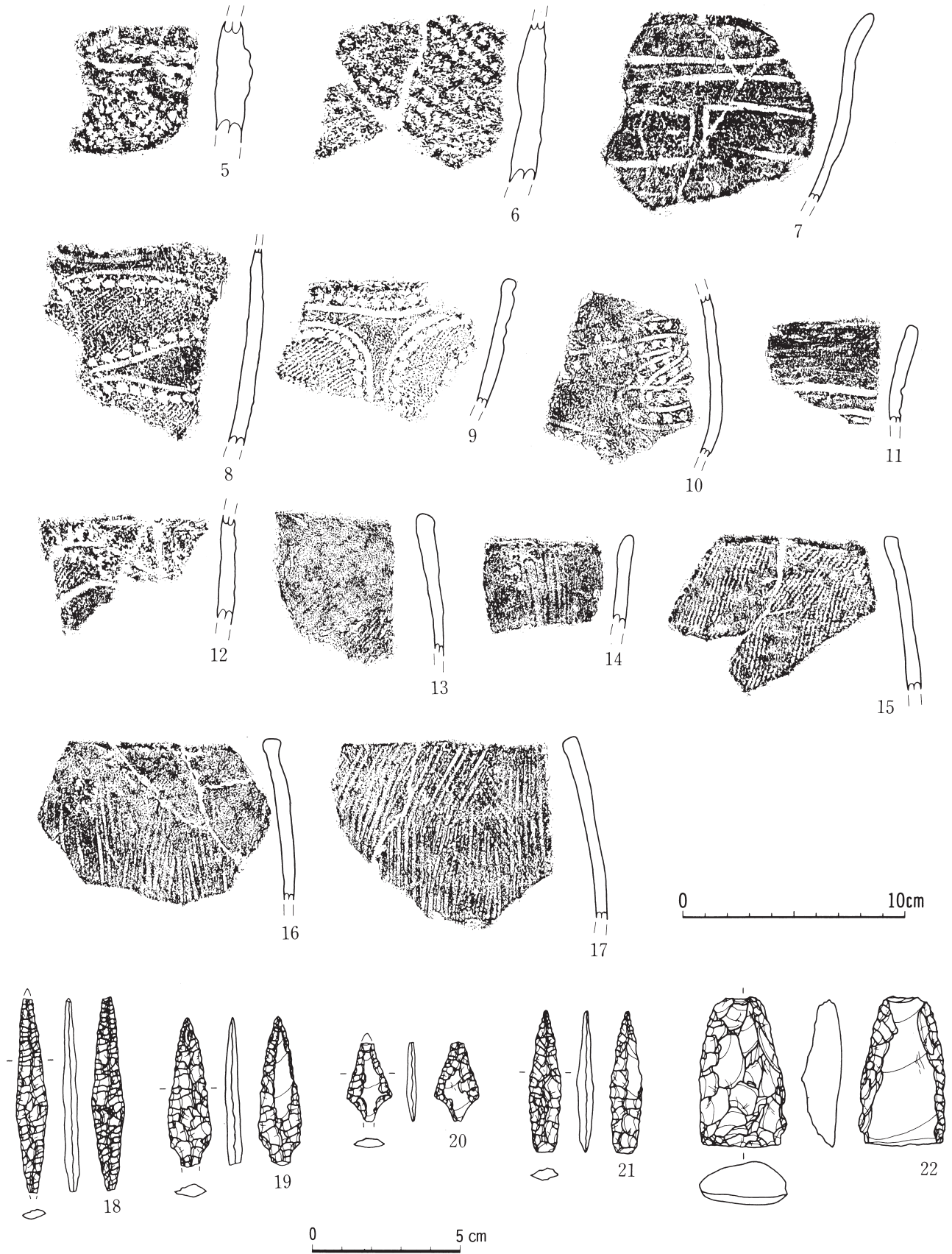


図11 縄文時代出土遺物(2)

続刺突文を施文。10は曲線の入組んだ沈線区画の中央に、直角方向からの竹管の刺突が連続して押捺される。12は入組磨消縄文。十腰内Ⅱ～Ⅲ式に比定されると思われる。4は完形の小型土器。全体に不整形である。器面全体に不規則な条痕を施文。時期は不明であるが、概ね後期のものと思われる。

第3群土器

縄文時代晩期の土器を一括した。15はLR縄文、16・17は条痕を施文。すべて晩期中～後葉に比定される粗製の深鉢であると思われる。

(2) 石器(図11)

出土した石器は6点のみある。石槍1点、石鏃4点、石篋1点が出土した。石質は全て珪質頁岩である。

石槍(図11-18)

細身で器体全面に細かな調整が施されている。

石鏃(図11-19~21)

石鏃は3点出土した。2は突起有茎、3は平基無茎、もう1点は先端部破片のため、実測し得なかった。

石篋(図11-22)

刃部形態は直線状をなし、主要剥離面の両側縁に調整が施されている。

(田澤賢治)

縄文時代出土遺物観察表

図版番号	部 位	出土位置	層位	外 面 文 様	備 考
図10-1	口縁部	4土	覆土	RL横位	
2	口縁部	2土	覆土	条痕文	
3	口縁部	3H	覆土	条痕文	
4	小型土器完形	7土	覆土		
図11-5	隆帯部破片	2H外周J-64	覆土	RL横位	繊維混入
6	胴部破片	2H外周L-64	覆土	RL横位	繊維混入
7	口縁部破片	F-24	Ⅲ	沈線文	
8	口縁部破片	1H外周J-70	覆土	RL横位、沈線文、刺突文	9と同一固体
9	口縁部破片	1H外周J-70	覆土	RL横位、沈線文、刺突文	8と同一固体
10	胴部破片	F-66	Ⅲ	沈線文、刺突文	
11	口縁部破片	J-58	Ⅲ	沈線 口縁部ミガキ	
12	胴部破片	1H外周J-70	覆土	沈線文、磨消	
13	口縁部破片	2H外周L-64	覆土	無節R縦位	
14	口縁部破片	I-58	Ⅲ	条痕文	
15	口縁部破片	K-59	Ⅲ	LR斜位	
16	口縁部破片	I-58	Ⅱ	条痕文	17と同一固体
17	口縁部破片	I-58	Ⅱ	条痕文	16と同一固体

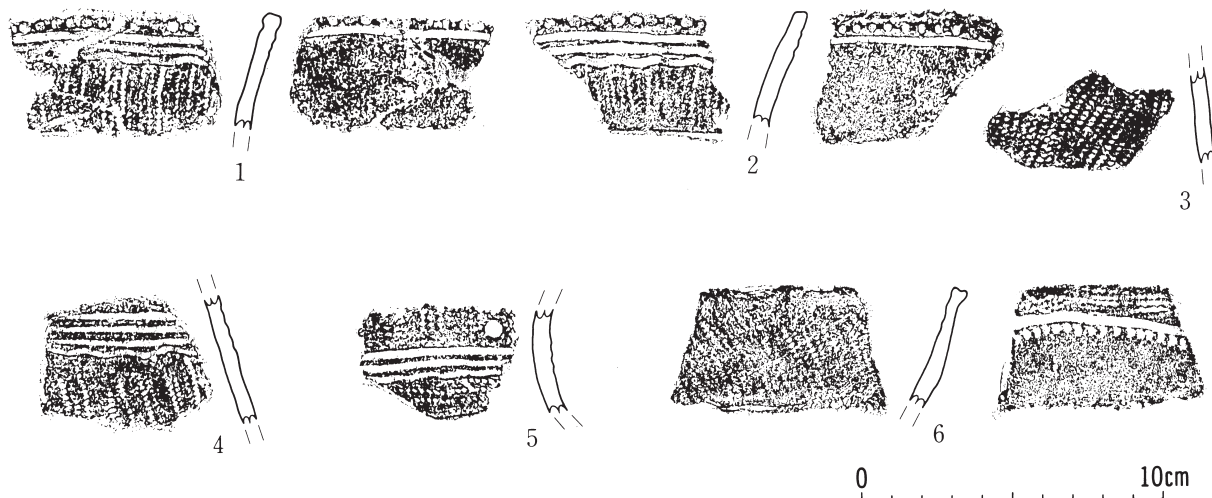
図版番号	器種	出土位置	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	備 考
図11-18	石槍	M-70	Ⅲ	65.0	11.0	5.0	3.2	珪質頁岩	
19	石鏃	H-36		51.0	15.0	5.0	3.4	珪質頁岩	凸基有茎
20	石鏃	5H覆土		27.0	15.0	3.5	1.2	珪質頁岩	凸基有茎
21	石鏃	O-41		49.0	11.0	6.0	2.4	珪質頁岩	平基有茎
22	石篋	M-52	Ⅱ	51.0	30.0	15.0	24.3	珪質頁岩	

第2節 弥生時代の遺物

弥生時代の土器(図12)

弥生時代の土器は6片のみ出土した。全て破片である。いずれも弥生時代中期後半から後期に比定されるものと思われる。1・2は口縁部で同一個体と思われる。口唇部上面に縄文を施文し、口唇部から刻目、2条の横走沈線の下に緩やかな波状文、縦走帯縄文、横走沈線の順に施文される。内面は口唇部刻目の下に1条の横走沈線。3・4は胴部。3は斜縄文、4は3条の横走沈線の下に波状文、縦走帯縄文を施文。5は頸部。縦走帯縄文、2条の横走沈線、緩やかな波状文、横走帯縄文の順に施文し、補修孔有り。6は口縁部。口唇部上面に連続刺突文を施し、表面には煮こぼれと思われるスス状の炭化物が付着する。内面は口唇部にR L縄文、1条の横走沈線に平行して連続刺突文が施文される。

(田澤賢治)



図版番号	部位	出土位置	層位	外面文様	備考
1	口縁部	N-25	II	刻目、沈線文、波状文、帯縄文	2と同一個体
2	口縁部	N-25	II	刻目、沈線文、波状文、帯縄文	1と同一個体
3	胴部	2H外周溝	覆土	R L縦位	
4	胴部	N-25	II	沈線文、波状文、帯縄文	
5	胴部	N-25	II	帯縄文、波状文、沈線文	補修孔有り
6	口縁部	L-29		口唇上面刺突文、R L横位	スス状炭化物付着、内面沈線、刺突

図12 弥生時代出土遺物

第3節 平安時代の遺構と遺物

1 竪穴住居跡

竪穴住居跡は6軒検出された。いずれも削平のために遺存状態は非常に悪く、壁が残存するのは第4号住居のみである。

第1号竪穴住居跡(図13~18)

[位置] G~J-67~70グリッドに位置する。

[重複] 住居跡に重複するものはないが、本住居跡に付属すると考えられる外周溝は、第9号土坑、第3号・第4号・第5号溝と重複する。新旧関係は、第9号土坑より新しい。第3号・第4号・第5号溝との関係は不明であるが、本遺構の方が古いと思われる。

[平面形・規模] 平面形は不明であるが、床面の遺物出土状況から、一辺5m程の方形を呈すると推定される。主軸方位はS-53°-E。

[壁・床面] 床面はやや起伏がある。壁は確認できなかった。

[壁溝] 検出されなかった。

[柱穴・ピット] 住居の床面と思われる範囲で5個、柱穴状のピットを検出した。ピット1・2・3・4は支柱穴と思われる。各ピットの深さは以下の通りである。

P₁…25.2cm・P₂…24.4cm・P₃…30.7cm・P₄…23.3cm・P₅…13.3cm

[カマド] 南東壁南寄りに位置するが、遺存状態は良くない。袖は羽口を芯材とし、粘土で構築され、燃焼部はよく焼けていた。火床面より若干の土師器が出土した。火床面に敷いていたと思われる。

[掘立柱建物跡] 検出状況より、本住居跡に付属するものと考えられる。柱穴状のピットを11個検出した。中間寸法は、南北方向では(P₆-7-8)が230cm+200cm、(P₁₀-11-12)が210cm+200cm、同様に東西方向では(P₆-13-12)が170cm+200cm、(P₈-9-10)が200cm+180cmである。各ピットの深さは以下の通りである。

P₆…11.5cm・P₇…27.7cm・P₈…14.2cm・P₉…9.6cm・P₁₀…11.5cm・P₁₁…25.0cm・

P₁₂…8.4cm・P₁₃…21.1cm・P₁₄…18.4cm・P₁₅…18.2cm・P₁₆…24.5cm・P₁₇…27.3cm

[外周溝] 検出状況より本住居跡に付属するものと考えられる。南東壁側が開いた「U」字形を呈するが、北側コーナー及び南西壁側の2箇所が溝が途切れている。深さは両端部で55~70cm、それ以外では27~35cm程度を計測する。第9号土坑、第3号・第4号・第5号溝と重複する。第9号土坑よりは新しく、第3号・第4号・第5号溝より古いと思われる。

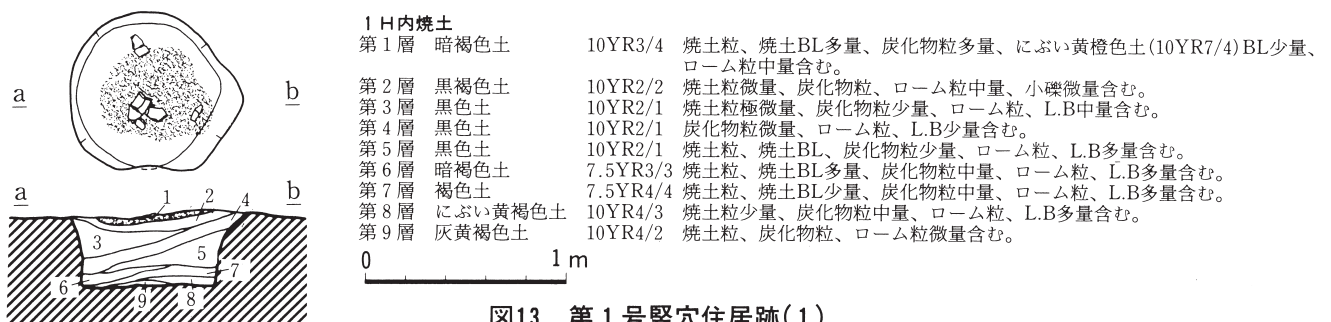


図13 第1号竪穴住居跡(1)

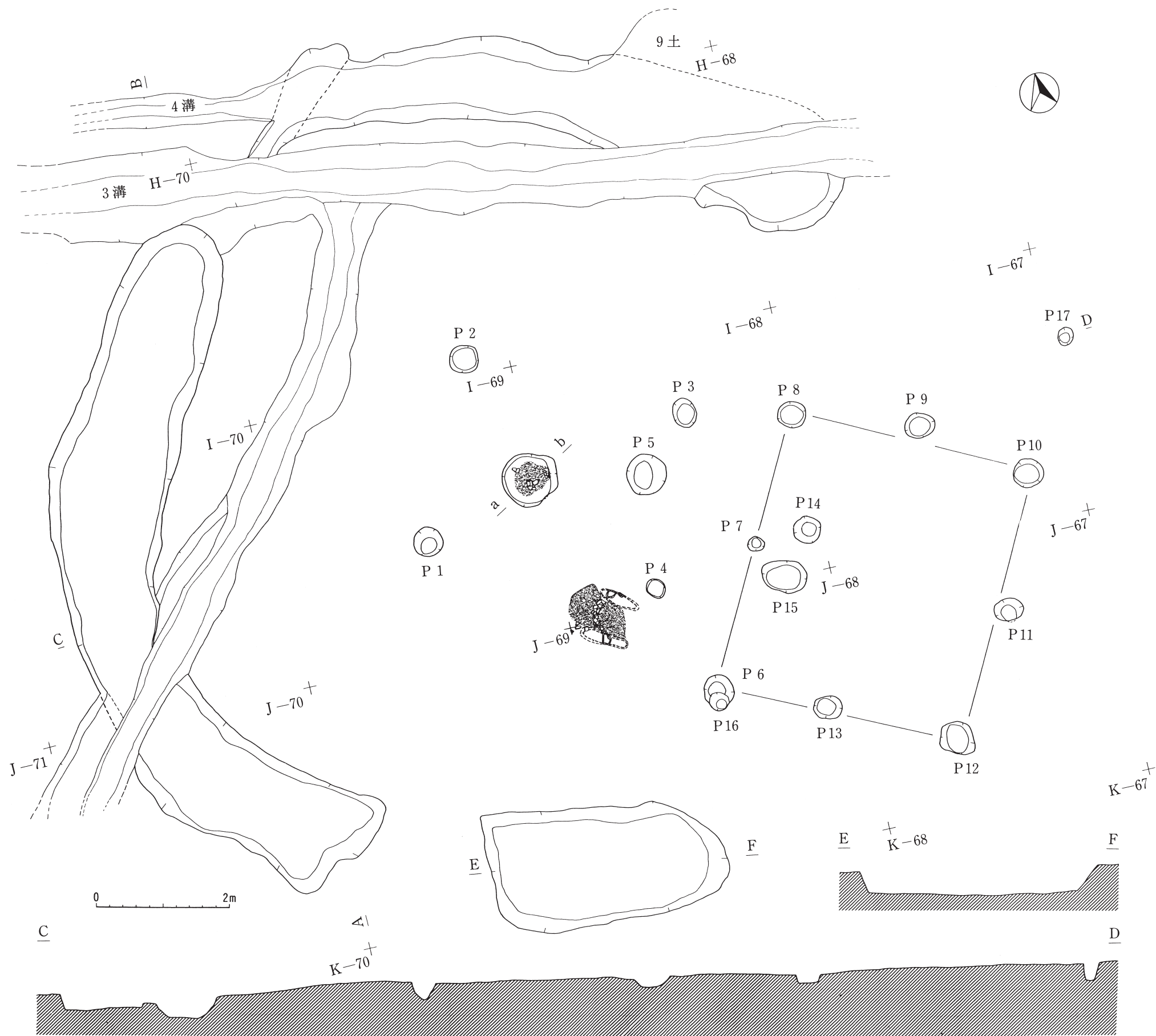
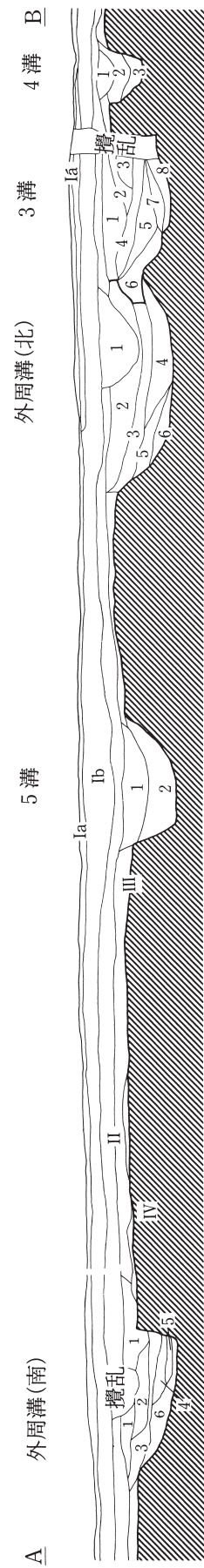


図14 第1号竖穴住居跡(2)



外周溝(南) 外周溝(北)

第1層 黒褐色土
第2層 黒褐色土
第3層 黒褐色土
第4層 黒褐色土
第5層 黒褐色土
第6層 褐色土

第1層 黒褐色土
第2層 黒褐色土
第3層 黒褐色土
第4層 黒褐色土
第5層 黒褐色土
第6層 黒褐色土
第7層 黒褐色土
第8層 黒褐色土

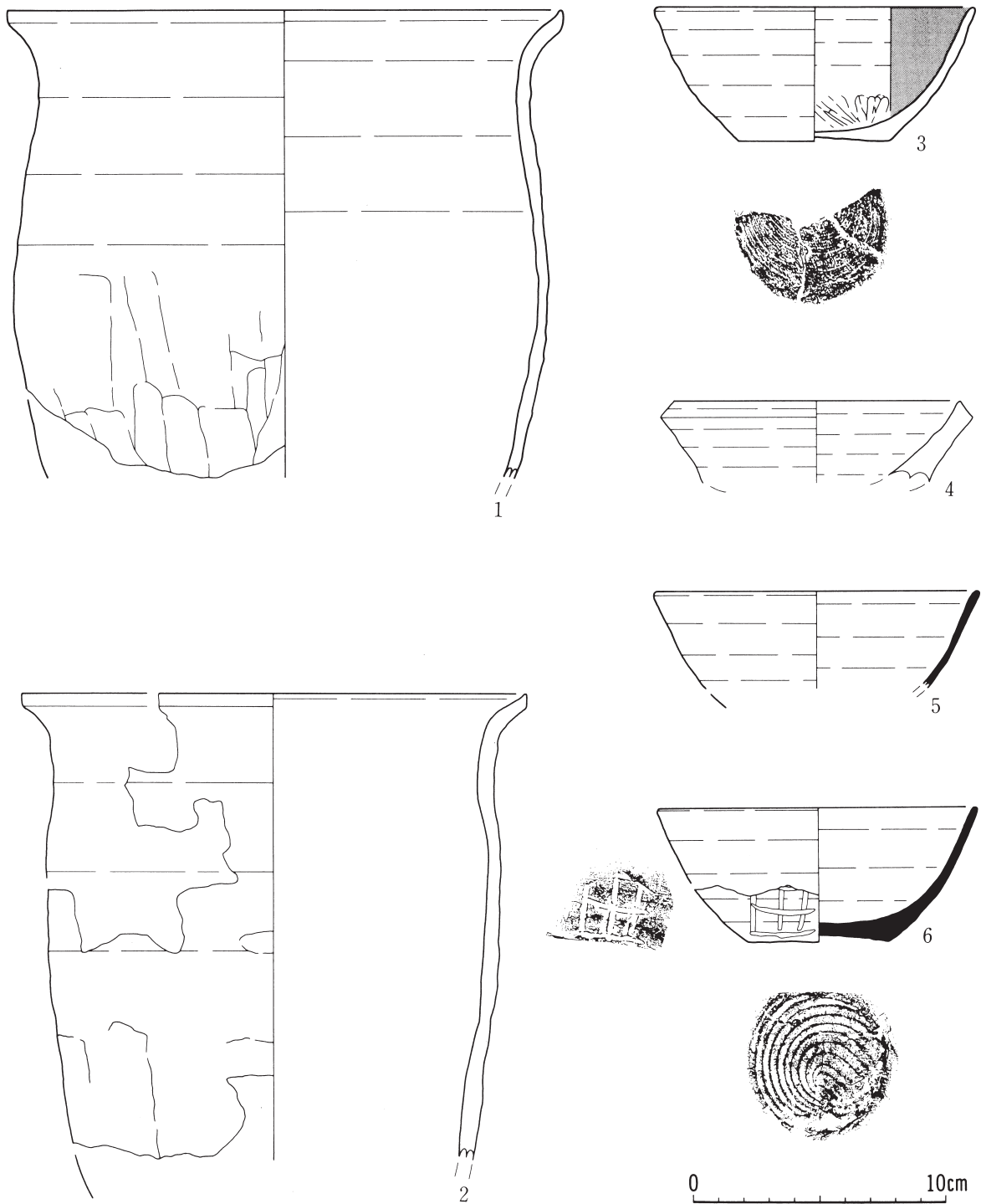
10YR2/2 10YR2/1
10YR2/2 10YR2/1
10YR2/1 10YR2/1
10YR2/1 10YR2/1
10YR4/6 10YR2/1
10YR2/1 10YR2/1
10YR2/1 10YR2/1

ローム粒、L.B中量、灰白色粘土BL微量含む。
ローム粒微量含む。
ローム粒微量含む。
ローム粒、L.B少量含む。
ローム粒、L.B少量含む。
黒色土多量含む。

ローム粒、L.B中量、炭化物、黒色土微量含む。
ローム粒、L.B微量、炭化物少量、焼土粒微量含む。
ローム粒、L.B中量、炭化物少量、焼土粒微量含む。
ローム粒少量、炭化物、焼土粒微量含む。
黒褐色土少量、灰白色粘土BL微量含む。

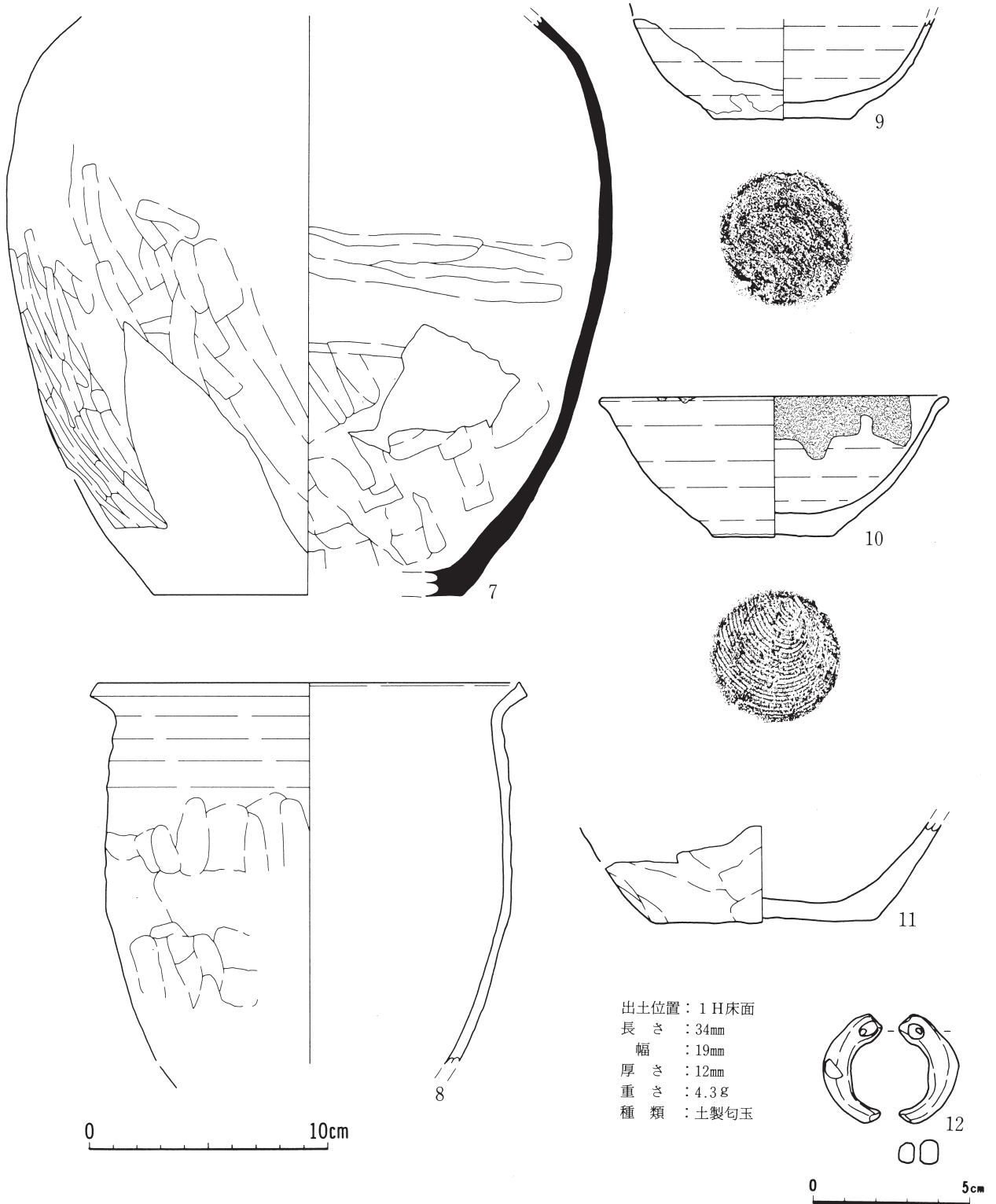
ローム粒、L.B中量、粘土類BI多量含む。
ローム粒、L.B少量、炭化物微量含む。
ローム粒、L.B、粘土粒少量、炭化物微量含む。
ローム粒、L.B、粘土粒中量、炭化物微量含む。

ローム粒、L.B中量、焼土粒微量、炭化物少量含む。
ローム粒、L.B少量含む。
ローム粒、L.B中量、黒褐色土少量含む。
ローム粒、L.B中量、焼土粒微量、炭化物微量含む。
黒褐色土中量含む。
黒褐色土少量含む。
黒褐色土少量含む。
黒褐色土少量含む。



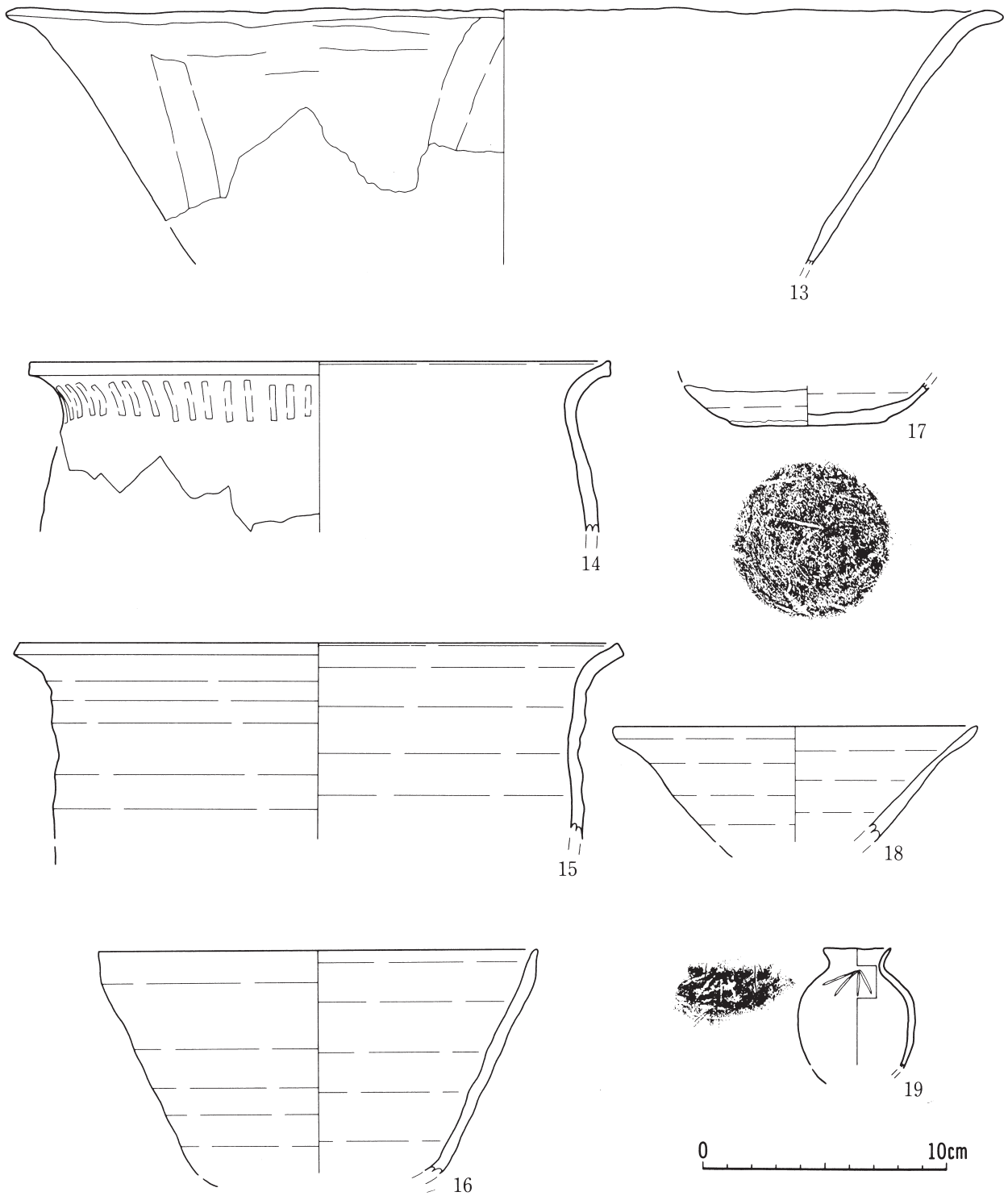
図版番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外 面	内 面	底 部	備 考
					口径	底径	器高				
1	土師器	甕	体部半分	カド火床面	(22.0)			ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ		
2	土師器	甕	体部半分	床面	(20.0)			ロクロ、ヘラケズリ			
3	土師器	坏	体部半分	床面	(12.8)	(6.0)	(5.3)	ロクロ	ロクロ、ヘラミガキ	回転系切	内面黒色処理
4	土師器	坏	口縁部	床面	(12.4)			ロクロ	ロクロ		
5	須恵器	坏	口縁部	床面	(13.0)			ロクロ	ロクロ		
6	須恵器	坏	体部半分	床面	(12.8)	5.6	5.2	ロクロ	ロクロ	回転系切	ヘラ書き

図15 第1号竪穴住居跡(3)



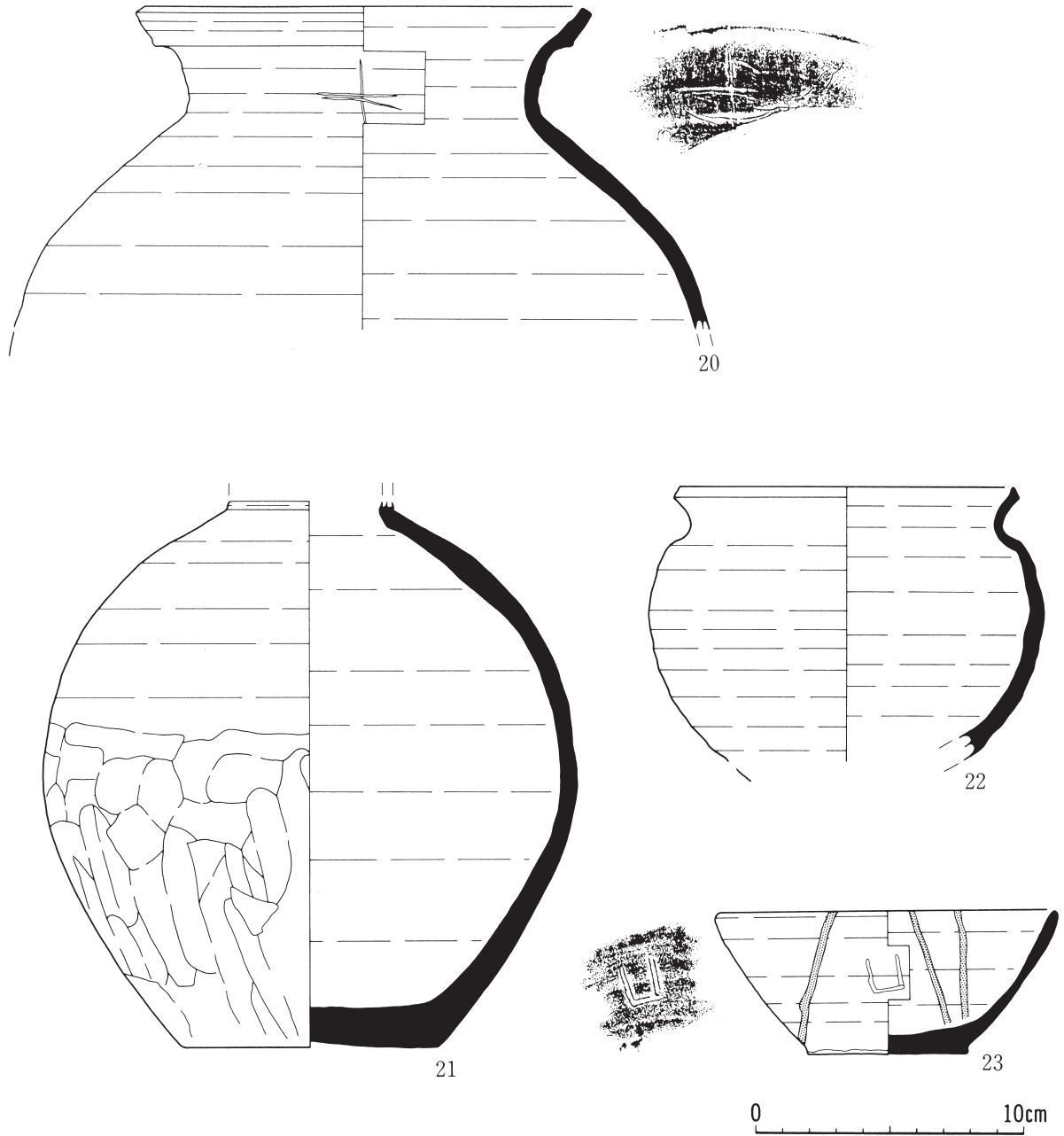
図版番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外 面	内 面	底 部	備 考
					口径	底径	器高				
7	須恵器	壺	体部半分	床面				ヘラナデ	ヘラケズリ		
8	土師器	甕	体部上半	外周溝	(18.4)			ロクロ、ヘラケズリ	ヘラナデ		
9	土師器	坏	底部	外周溝		5.8		ロクロ	ロクロ、ヘラナデ	回転系切	
10	土師器	坏	略完形	外周溝	(14.7)	5.0	5.9	ロクロ	ロクロ	回転系切	口縁部・内面黒色処理
11	土師器	甕	底部	外周溝		19.2		ヘラケズリ	ヘラナデ		

図16 第1号竪穴住居跡(4)



図版番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面	内面	底部	備考
					口径	底径	器高				
13	土師器	埴	体部上半	外周溝	(41.1)			ヘラナデ、ヘラケズリ			
14	土師器	壺	口縁部	外周溝	(24.0)			ヘラナデ	ヨコナデ		口縁部にヘラ痕
15	土師器	壺	口縁部	外周溝	(25.0)			ロクロ	ロクロ		
16	土師器	坏	体部半分	外周溝	(18.0)			ロクロ	ロクロ		
17	土師器	坏	底部	外周溝		(6.5)		ロクロ	ロクロ	回転系切	
18	土師器	坏	口縁部	外周溝	(15.0)			ロクロ	ロクロ		
19	土師器	小型土器	体部半分	外周溝	(2.8)						ヘラ書き

図17 第1号竪穴住居跡(5)



図版番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面	内面	底部	備考
					口径	底径	器高				
20	須恵器	壺	口縁・頸部	外周溝	(17.0)			ロクロ	ロクロ		ヘラ書き
21	須恵器	壺	胴部	外周溝				ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ		酸化焰焼成
22	須恵器	壺	体部半分	外周溝	(12.5)			ロクロ	ロクロ		
23	須恵器	坏	完形	外周溝	12.9	6.0	5.3	ロクロ	ロクロ		火ダスキ、ヘラ書き

図18 第1号竪穴住居跡(6)

[その他の施設]床面と思われる範囲の中央部からやや北寄りに、焼土を直径約80cm、深さ38cm程度の円形の落ち込みとして確認した。火を伴う作業用の施設と思われるが、鉄滓等は出土しなかった。

[堆積土]不明である。

[出土遺物]遺物は床面から土師器・須恵器片が53点出土したが、図示し得たのは6点である。また、土製勾玉が1点出土した。カマド火床面から土師器片が数点出土した。外周溝からはやや多量の土師器・須恵器が出土したが、その多くは南端からの出土である。図示し得たのは17点である。

第2号竪穴住居跡(図19～23)

[位置]J～M-63～66グリッドに位置する。

[重複]なし。

[平面形・規模]平面形は不明であるが、壁溝の残存部分から、一辺4.6m程度の方形を呈すると推定される。

[壁・床面]床面はほぼ平坦である。壁は確認できなかった。

[壁溝]北東壁で確認できた以外は、北西、南東壁に一部残存するのみである。残存部では、幅12～30cm、深さ6～11cmを計測する。

[柱穴・ピット]床面より2個、壁溝から2個のピットを検出した。ピット1・2は支柱穴と思われる。各ピットの深さは以下の通りである。

$P_1 \cdots 20\text{cm} \cdot P_2 \cdots 28\text{cm} \cdot P_3 \cdots 38\text{cm} \cdot P_4 \cdots 25\text{cm}$

[カマド]検出されなかった。

[掘立柱建物跡]検出状況より、本住居跡に付属するものと考えられる。柱穴状のピットを7個検出した。中間寸法は、南北方向では(P5-6)が380cm、(P8-9-10)が206cm+176cm、東西方向では(P5-11-10)で200cm+190cm、(P6-7-8)で200cm+200cmである。各ピットの深さは以下の通りである。

$P_5 \cdots 13\text{cm} \cdot P_6 \cdots 23\text{cm} \cdot P_7 \cdots 20\text{cm} \cdot P_8 \cdots 17\text{cm} \cdot P_9 \cdots 33\text{cm} \cdot P_{10} \cdots 23\text{cm} \cdot P_{11} \cdots 21\text{cm}$

[外周溝]検出状況より本住居跡に付属するものと考えられる。南東壁側に開いた「U」字形を呈するが、西側コーナーで溝が途切れている。南側の末端及び北西側中央部が瘤状に膨らみ、深さはそれぞれ64cm、60cm程度を計測する。他の深さは10～57cm前後である。

[堆積土]不明である。

[出土遺物]外周溝から土師器・須恵器が55点出土した。特に両末端に集中している。図示し得たのは30点である。

第3号竪穴住居跡(図24～27)

[位置]L～O-47～51グリッドに位置する。

[重複]第6号・第7号溝と重複しているが、本遺構が最も古い。

[平面形・規模]平面形は不整形を呈する。壁溝より推定して北壁300cm、東壁400cm、南壁350cm、西壁400cm程度と思われる。

[壁・床面]底面はほぼ平坦である。壁は確認できなかった。

[壁溝]各壁を全周し、幅14～48cm、深さ8～18cmを計測する。

[柱穴・ピット]検出されなかった。

[カマド]検出されなかった。

[外周溝]検出状況より本住居跡に付属するものと考えられる。南東側に開いた「U」字形を呈する。南側の末端部は深さ16～23cm程度の落ち込みがいくつも重なり合い、形状は明瞭でない。外周溝は重複して二重に巡っている。外側の溝が新しく、内側の溝を構築後、外側に拡張した可能性がある。南側半分は切り合いの状態が判別し難い。内側の溝の深さは11～30cm、外側の溝は深さ16～40cmで、全般に外側の方が深い。

[堆積土]確認できなかった。

[出土遺物]床面からは土師器甕が2点出土しただけである。外周溝からは土師器・須恵器が91点出土した。図示し得たのは22点である。

第4号竪穴住居跡(図28・29)

[位置]O・P-39・40グリッドに位置する。

[重複]なし。

[平面形・規模]平面形は方形を呈する。北東壁346cm、南東壁360cm、南西壁346cm、北西壁368cmを計測する。主軸方位はS-47°-E。

[壁・床面]底面はやや起伏がある。南隅付近は削平のためほとんど壁が確認できなかった。その他の壁は底面から急に立ち上がり、壁高は北東壁2.4～9cm、南東壁0.7～14.5cm、南西壁4.3～8cm、北西壁5～19.5cmである。

[壁溝]カマド及び西隅を除き全周する。幅4～8cm、深さ5～15cmを計測する。

[柱穴・ピット]西隅の壁溝の両末端部から2個のピットを検出した。各ピットの深さは以下の通りである。

$P_1 \cdots 24.8\text{cm}$ ・ $P_2 \cdots 14.5\text{cm}$

[カマド]南東壁の東寄りに位置しているが、遺存状態は良くない。袖はにぶい黄橙色土～黒褐色土で構築されている。焼土範囲は不明で、火床面と思われる範囲で焼土粒と炭化物が若干見られる程度である。煙道部は検出されなかった。

[その他の施設]床面中央部に長軸132cm、短軸108cm、深さ34cmの土坑(ピット3)を検出した。

[堆積土]24層に分層され人為堆積の様相を呈する。

[出土遺物]土師器・須恵器片が61点出土したが、図示し得たのは4点である。

第5号竪穴住居跡(図30・31)

[位置]G～I-24・25グリッドに位置する。

[重複]なし。

[平面形・規模]平面形は壁溝から推定して、北東壁460cm、南東壁460cm、南西壁500cm、北西壁480cm程度の方形を呈するものと思われる。主軸方位は不明であるが、火床面の位置からS-78°±α-Eと推定される。

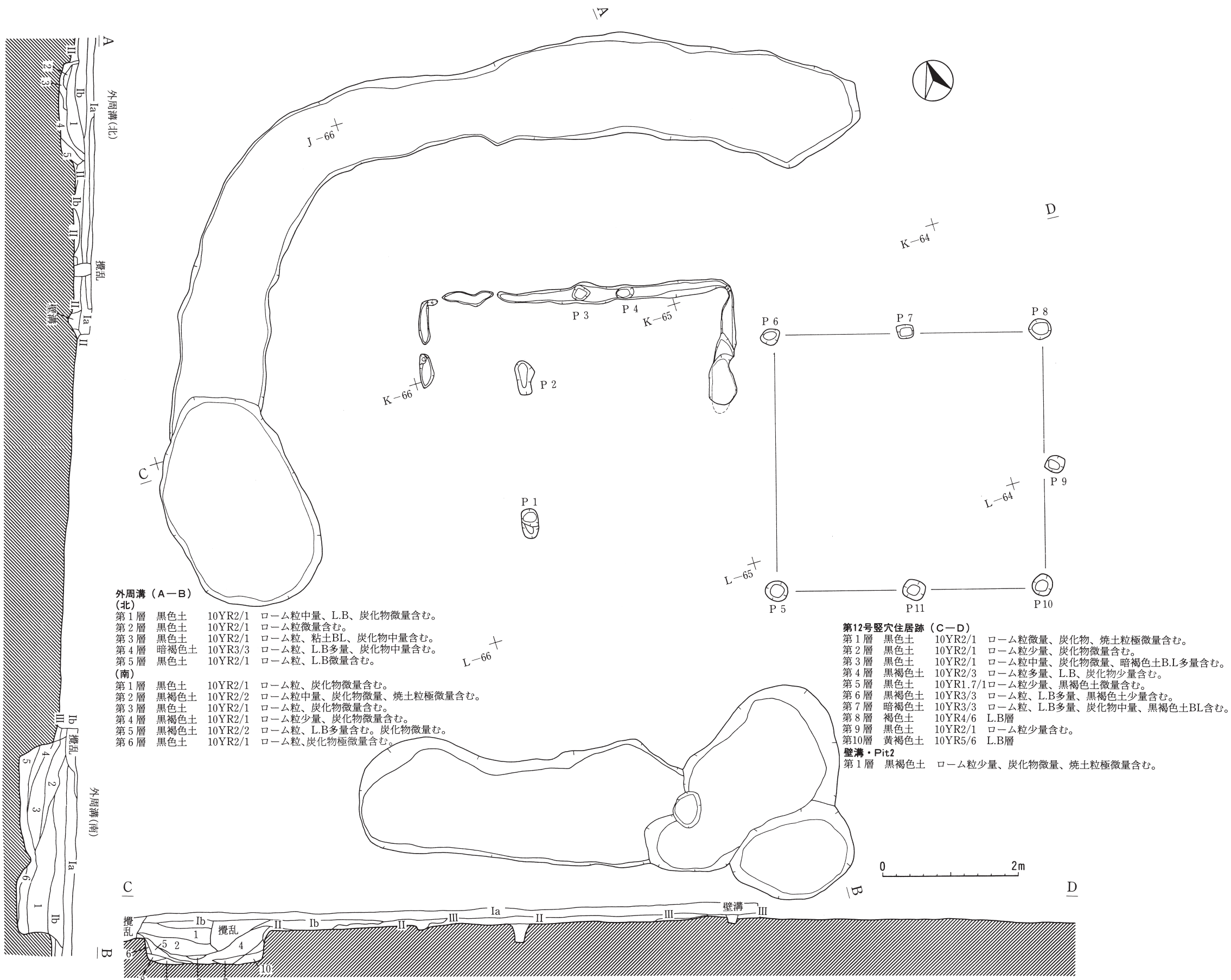
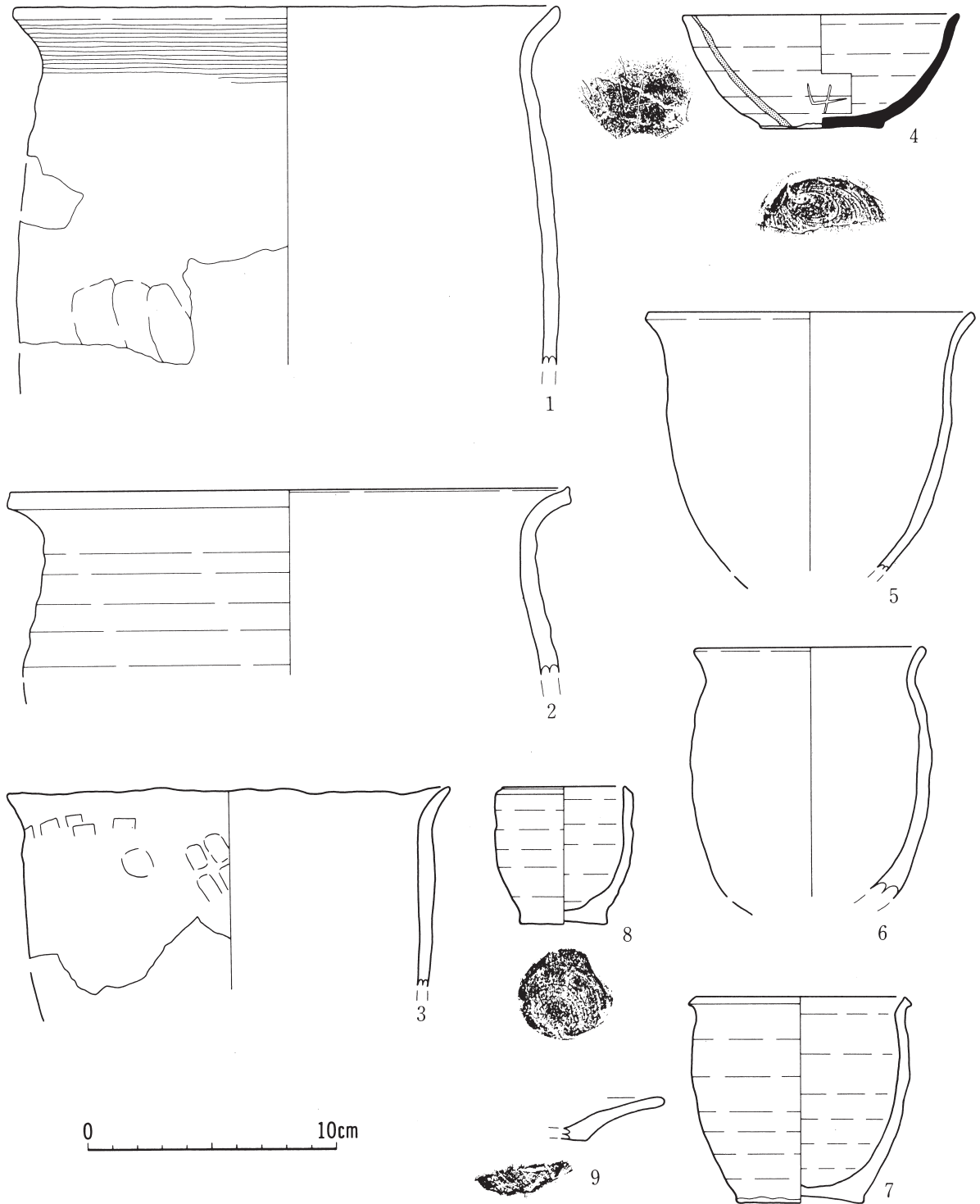
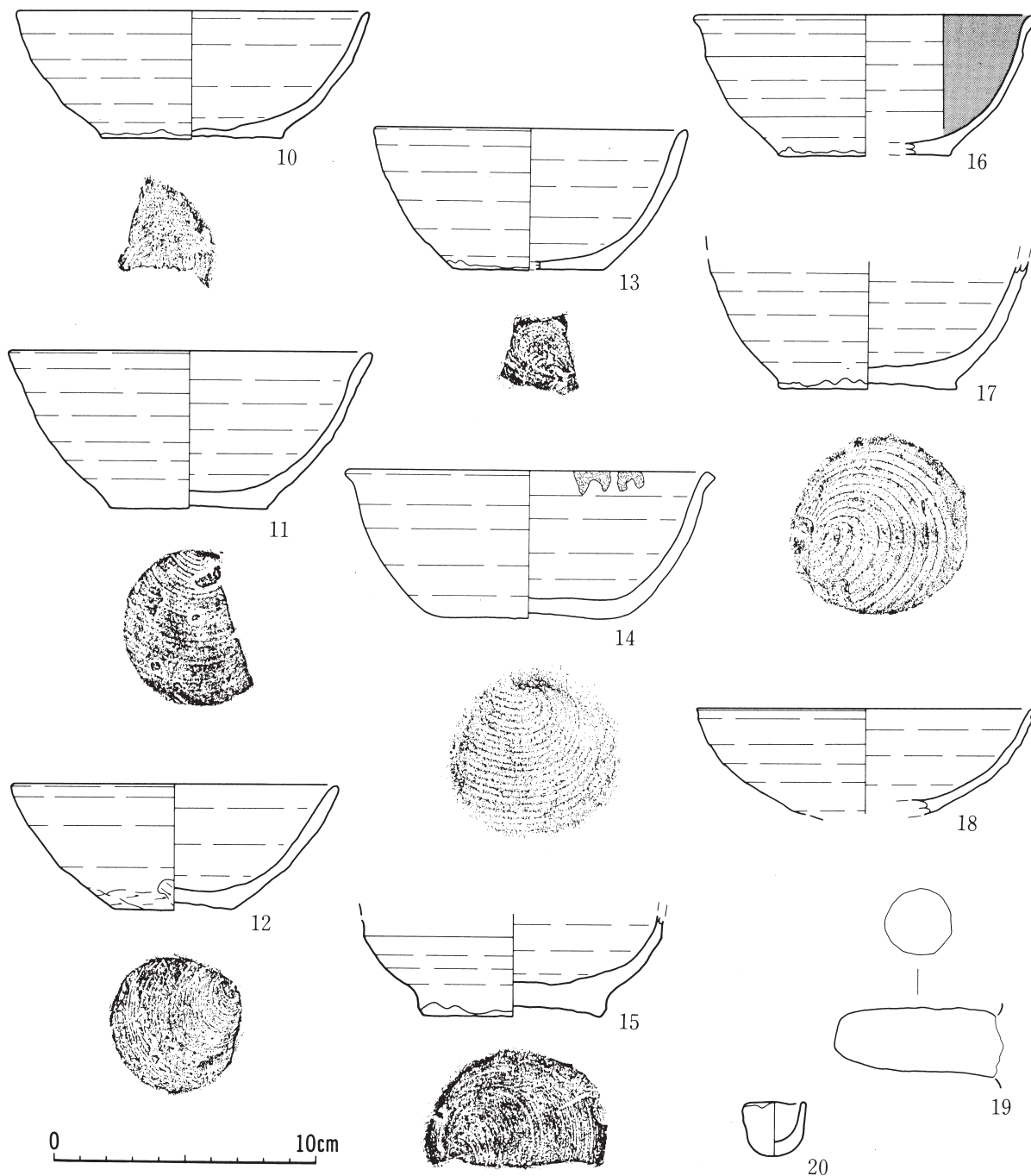


図19 第2号竪穴住居跡(1)



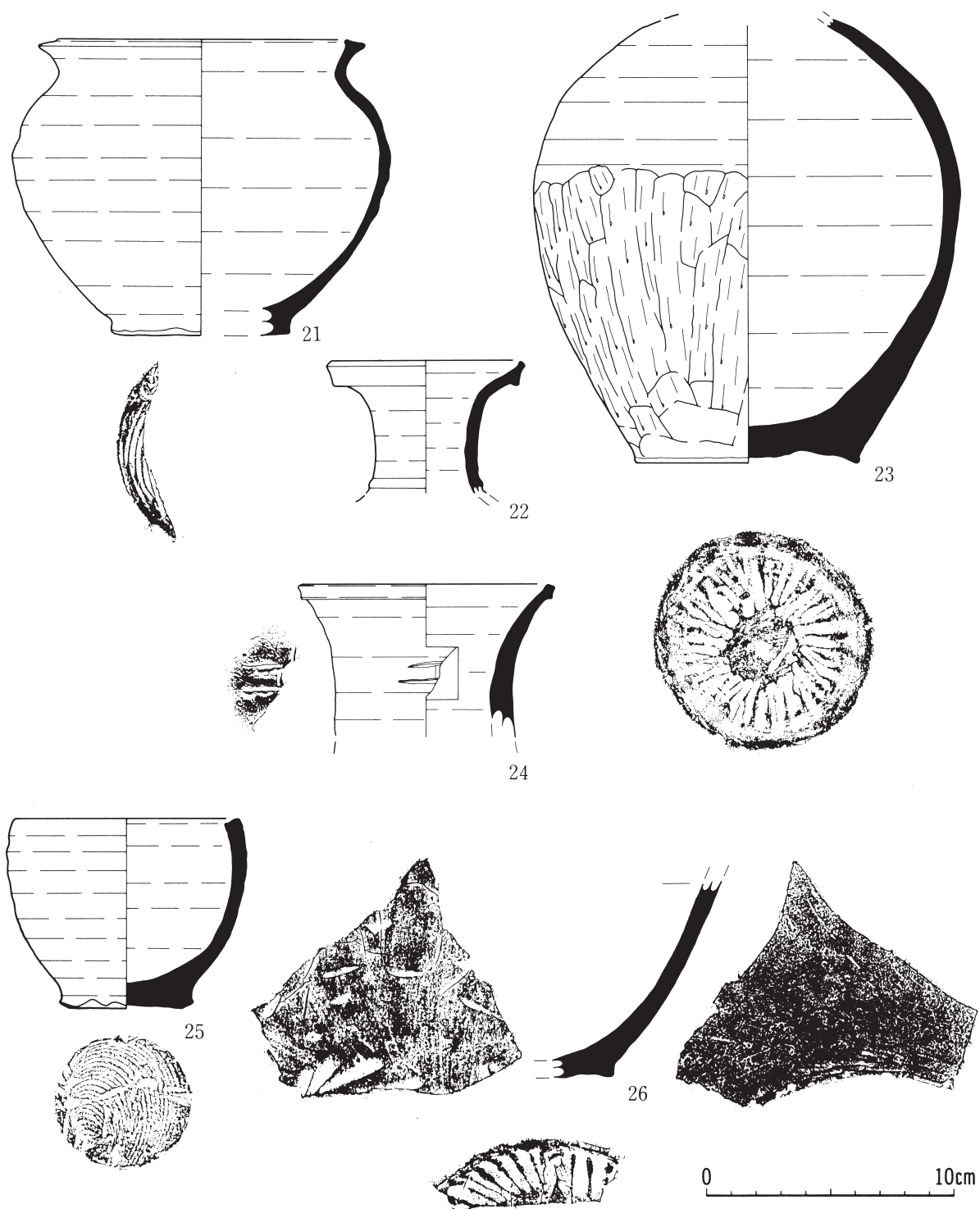
図版番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外 面	内 面	底 部	備 考
					口径	底径	器高				
1	土師器	甕	口縁部	外周溝	(14.5)			ヨコナデ、ヘラケズリ			
2	土師器	甕	口縁部	外周溝	(22.5)			ロクロ			
3	土師器	甕	口縁部	外周溝	(19.0)			ヘラケズリ			外面に指跡
4	須恵器	坏	体部半分	フク土	(11.2)	(5.0)	4.6	ロクロ	ロクロ	回転系切	火ダスキ、ヘラ書き
5	土師器	小甕	体部半分	外周溝	(13.4)						
6	土師器	小甕	体部半分	外周溝	(9.4)						
7	土師器	小甕	略完形	外周溝	(9.0)	5.0	8.3	ロクロ	ロクロ	回転系切	
8	土師器	小型土器	略完形	外周溝	(5.0)	(3.5)	5.5	ロクロ	ロクロ	回転系切	
9	土師器	皿	体部半分	外周溝			1.7	ロクロ	ロクロ		

図20 第2号竪穴住居跡(2)



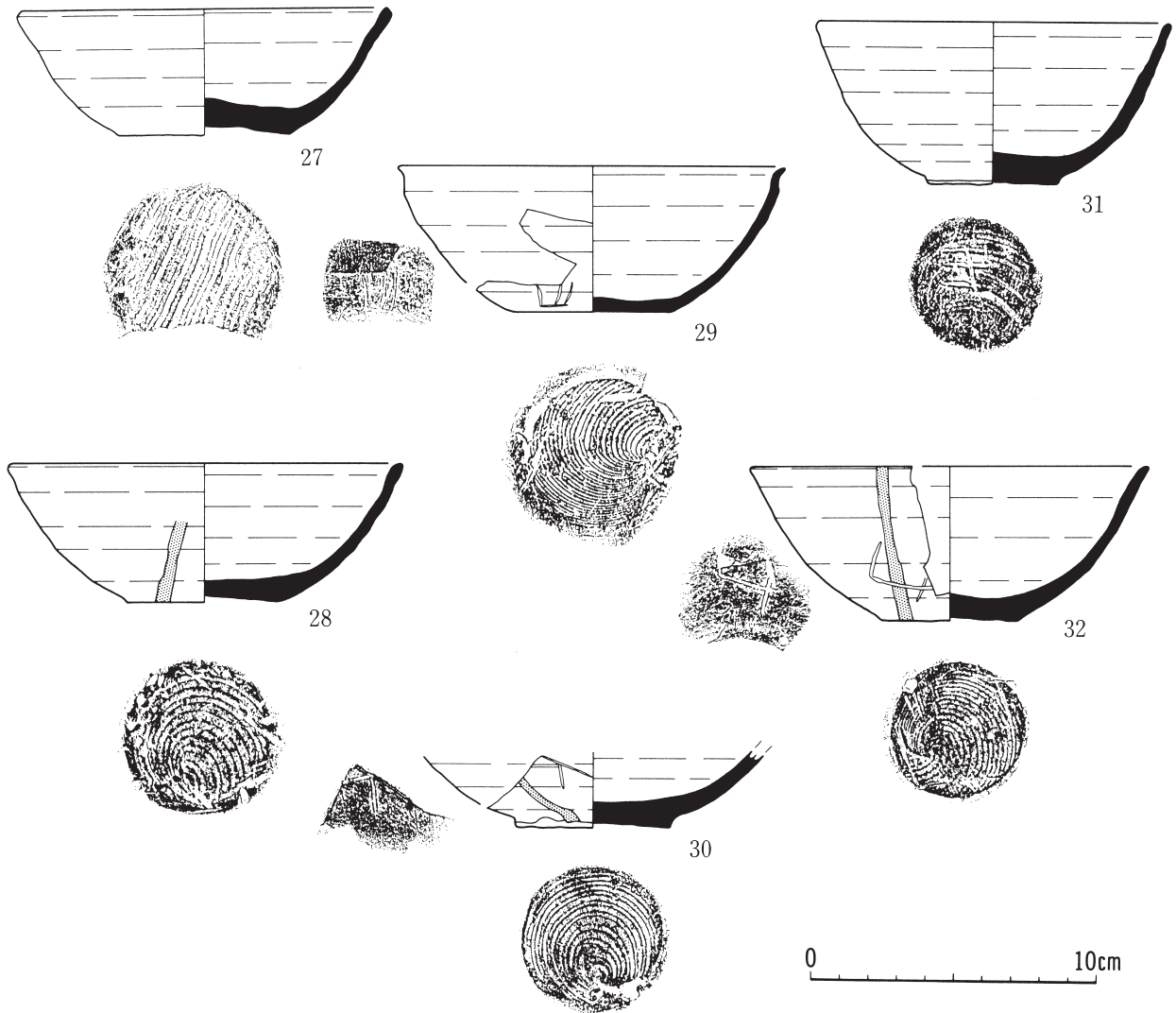
図版番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面	内面	底部	備考
					口径	器高	底径				
10	土師器	坏	体部半分	外周溝	(13.6)	(7.0)	4.9	ロクロ	ロクロ	回転系切	
11	土師器	坏	体部半分	外周溝	(14.0)	(6.0)	6.0	ロクロ	ロクロ	回転系切	
12	土師器	坏	略完形	外周溝	(12.6)	4.6	4.8	ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ	回転系切	
13	土師器	坏	体部半分	外周溝			5.4	ロクロ	ロクロ	回転系切	
14	土師器	坏	完形	外周溝	14.2	6.6	5.7	ロクロ	ロクロ	回転系切	内面スス
15	土師器	坏	底部	外周溝		(7.2)		ロクロ	ロクロ	回転系切	
16	土師器	坏	体部半分	外周溝	(13.2)	(6.6)	5.4	ロクロ	ロクロ、ヘラミガキ	回転系切	内面黒色処理
17	土師器	坏	底部	外周溝		6.8		ロクロ	ロクロ	回転系切	
18	土師器	坏	体部半分	外周溝	(13.0)			ロクロ	ロクロ		
19	土師器	把手付土器	把手	外周溝							
20	土師器	小型土器	体部半分	外周溝	(2.4)		2.1				

図21 第2号竖穴住居跡(3)



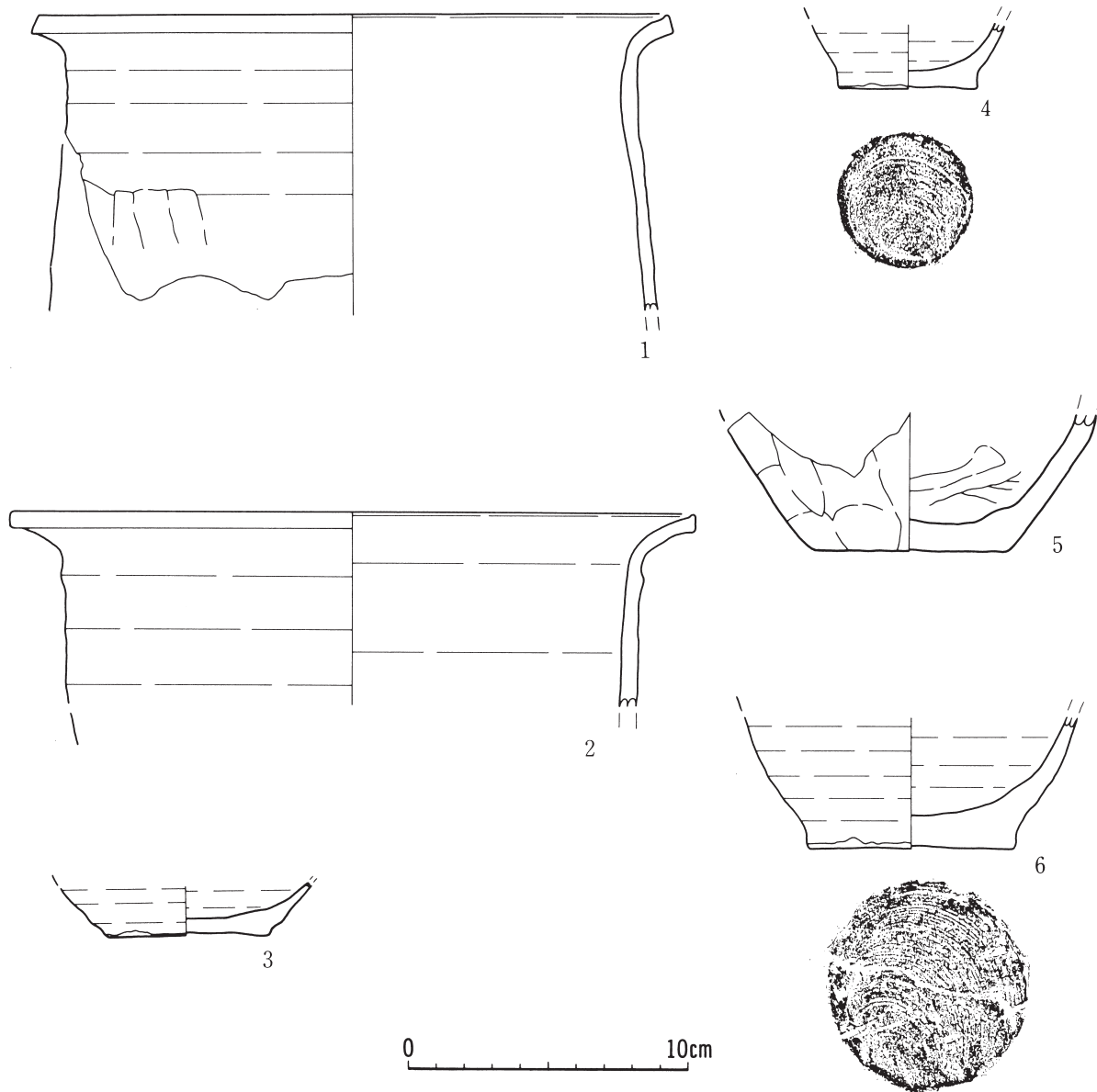
図版番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面	内面	底部	備考
					口径	底径	器高				
21	須恵器	小甕	体部半分	外周溝	(13.2)		(12.0)	ロクロ	ロクロ	回転系切	
22	須恵器	長頸壺	口縁・頸部	外周溝	(8.0)			ロクロ	ロクロ	ヘラ書	
23	須恵器	長頸壺	体部下半	外周溝		9.1		ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ	菊花文	酸化焰焼成
24	須恵器	長頸壺	口縁・頸部	外周溝	(10.4)			ロクロ	ロクロ	ヘラ書	
25	須恵器	無頸広口壺	略完形	外周溝	(9.1)	2.7	7.6	ロクロ	ロクロ	回転系切	
26	須恵器	壺	底部破片	外周溝				ヘラケズリ	ヘラケズリ	菊花文	

図22 第2号竖穴住居跡(4)



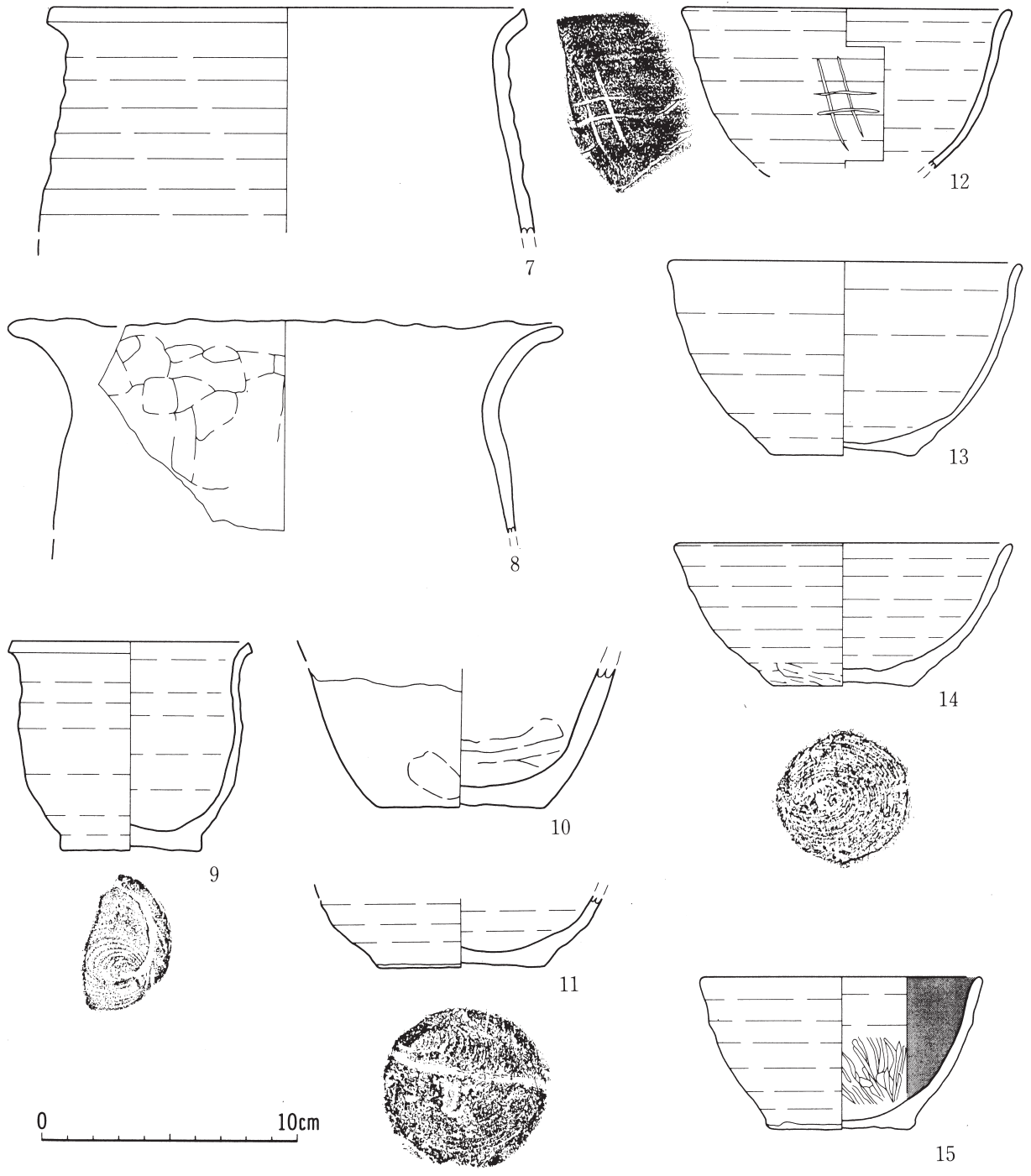
図版番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面	内面	底部	備考
					口径	底径	器高				
27	須恵器	坏	体部半分	外周溝	(13.2)	(6.0)	4.4	ロクロ	ロクロ	静止系切	
28	須恵器	坏	体部半分	外周溝	(13.8)	5.4	4.9	ロクロ	ロクロ	回転系切	火ダスキ
29	須恵器	坏	体部半分	外周溝	(13.5)	(5.6)	5.1	ロクロ	ロクロ	回転系切	ヘラ書き
30	須恵器	坏	底部	外周溝		(4.5)		ロクロ	ロクロ	回転系切	火ダスキ、ヘラ書き
31	須恵器	坏	体部半分	外周溝	(12.5)	4.5	5.7	ロクロ	ロクロ	回転系切	底部にヘラ書き
32	須恵器	坏	体部半分	外周溝	(14.0)	4.8	5.4	ロクロ	ロクロ	回転系切	火ダスキ、ヘラ書き

図23 第2号竖穴住居跡(5)



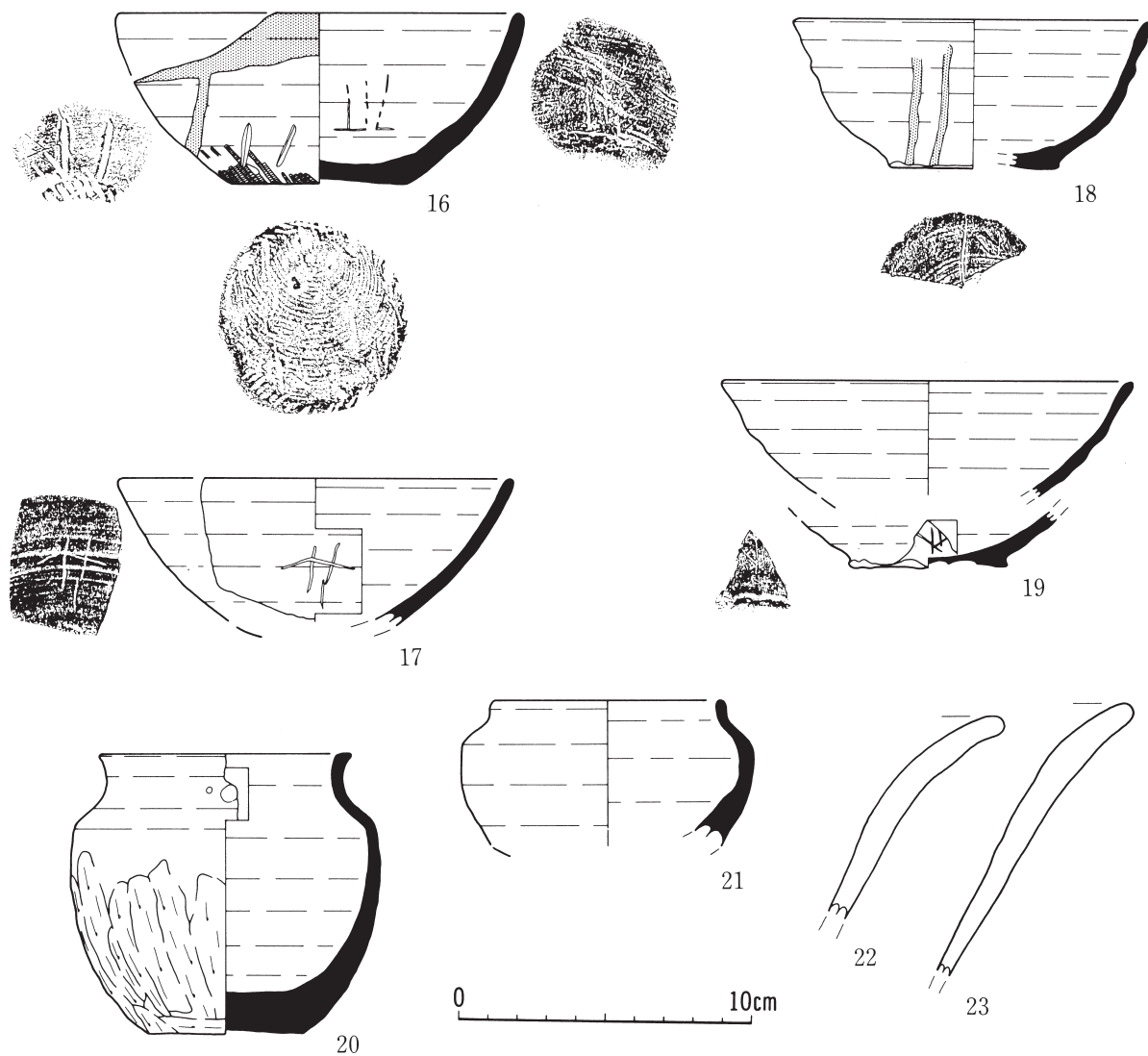
図版番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外 面	内 面	底 部	備 考
					口径	底径	器高				
1	土師器	甕	口縁部	外周溝	(22.6)			ロクロ、ヘラケズリ			
2	土師器	甕	口縁部	外周溝	(24.6)			ロクロ	ロクロ		
3	土師器	坏	底部	外周溝		5.8		ロクロ	ロクロ		
4	土師器	小甕	底部	外周溝		5.0		ロクロ	ロクロ	回転系切	
5	土師器	甕	底部	床面		7.0		ヘラケズリ	ヘラケズリ	砂底	
6	土師器	甕	底部	外周溝		7.5		ロクロ	ロクロ	回転系切	

図25 第3号竪穴住居跡(2)



図版番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面	内面	底部	備考
					口径	底径	器高				
7	土師器	甕	口縁部	外周溝	(18.6)			ロクロ			
8	土師器	甕	口縁部	外周溝	(22.0)			ヘラケズリ			
9	土師器	小甕	体部半分	外周溝	(5.5)	8.2		ロクロ	ロクロ	回転系切	
10	土師器	甕	体部下半	外周溝		6.6		ヘラケズリ	ヘラケズリ		
11	土師器	坏	底部	外周溝		6.6		ロクロ	ロクロ	回転系切	
12	土師器	坏	体部上半	外周溝	(13.0)			ロクロ	ロクロ		ヘラ書き
13	土師器	坏	体部半分	外周溝	(14.0)	5.8	7.6	ロクロ	ロクロ		
14	土師器	坏	体部半分	外周溝	(13.4)	(5.6)	5.7	ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ	回転系切	
15	土師器	坏	体部半分	外周溝		(5.6)		ロクロ	ロクロ、ヘラミガキ	回転系切	内面黒色処理

図26 第3号竪穴住居跡(3)



図版番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外 面	内 面	底 部	備 考
					口径	底径	器高				
16	須恵器	坏	体部半分	外周溝	(14.0)	6.0	5.9	ロクロ、タタキ目	ロクロ	回転系切	火ダスキ、内外面ヘラ書き
17	須恵器	坏	胴部	外周溝				ロクロ	ロクロ		ヘラ書
18	須恵器	坏	体部半分	外周溝	(12.4)	(5.3)	(5.2)	ロクロ	ロクロ	回転系切	火ダスキ、底部にヘラ書き
19	須恵器	坏	口縁・底部	外周溝		(5.4)		ロクロ	ロクロ	回転系切	ヘラ書き
20	須恵器	壺	体部半分	外周溝	(8.7)	5.4	9.6	ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ		頸部に穿孔有
21	須恵器	壺	体部上半	外周溝				ロクロ	ロクロ		
22	土師器	埴	体部上半	外周溝							
23	土師器	埴	口縁部	外周溝							

図27 第3号竖穴住居跡(4)

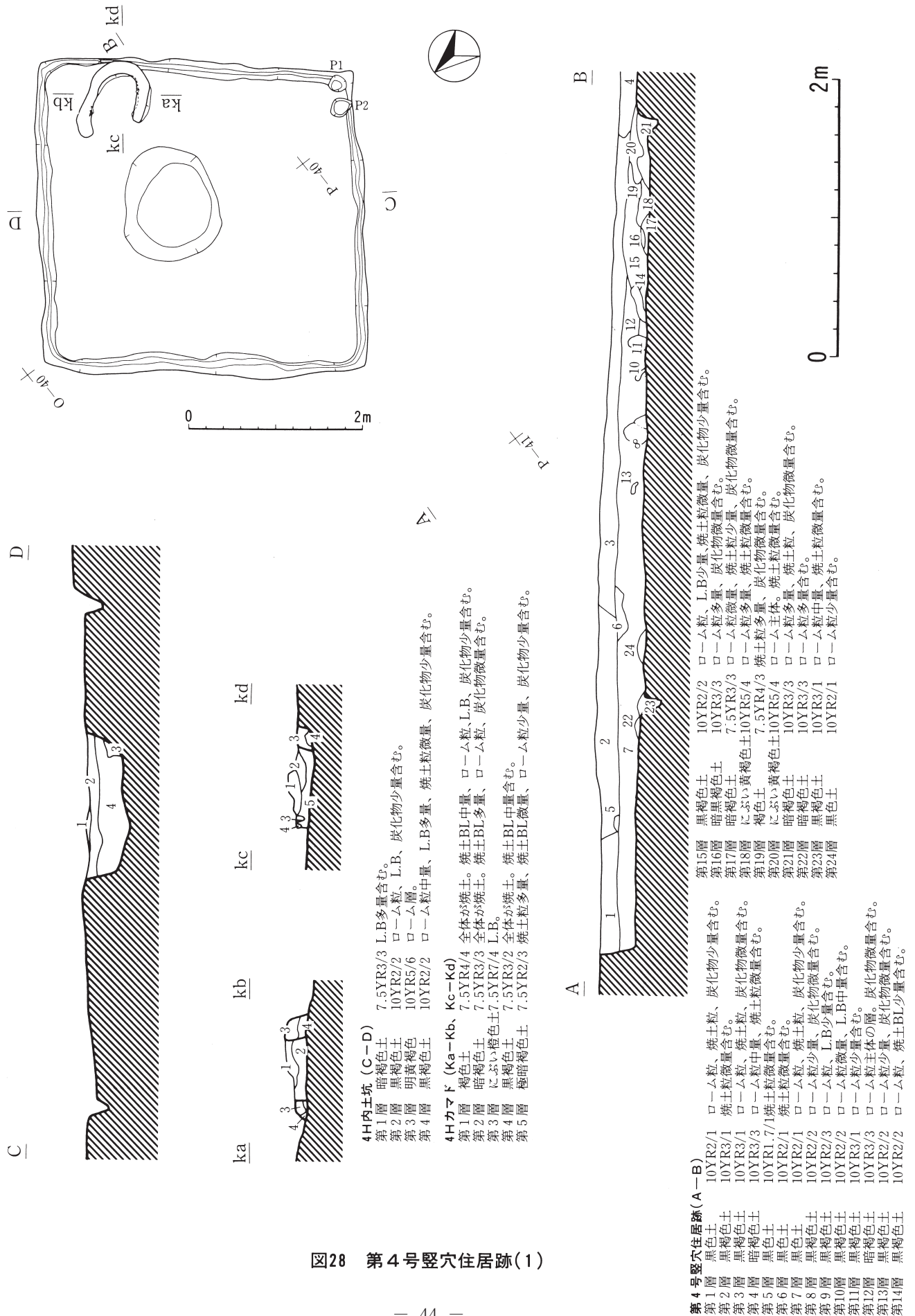
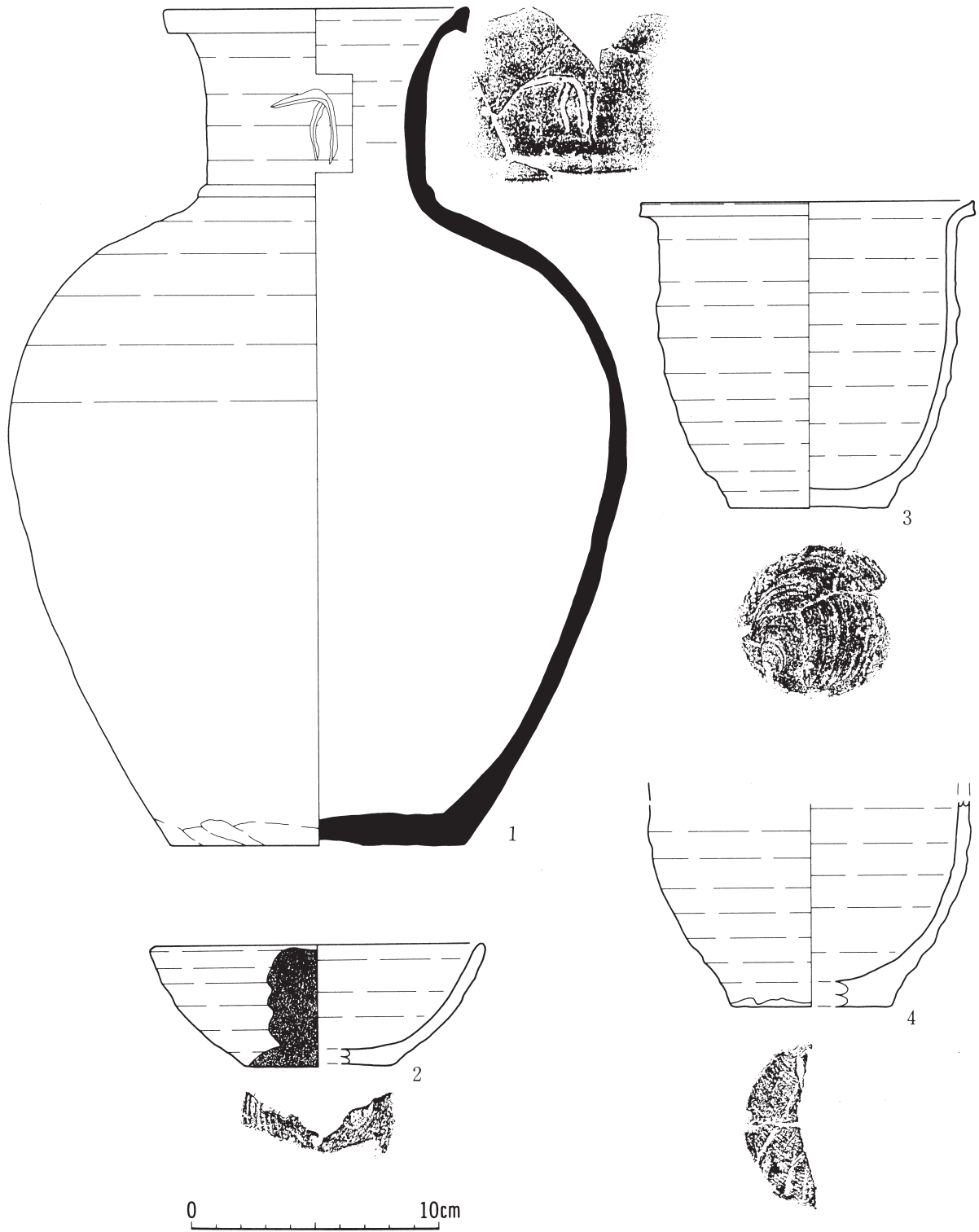
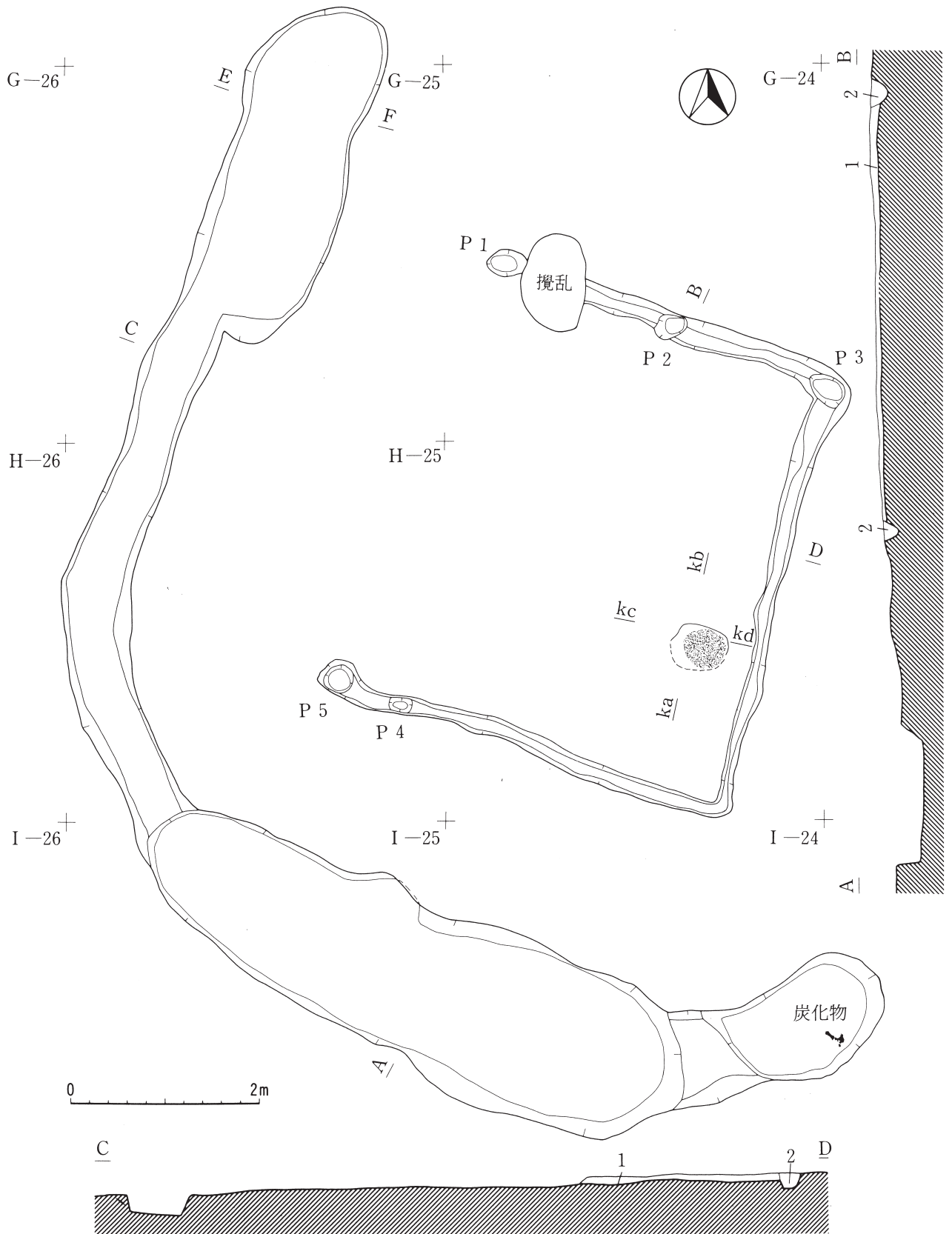


図28 第4号竪穴住居跡(1)



図版番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外 面	内 面	底 部	備 考
					口径	底径	器高				
1	須恵器	長頸壺	体部半分	フク土	(12.4)	(12.0)	(34.0)	ロクロ、ヘラナデ	ロクロ		頸部へら書き
2	土師器	坏	体部半分	フク土	(13.6)	(6.0)	4.9	ロクロ	ロクロ	回転系切	表面剥離
3	土師器	小甕	体部半分	床直	(13.6)	(6.5)	(12.3)	ロクロ	ロクロ	回転系切	
4	土師器	小甕	体部半分	フク土		(6.5)		ロクロ	ロクロ	回転系切	

図29 第4号竪穴住居跡(2)

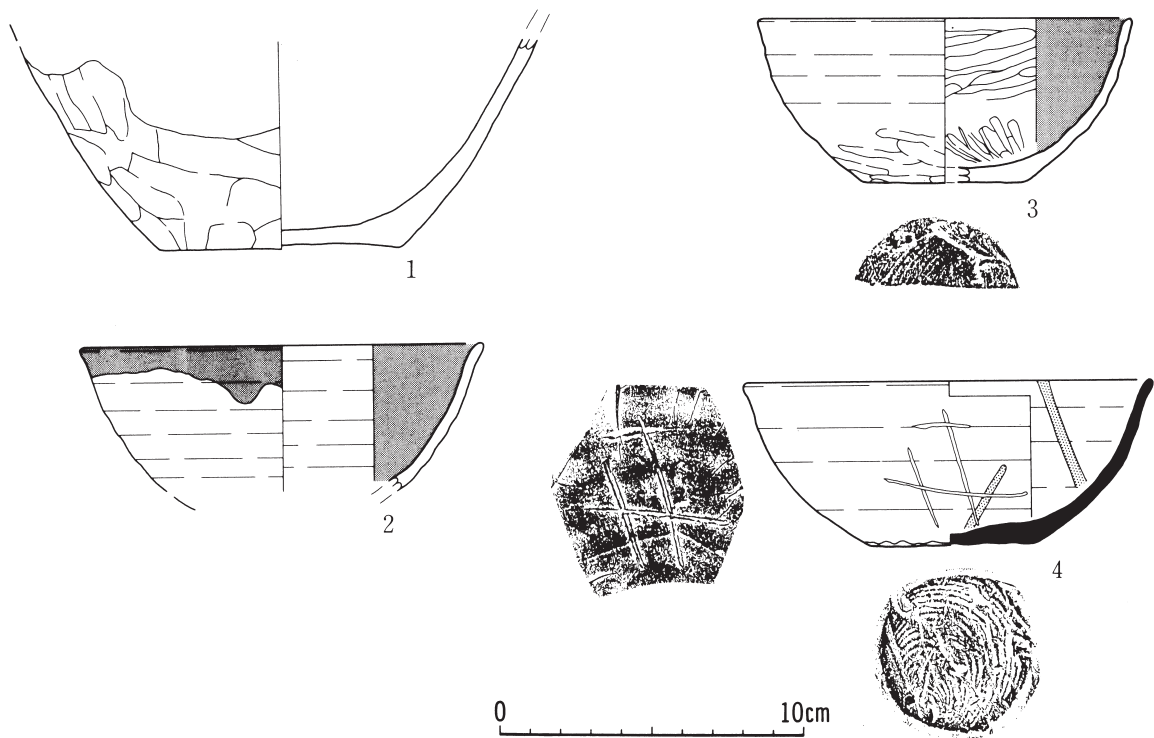
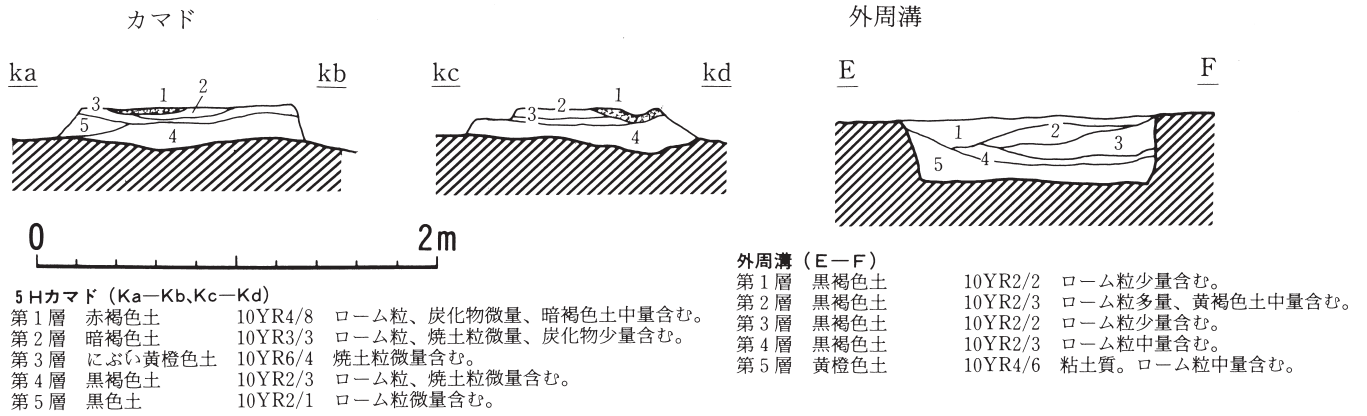


第5号竖穴住居跡 (A-B、C-D)

第1層 黒褐色土 10YR2/3 L.B少量、炭化物極微量含む。

第2層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒、L.B微量、炭化物微量含む。

図30 第5号竖穴住居跡(1)



図版番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外 面	内 面	底 部	備 考
					口径	底径	器高				
1	土師器	甕	底部	床面		8.0		ヘラズリ			
2	土師器	坏	口縁部	床面				ロクロ	ロクロ		口縁・内面黒色処理
3	土師器	坏	体部半分	床面	(12.4)	(5.4)	5.4	ロクロ、ヘラズリ	ヘラミガキ	回転系切	内面黒色処理
4	須恵器	坏	体部半分	外周溝	(13.6)		5.4	ロクロ	ロクロ	回転系切	火ダスキ、ヘラ書き

図31 第5号竪穴住居跡(2)

[壁・床面]底面はほぼ平坦である。壁は確認できなかった。

[壁溝]北西壁を除き全周する。幅12～34cm、深さ9～18cmを計測する。

[柱穴・ピット]壁溝から5個のピットを確認した。各ピットの深さは以下の通りである。

$P_1 \cdots 28\text{cm} \cdot P_2 \cdots 24.7\text{cm} \cdot P_3 \cdots 35\text{cm} \cdot P_4 \cdots 22.4\text{cm} \cdot P_5 \cdots 22.3\text{cm}$

[カマド]北東壁の南寄りに位置しているが、大部分が削平されており、遺存状態は悪い。火床面を検出しただけである。火床面は直径45cm前後のほぼ円形を呈している。

[外周溝]検出状況より本住居跡に付属するものと考えられる。東側に開いた半円形を呈する。両末端部は瘤状に膨らみ、深さは34cm前後を計測する。他の深さは11～34cm前後である。

[堆積土]不明である。

[出土遺物]床面から土師器片が8点出土したが、図示し得たのは3点である。また、流れ込みと思われる石鏃が1点出土した。外周溝からは須恵器片5点が出土したが、図示し得たのは1点である。

第6号竪穴住居跡(図32・33)

[位置]G～I-14～16グリッドに位置する。

[重複]重複は見られないが、外周溝とは別の溝が重複している可能性がある。

[平面形・規模]平面形は長方形を呈する。壁は不明であるが、壁溝より推定して、北東壁340cm、南東壁420cm、南西壁330cm、北西壁400cm程度と思われる。

[壁・床面]床面はやや起伏がある。壁は確認できなかった。

[壁溝]各壁の直下で全周するものと思われる。幅4～20cm、深さ3～16cmを計測する。

[柱穴・ピット]壁溝の各隅から1個ずつ、4個のピットを検出した。各ピットの深さは以下の通りである。

$P_1 \cdots 26.4\text{cm} \cdot P_2 \cdots 18.8\text{cm} \cdot P_3 \cdots 23.5\text{cm} \cdot P_4 \cdots 36.6\text{cm}$

[カマド]検出されなかった。

[外周溝]検出状況より本住居跡に付属するものと考えられる。南東壁側に開いた「U」字形を呈するが、北・西側両コーナーで溝が途切れている。北東壁側に、長軸76cm、短軸62cm、深さ33cm程度の落ち込みを検出した。他の深さは15～40cm前後である。また、南西側の溝は北西方向に延びているが、別の溝と重複している可能性がある。

[堆積土]不明である。

[出土遺物]床面から土師器埴が1点出土した。

2 溝跡

平安時代のものと思われる溝跡は2本検出された。第1号溝はF～O-17グリッドに位置する。掘り込みが非常に浅く、平面形も不明瞭であったが、覆土中に白頭山苦小牧火山灰と思われる火山灰を含んでいた。第2号溝はF～H-51～53グリッドに位置し、底面より土師器坏が1点出土した。

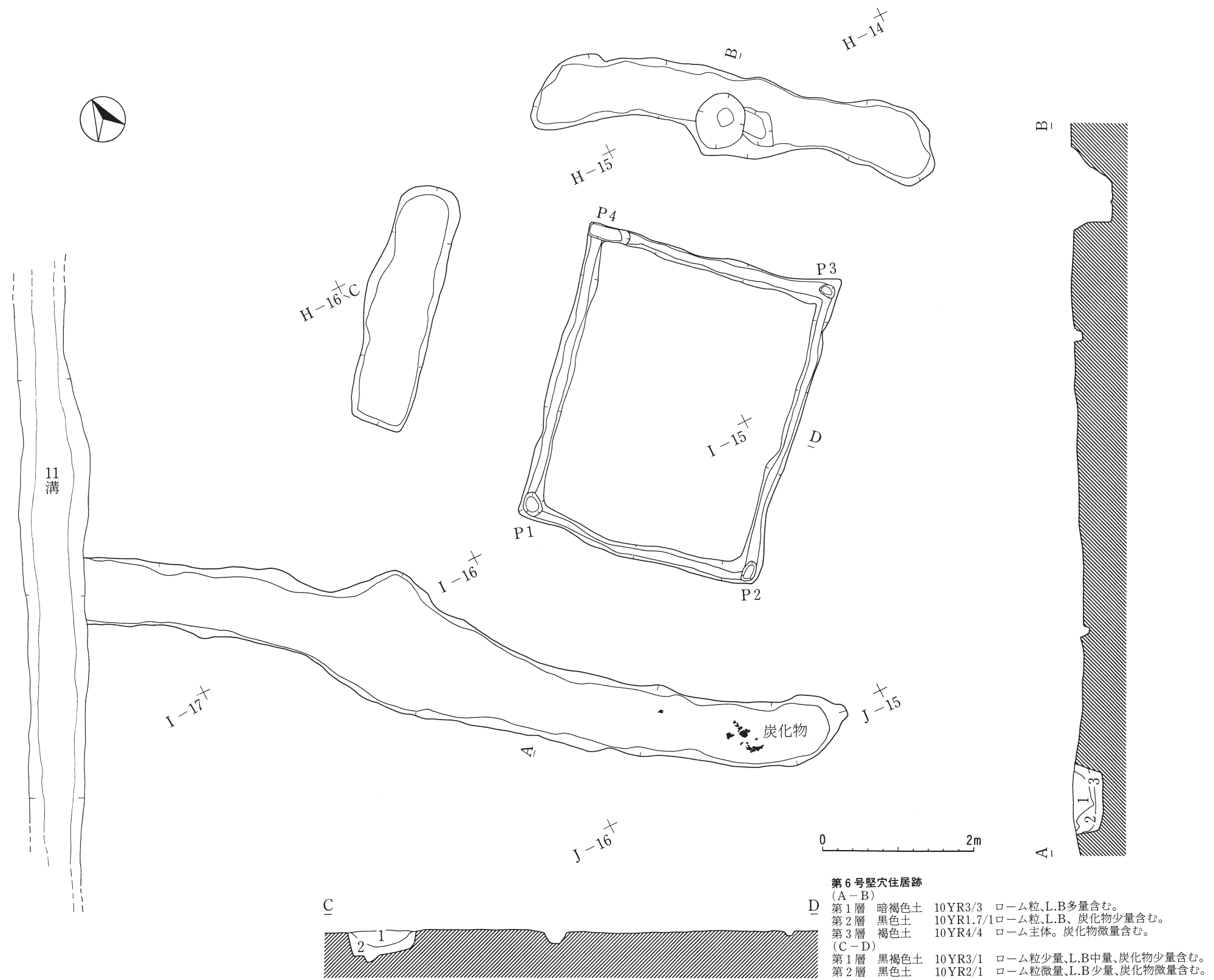
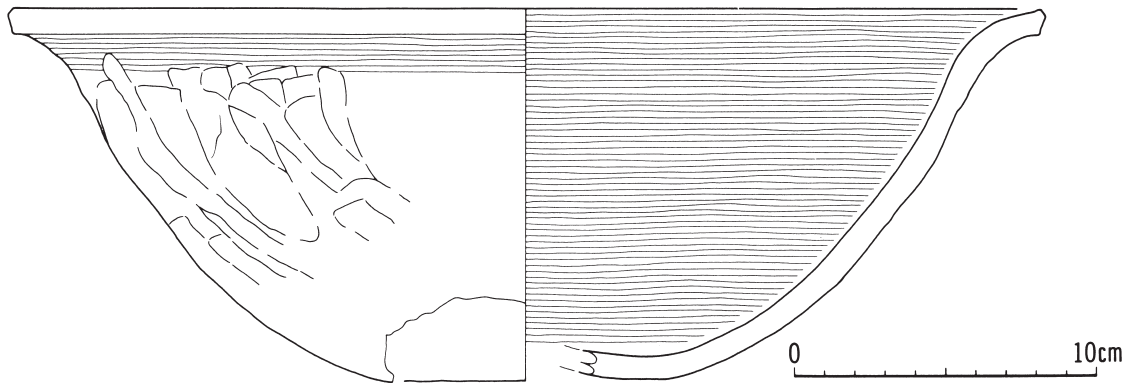
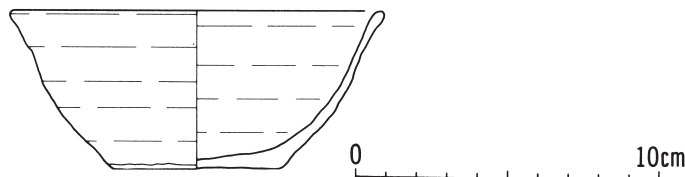


図32 第6号竖穴住居跡(1)



図版番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面	内面	底部	備考
					口径	底径	器高				
1	土師器	坏	体部半分	覆土	(12.4)	5.6	5.2	ロクロ	ロクロ	回転系切	

図33 第6号竪穴住居跡(2)



図版番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面	内面	底部	備考
					口径	底径	器高				
1	土師器	埴	体部半分	床面	(34.6)		(12.3)	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ		

図34 第2号溝跡出土遺物

3 遺構外遺物(図35~37)

平安時代の遺物は、土師器・須恵器片が平箱20箱分出土した。調査区一帯に分布するが、比較的遺構が密である調査区西側からの出土量が多く、東側に向かうに従い遺物量が少なくなる。ほとんどが細片であり、復元・実測し得たものは少ない。なお、第9号土坑から出土した土師器も遺構外出土として扱っている。詳細は考察の項で一括する。

(1)土師器(図35)

復元・実測したものは10点で、器形は坏が4点、甕が4点、埴が1点、小型土器が1点である。

(2)須恵器(図36・37)

復元・実測したものは16点で、器形は坏が8点、甕が3点、小型甕が1点、長頸壺が2点、壺が1点、小型土器が1点である。

(田澤賢治)

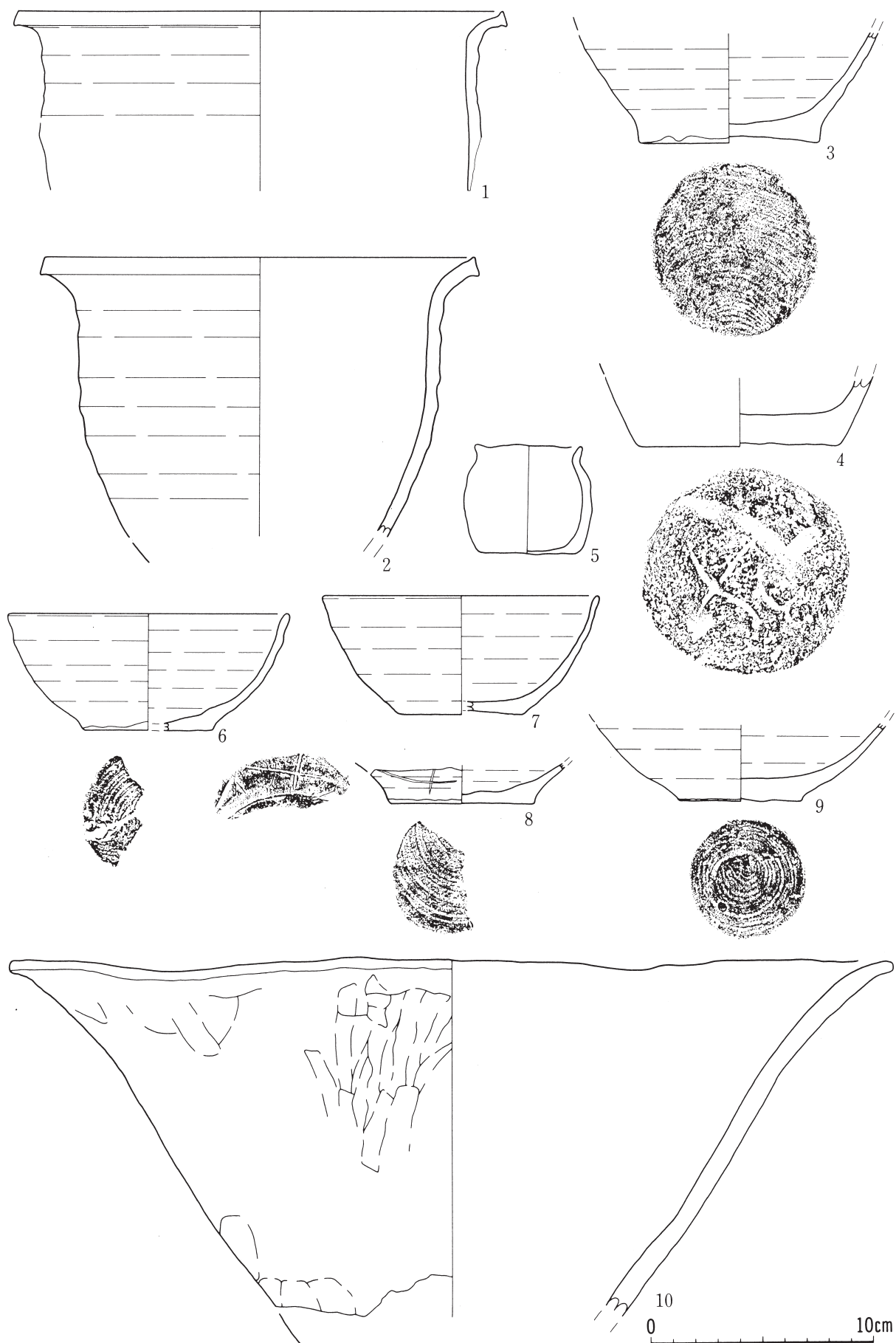


図35 遺構外出土遺物(1)

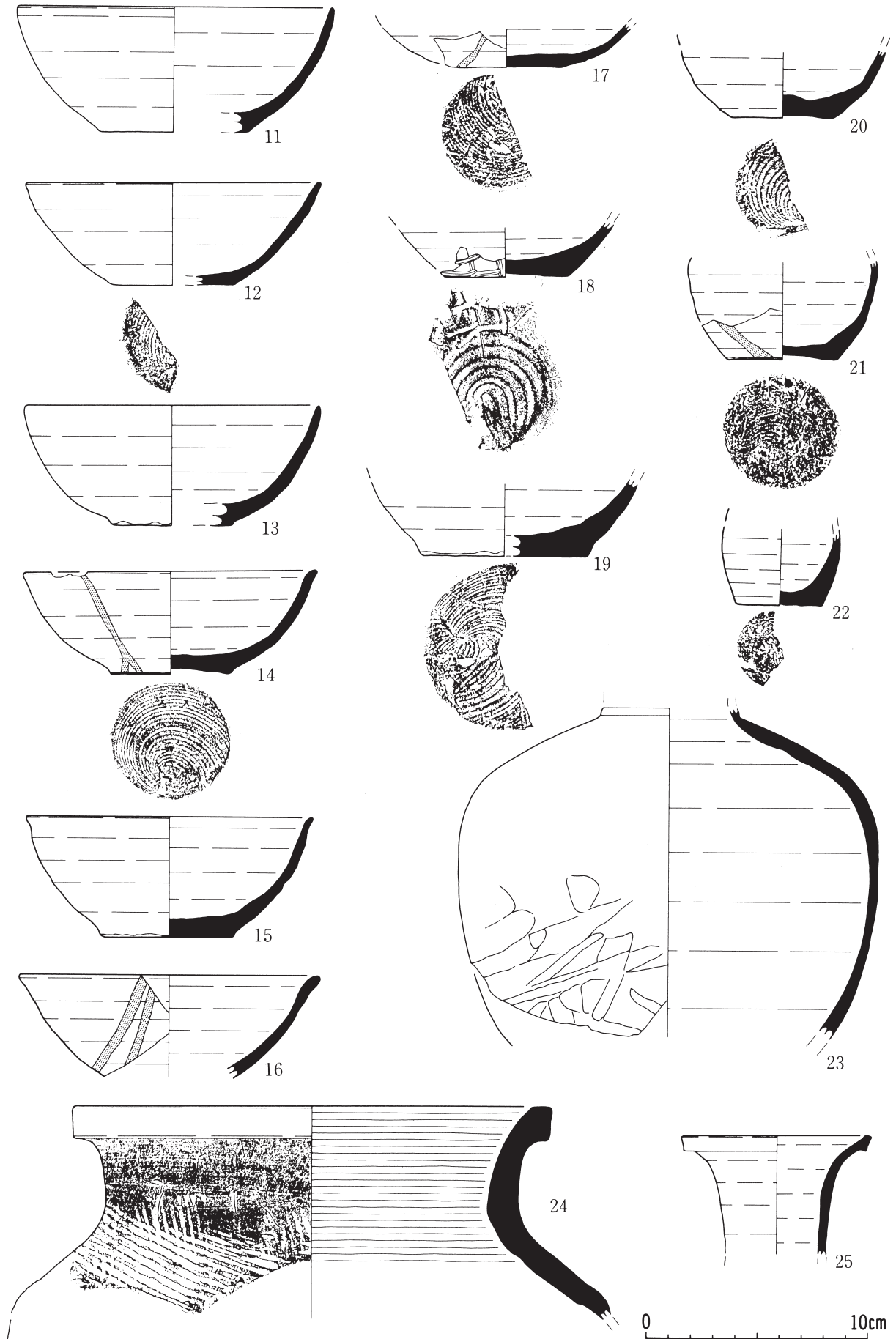


図36 遺構外出土遺物(2)

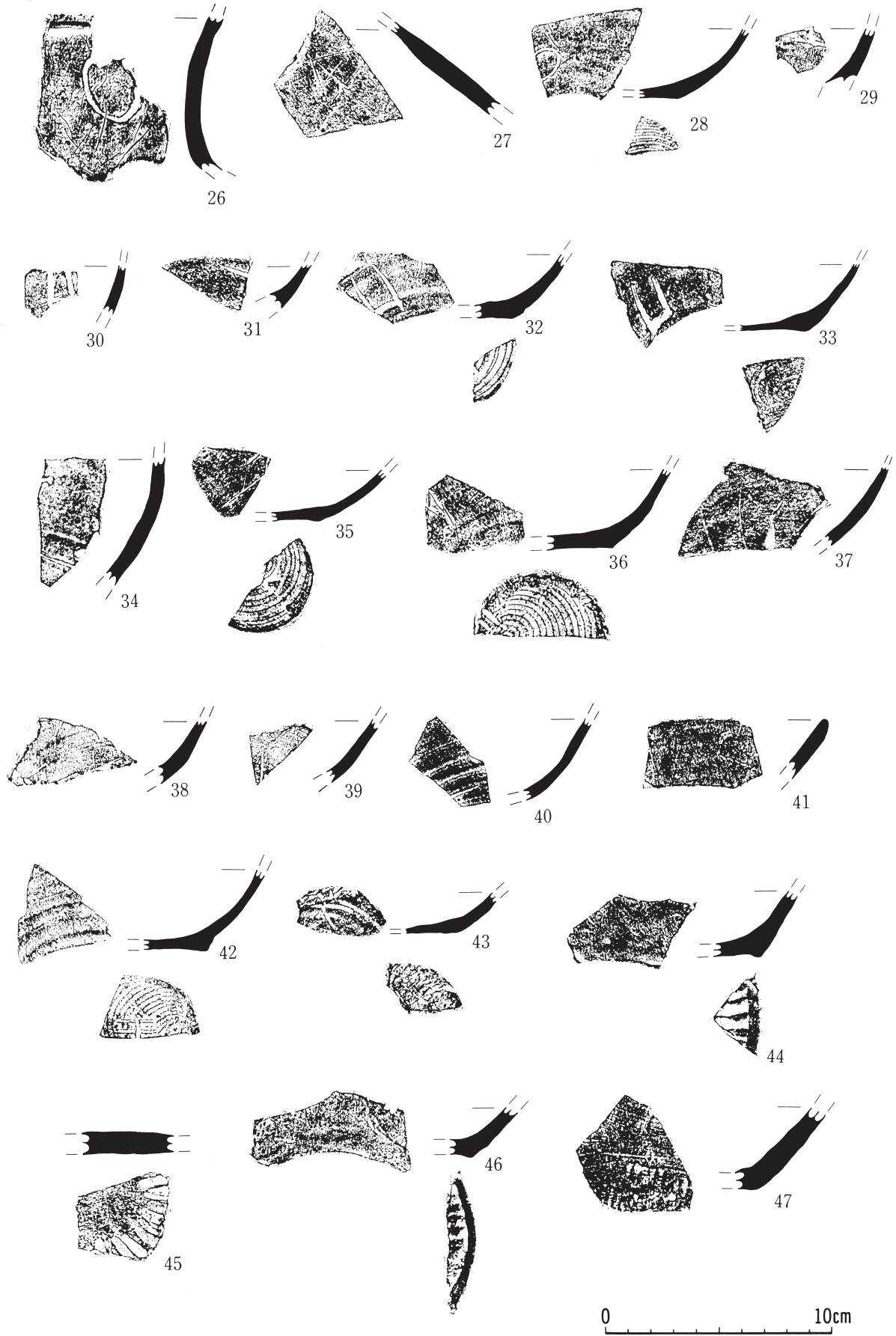


図37 遺構外出土遺物(3)

遺構外出土遺物観察表

遺物番号	種類	器種	部位	出土位置	計測値(cm)			外面	内面	底部	備考
					口径	底径	器高				
図35-1	土師器	甕	口縁部	J-47	(21.8)			ロクロ			
2	土師器	小甕	口縁部	10土覆土				ロクロ			
3	土師器	甕	底部	G-69・I		8.0	(4.9)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	
4	土師器	甕	体部下半	J-51・I		9.3					底面にヘラ書
5	土師器	小型土器	体部半分	J-48・I	(4.8)	(4.4)	(4.8)				
6	土師器	坏	体部半分	G-48・I	(12.6)	(5.3)	5.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切	
7	土師器	坏	体部下半	N-25・I		(5.6)	5.3	ロクロ	ロクロ	回転糸切	
8	土師器	坏	底部	J-47		(6.4)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	ヘラ書
9	土師器	坏	底部	I-65・I		5.4		ロクロ	ロクロ	回転糸切	
10	土師器	埴	体部上半	H-66・I	(39.7)			ヘラケズリ			
図36-11	須恵器	坏	胴部	H-49・I				ロクロ	ロクロ		
12	須恵器	坏	体部半分	J-68・I			4.9	ロクロ	ロクロ	回転糸切	
13	須恵器	坏	体部半分	表採	(13.3)		5.4	ロクロ	ロクロ		
14	須恵器	坏	底部	G-48・I		5.4	4.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切	火ダスキ
15	須恵器	坏	体部半分	G-70・I	(13.0)	(5.8)	5.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切	
16	須恵器	坏	口縁部	表採				ロクロ	ロクロ		火ダスキ
17	須恵器	坏	底部	J-64・I		(5.0)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	火ダスキ
18	須恵器	坏	底部	I-65・I		(5.5)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	底面ヘラ書
19	須恵器	甕	底部	M-65・I		(7.5)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	
20	須恵器	甕	底部	G-65・I		(4.4)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	
21	須恵器	小甕	体部下半	L-60・I		5.0		ロクロ	ロクロ	回転糸切	火ダスキ
22	須恵器	小型土器	体部下半	I-67・I		(3.9)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	
23	須恵器	壺	胴部	表採				ヘラケズリ	ロクロ		
24	須恵器	甕	口縁・頸部	表採	(21.6)			タタキ目	ヨコナデ		
25	須恵器	長頸壺	頸部	J-66・I	(8.7)			ロクロ	ロクロ		
図37-26	須恵器	長頸壺	頸部破片	G-12				ロクロ	ロクロ		ヘラ書き
27	須恵器	壺	破片	M-56・I				ロクロ	ロクロ		ヘラ書き
28	須恵器	坏	底部破片	K-63・I				ロクロ	ロクロ	回転糸切	ヘラ書き
29	須恵器		破片	L-66・I				ロクロ	ロクロ		ヘラ書き
30	須恵器		破片	L-65・I							ヘラ書き
31	須恵器		破片	H-50・I							ヘラ書き
32	須恵器	坏	底部破片	G-67・I				ロクロ	ロクロ	回転糸切	ヘラ書き
33	須恵器	坏	底部破片	表採				ロクロ	ロクロ	回転糸切	ヘラ書き
34	須恵器		破片	M-56・I							ヘラ書き
35	須恵器	坏	底部破片	I-53・I				ロクロ	ロクロ	回転糸切	ヘラ書き
36	須恵器	坏	底部破片	G-64・I				ロクロ	ロクロ	回転糸切	ヘラ書き
37	須恵器		破片	I-48				ロクロ	ロクロ		ヘラ書き
38	須恵器		破片	I-68・I				ロクロ	ロクロ		ヘラ書き
39	須恵器		破片	表採							ヘラ書き
40	須恵器		破片	M-65・I				ロクロ	ロクロ		ヘラ書き
41	須恵器	坏	口縁破片	L-46				ロクロ	ロクロ		ヘラ書き
42	須恵器	坏	底部破片	H-68・I				ロクロ	ロクロ	回転糸切	ヘラ書き
43	須恵器	坏	底部破片	G-67・I				ロクロ	ロクロ	回転糸切	ヘラ書き
44	須恵器		底部破片	M-47				ヘラケズリ		菊花文	
45	須恵器		底部破片	J-48						菊花文	
46	須恵器		底部破片	K-46				ヘラケズリ		菊花文	
47	須恵器		底部破片	F-67・I				タタキ目、ヘラケズリ		砂底	

第4節 時期不明の遺構

1 井戸跡(図38)

第1号井戸跡

[位置]O-63グリッドに位置する。

[重複]なし。

[平面形・規模]開口部は長軸100cm、短軸98cmの不整円形を呈し、確認面からの深さは、196cmである。

[壁・底面]底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直外反して立ち上がっている。

[堆積土]13層に分層される。人為堆積の様相を呈する。全体にローム粒を含む黒～黒褐色土である。

[出土遺物]遺物は出土していない。

[時期]不明である。

2 溝跡

時期不明の溝跡を一括する。時期不明の溝跡は12条検出された。第3号・第4号溝はF～L-49～79グリッドにかけて東西方向に延び、第1号竪穴住居跡に伴う外周溝及び第9号・第11号土坑と重複する。第6号・第7号溝はL～O-48～51グリッドにかけて南西～北東方向に延び、第3号竪穴住居跡と重複する。どちらも2本の溝が並行して延びているのが特徴である。(田澤賢治)

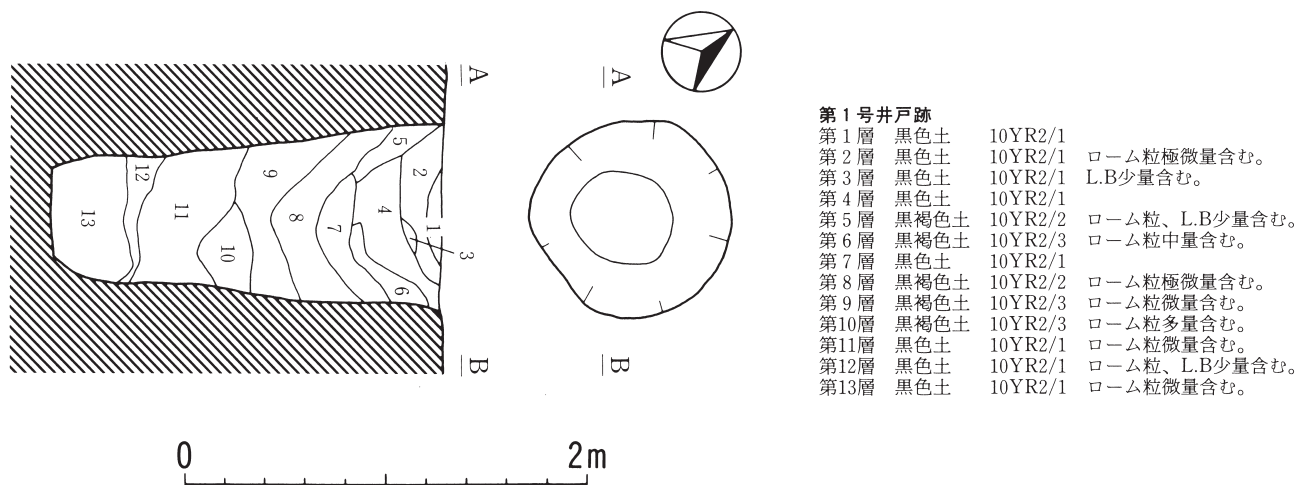


図38 第1号井戸跡

第4章 調査の成果と考察

1 検出遺構について

本遺跡の現状はリンゴ園であり、全体に極めて平坦な地形である。しかし、調査の結果、この平坦な地形は長年月による果樹園造成に伴う削平の結果によるものと推測された。調査区内から平安時代の竪穴住居跡は6軒のみ検出された。調査面積に比して、遺構数は非常に希薄であるが、特定の区域に偏ることなく調査区内に満遍なく分布していることから、かつては調査区一帯に集落が営まれていたが、削平によって相当数の遺構が消失した可能性がある。そのため、各遺構の遺存状態は極めて悪く、出土遺物も少なかった。また、降下火山灰の確認もできなかった。そのため、残念ながら本遺跡が営まれた時期を決定するための有効な判断材料は極めて少なかった。住居形態および、三浦圭介氏の土器編年(注1・2)を基に、出土土器から判断して、概ね9世紀後半から10世紀前半の間に属すると思われるが、これもあくまで推測の域を出ないことを予めお断りしておく。

カマドが確認されたのは3軒のみである。カマドは南東～東壁に作られているが、いずれも位置を確認するにとどまった。その他の住居跡でも同じ方向にカマドが作られたものと推測される。壁溝は第1号竪穴住居跡を除く全ての住居跡で検出された。また、本遺跡の竪穴住居跡には、以下のように外周溝及び掘立柱建物跡が伴うものがある。

- 外周溝+掘立柱建物跡…第1号・第2号竪穴住居跡
- 外周溝…第3号・第5号・第6号竪穴住居跡
- 付属施設無し…第4号竪穴住居跡

本遺跡で検出された住居跡の類例は、9世紀中葉～10世紀前半にかけて南津軽郡浪岡町及び青森市西部で数多く検出されているが、五所川原市内では本遺跡が最初の検出例である。各遺跡とも竪穴住居跡+外周溝(+掘立柱建物跡)という基本的なスタイルを持ちながらも、立地、形状は一様でない。これらの地域の集落に住んだ人々の間で流行した住居形態であろうが、本来的には特定の目的をもって構築されたものと思われる。

掘立柱建物跡は隣接する第1号・第2号竪穴住居跡のみに付属する。中間寸法は各々4m程度で、住居とほぼ同規模であり、住居のカマド側に並立する。第1号竪穴住居跡では、住居の床面中央で落ち込みとして焼土を確認しており、掘立柱建物跡と併せて、ある種の火を伴う工房のような施設だったと考えられるが、明確な用途は不明である。また、出入口も確認できなかった。

外周溝はカマドのある南東～北東壁側に開口し、ほぼ「U」字形をなす。第1号・第2号・第6号竪穴住居跡の外周溝には、1～2箇所途切れた部分がある。同様な例は青森市近野遺跡、浪岡町野尻(4)遺跡にも見られる。ある目的のために意図的に掘り残したものと考えられるが、もともと連続した1本の溝が、削平によって分離した状態で検出された可能性もある。

外周溝の機能については諸説あるが、決定的な見解は出ていないようである。例えば、野尻(4)遺跡では、「排水的な機能をもっていたもの」と想定しているが、北東から南西に若干傾斜する地形の本遺跡の場合、外周溝の形状が雨水等の流れ込む方向に対応しているとは思えず、可能性は否定できないものの、排水施設とは断定し得ない。他遺跡の事例を見ても、必ずしも、水の進入を防ぐような向

きには作られていない。各遺跡とも外周溝のほとんどが東～南東の、カマド側に開いた形状をしており、傾斜方向よりも、むしろカマド方向や出入口に関係する可能性を指摘できる。浪岡町松元遺跡の報告(注3)では「土塁構築のために掘り起こし、その後に施設等に使用されたり、遺物が廃棄されたり」したもので、「風雪及び一軒の住居を意識するための周堤」の可能性を指摘している。外周溝の形状については、本遺跡の場合も同様であり、この見解を支持したいが、周堤はもとより、仮定を裏付ける根拠を得ることができなかつたため、機能を特定するには至らなかつた。

本遺跡と併せて、隣接する隠川(4)遺跡の一部試掘を行ったが、やはり同様な住居跡が確認された。次年度以降の発掘調査でこれらの問題点が解明されることを期待する。

2 出土遺物について

(1) 土師器

本遺跡において最も多く出土した遺物である。復元・実測し得た総数68点のうち、遺構内から59点が出土した。器形別では、坏が30点、甕(小甕)28点、埴5点、皿1点、把手付土器1点、小型土器3点である。いずれも全体的な器形を知り得るものが少なく、詳細な分類は難しい。よって概略を述べるにとどめる。

坏

全体的な器形を知り得るものは13点である。器面調整は、全てロクロが使用されている。体部は内湾気味に立ち上がるが、図17-16・18の2点はほぼ直線的に立ち上がる。口唇部の形状で分類すると、口唇部が外反するものと、器体に沿って内湾気味のものに分けられる。図15-4は口縁部外面が外削ぎ状を呈する。内面を黒色処理したものが6点あり、うち2点(図15-3、図26-15)はヘラミガキ調整が施されている。底部は不明の2点を除き回転糸切りである。図15-3、図35-8はヘラ書きを有する。

甕

総数は28点(小型甕含む)だが、全体的な器形を知り得るものは3点のみである。器面調整は、ロクロ使用のものが17点、非使用のものが11点である。ロクロ使用のうち、外面にヘラケズリ調整を施すものが3点(図15-1・2、図16-8)である。ロクロ非使用のものはヘラケズリ調整が施されている。図17-14は口縁部にヘラ痕を全周させている。図20-3は外面に指跡が認められる。底部は回転糸切りだが、図25-5は砂底である。また、図35-4はヘラ書きを有する。

埴

すべて口縁部破片のみの出土である。図33は、外面にヘラケズリ、内面にヨコナデ調整を施す。口縁は強く外反し、丸底である。図17-13は外面にヘラケズリ調整が施されている。体部は直線的に立ち上がり、口縁は緩く外反する。

皿

1点のみ出土である。器高に比べて口径が大きい。口縁部は強く外反している。

把手付土器

把手のみ1点出土した。長さ65mm、直径25mmの円筒状を呈する。器部分の形状は不明。

小型土器

器高がおよそ60mm未満のものである。3点とも全て形状が異なる。図17-19は肩部にヘラ書きを有する。

(2) 須恵器

報告書に実測図を載せ得たものは43点で、遺構内からは27点が出土した。器形別では坏23点、壺14点、甕5点、小型土器1点である。

坏

全体形を知り得るものは12点である。口縁部の形状で分類すると、口縁部が外反するもの、器体に沿って内湾するもの、口縁部上部で一度垂直に立ち上がった後外反するものに分けられる。底部の切り放しは回転糸切りによるが、図23-27は静止糸切りと思われる。火ダスキ痕が10点に認められた。また、13点がヘラ書きを有する。図27-16は、回転糸切りによる切り放し後、底部の周囲にタタキ目を施している。また、内外面にヘラ書きを有する。

壺

破片資料が多く、全体形を知り得るものは3点のみである。器形は長頸壺、短頸壺、広口壺に分類される。長頸壺の口縁部は比較的垂直に立ち上がり、上端で大きく外反する。短頸壺は口縁部が短いものと、やや長いものがあり、ともに外反している。図27-21は、口縁部が外反せず、ほぼ垂直である。図29-1、図22-24は、頸部にヘラ書きを有する。図27-20は頸部に2箇所穿孔が認められる。図22-23は、底部に菊花文を有する。図22-25は、器高約76mmの小型広口壺である。

甕

全体形を知り得るものは1点もなかった。底部は回転糸切り痕を有する。小型甕は2点出土した。図36-21は火ダスキ痕が認められる。

小型土器

ロクロを使用し、底部には回転糸切り痕が認められる。

3 ヘラ書き土器(図39)

ヘラ書き土器は土師器4点、須恵器34点の計38点が出土した。器形別では、須恵器坏が21点と最も多い。他には土師器坏2、甕1、小型土器1、須恵器壺2点である。ヘラ書き内容では、明らかに文字と思われるものは、「田」と思われる1点(1)のみである。文字以外では、12・13は円形になると思われる。14・15は「4」に似た記号である。須恵器坏の5点には同様の記号が刻まれている(7・8・9・10・17)。第3号竪穴住居跡外周溝からは内外両面にヘラ書き記号刻まれた須恵器坏が1点出土している(24・33、図27-16)。その他、多くは1本ないし複数の直線を組み合わせたものである。ヘラ書き部分が割れて、内容が判別し得ないものも多いが、それぞれの記号に規格性、統一性は殆ど認められない。

(田澤賢治)

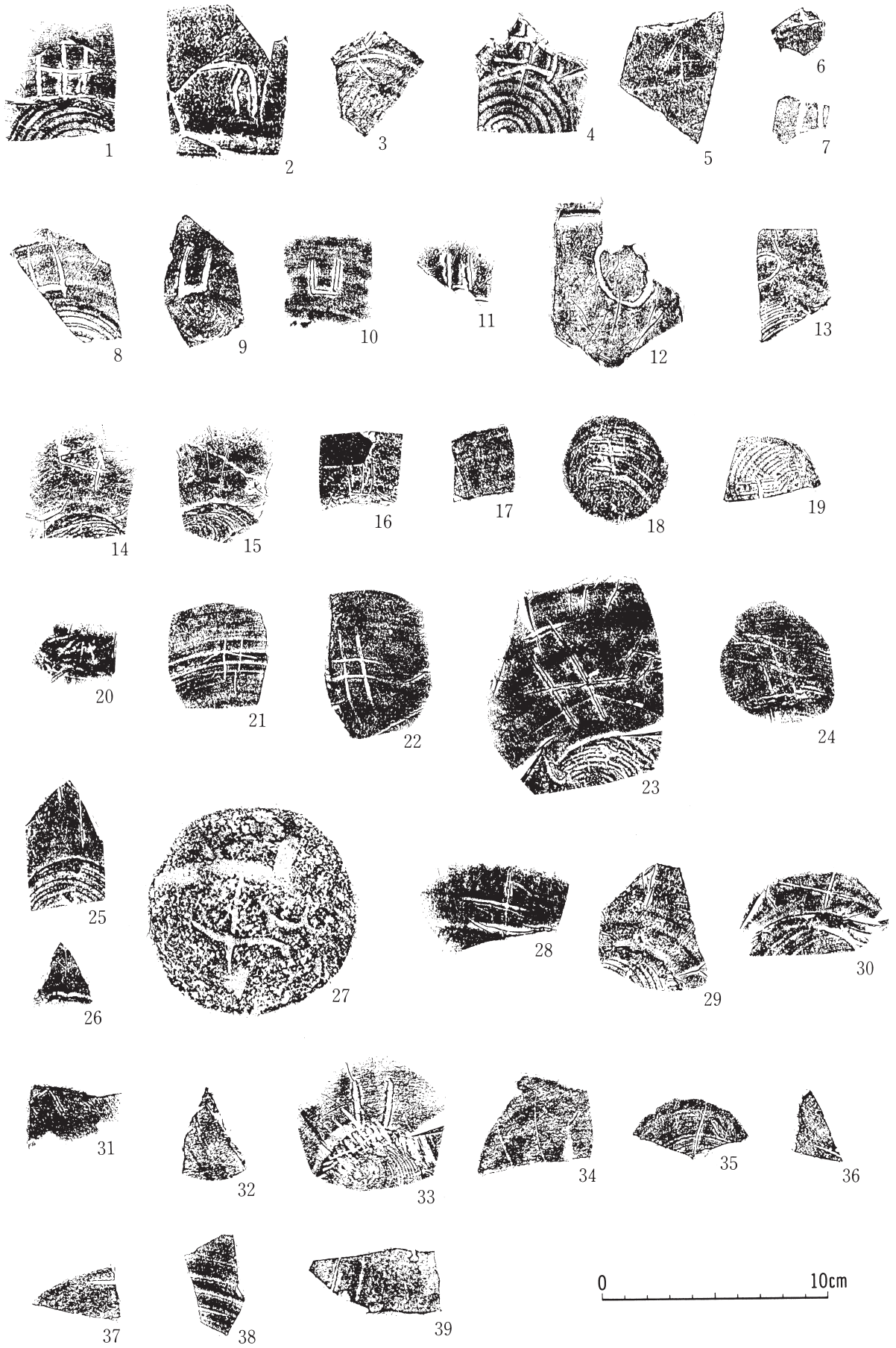


図39 ヘラ書き土器

隠川(3)遺跡出土ヘラ書き土器一覧

番号	出土遺構名	種類	器種	部位	備考
図-1	第1号竪穴住居跡	須恵器	坏	肩部直上	図15-6 「田」
2	第4号竪穴住居跡	須恵器	長頸壺	頸部	図29-1
3	G-67	須恵器	坏	肩部直上	
4	I-65	須恵器	坏	底部直上～底部	図36-18 胴部から底部まで刻み
5	M-56	須恵器	壺	肩部	
6	L-66	須恵器		中央	
7	L-65	須恵器		中央	
8	G-67	須恵器	坏	下寄り	
9	表採	須恵器	坏	底部直上	
10	第1号竪穴住居跡外周構	須恵器	坏	中央	図18-23
11	第2号竪穴住居跡外周構	須恵器	長頸壺	頸部	図22-24
12	G-12	須恵器	長頸壺	頸部	
13	K-63	須恵器	坏	下寄り	
14	第2号竪穴住居跡外周構	須恵器	坏	中央下寄り	図23-32
15	第2号竪穴住居跡	須恵器	坏	下寄り	図20-4
16	第2号竪穴住居跡外周構	須恵器	坏	底部直上	図23-29
17	L-46	須恵器	坏	中央上寄り	
18	第2号竪穴住居跡外周構	須恵器	坏	底部	図23-31
19	H-68	須恵器	坏	底部	
20	第1号竪穴住居跡外周構	土師器	小型土器	肩部	図17-19
21	第3号竪穴住居跡外周構	須恵器	坏	中央	図27-17
22	第3号竪穴住居跡外周構	土師器	坏	中央	図26-11
23	第5号竪穴住居跡外周構	須恵器	坏	中央	図31-4
24	第3号竪穴住居跡外周構	須恵器	坏	中央	図27-16 内外面ヘラ書き(内)
25	I-53	須恵器	坏	下寄り	
26	第3号竪穴住居跡外周構	須恵器	坏	下寄り	図27-19
27	J-51	土師器	甕	底部	図35-4
28	第1号竪穴住居跡外周構	須恵器	壺	頸部	図18-20
29	G-64	須恵器	坏	下寄り	
30	表採	須恵器		中央	
31	第2号竪穴住居跡外周構	須恵器	坏	中央	図23-30
32	I-68	須恵器		中央	
33	第3号竪穴住居跡外周構	須恵器	坏	底部直上	図27-16 内外面ヘラ書き(外)
34	I-48	須恵器		中央	
35	第3号竪穴住居跡外周構	須恵器	坏	底部	図27-18
36	J-47	土師器	坏	底部直上	図38-8
37	H-50	須恵器		中央	
38	M-65	須恵器		中央	
39	M-56	須恵器		中央	

第5章 まとめ

隠川(3)遺跡は五所川原市の東南端、前田野目川右岸の標高約54mの台地上に立地しており、調査以前は果樹園となっていた。縄文時代、弥生時代、平安時代の複合遺跡で、主体となる時期は平安時代である。出土遺物の総量は、段ボール箱で27箱分である。

縄文時代に属する遺構では、土坑が11基検出された。遺構内外ともに遺物の出土量が少なく、時期を明確にすることはできなかったが、遺構・遺物の検出状況から、概ね後期のある同時期に構築されたものと思われる。遺物では、縄文時代前期(円筒下層b式)、後期(十腰内I・II式)の各型式、及び後・晩期の粗製土器が出土した。いずれも破片資料で出土量も少ない。

弥生時代の土器片は6点のみの出土であるが、特異なものとして、口縁部の内側に1条の横走沈線と連続刺突文を施した土器片が1点出土しており、今後類例の報告を待ちたい。

平安時代に属する遺構では、竪穴住居跡6軒、溝跡2条が検出された。竪穴住居跡は5軒が外周溝を伴い、そのうち2軒は掘立柱建物跡が付属している。五所川原市内では本遺跡が初の検出例となるが、今後更に多くの類例が報告されるものと思われる。

果樹園造成時の削平によって集落の大部分が失われた可能性があるが、隣接する隠川(4)遺跡からも同時期の所産と思われる竪穴住居跡を確認しており、本遺跡一帯は連続した大きな広がりを持つ集落であったことが推測される。(調査者一同)

引用参考文献

- 青森県教育委員会 1973 『近野遺跡(1)発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第12集
 青森県教育委員会 1974 『近野遺跡発掘調査報告書(II)』 青森県埋蔵文化財調査報告書第22集
 青森県教育委員会 1976 『近野遺跡発掘調査報告書(III)』 青森県埋蔵文化財調査報告書第33集
 青森県教育委員会 1977 『源常平遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第39集
 青森県教育委員会 1978 『杉の沢遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第45集
 青森県教育委員会 1978 『松元遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第46集(注3)
 青森県教育委員会 1985 『大石平遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第90集
 青森県教育委員会 1986 『山本遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第105集
 青森県教育委員会 1994 『山元(3)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第159集
 青森県教育委員会 1995 『山元(2)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第171集
 青森県教育委員会 1995 『野尻(2)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第172集
 青森県教育委員会 1996 『野尻(2)II・(3)・(4)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第186集
 尾上町教育委員会 1980 『李平II号遺跡発掘調査報告書』 調査報告書第2集
 川内町教育委員会 1981 『川代・耶馬尻遺跡発掘調査報告書』
 今井富士雄・磯崎正彦 1968 「十腰内遺跡」『岩木山』 岩木山刊行会
 三浦栄一郎・鈴木克彦 1984 「五戸町次郎左衛門長根遺跡の十腰内II式土器」『青森県考古学』第1号 青森県考古学会
 高橋学 1989 「竪穴住居と掘立柱建物が併列して構築される遺構について」『研究紀要』第4号 秋田県埋蔵文化財センター
 三浦圭介・岡田康博 1992 「津軽五所川原古窯跡群について」『東日本における古代・窯業の諸問題』 大戸窯検討のための会津シンポジウム(注1)
 三浦圭介 1994 「古代東北地方北部の生業に見る地域差」『北日本の考古学』 吉川弘文館(注2)



第1号竖穴住居跡

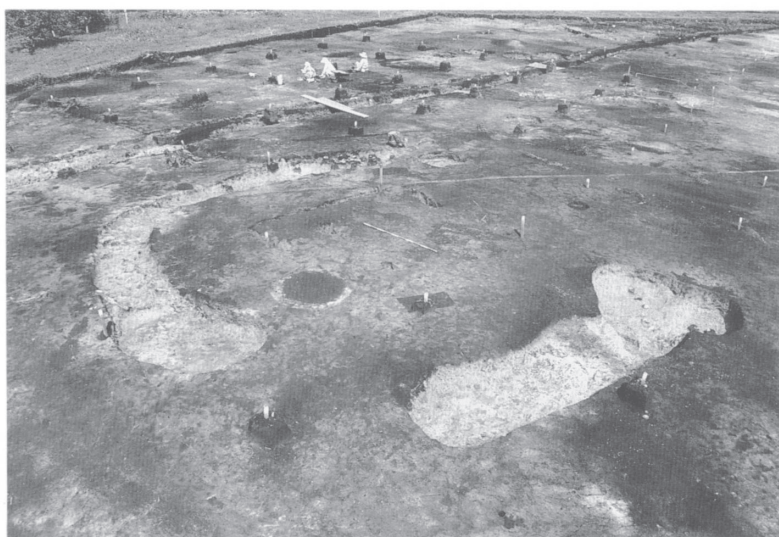


第1号竖穴住居跡カマド

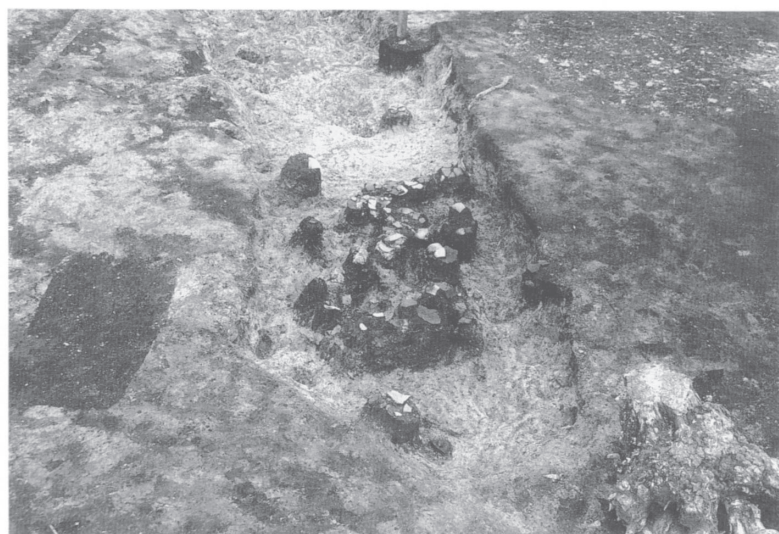


基本土層

写真2



第2号竖穴住居跡



第2号竖穴住居跡遺物出土状況



第3号竖穴住居跡



第4号竪穴住居跡



第4号竪穴住居跡カマド



第4号竪穴住居跡掘り方

写真4



第5号竪穴住居跡



第5号竪穴住居跡 火床面セクション



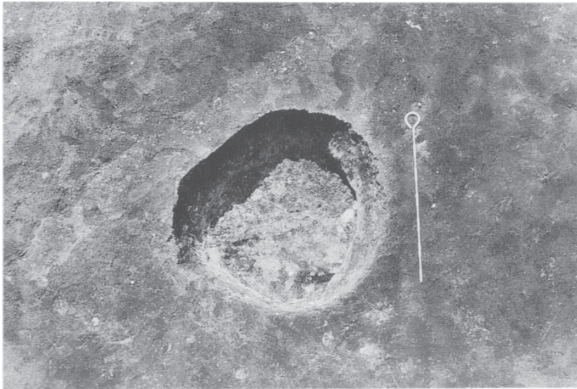
第6号竪穴住居跡



隠川(3)遺跡調査前風景



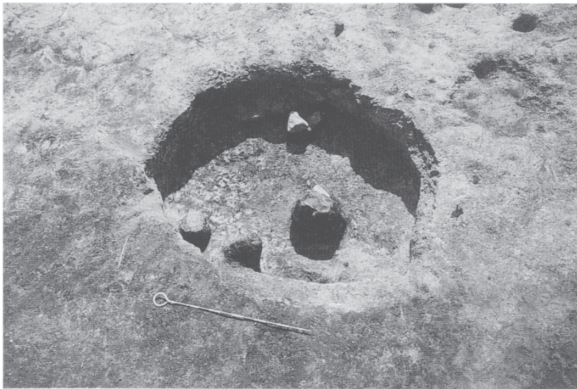
作業風景



第1号竖穴住居跡内焼土遺構



第4号竖穴住居跡内土坑



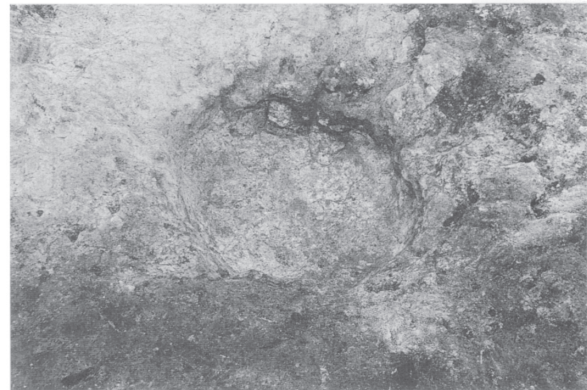
第1号土坑



第2号土坑遺物出土状況

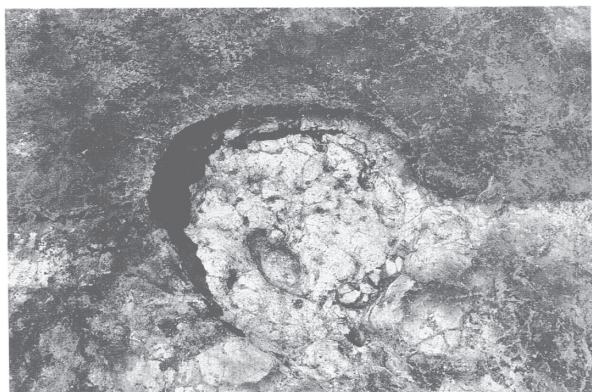


第3号土坑

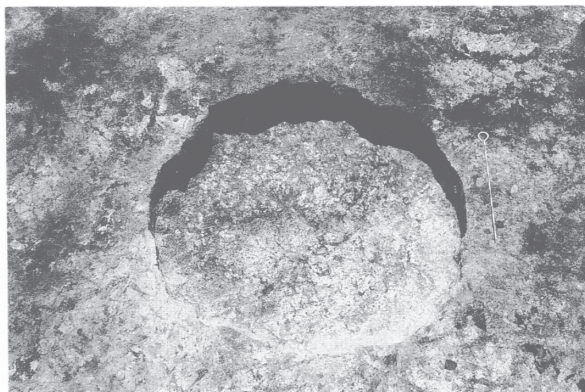


第4号土坑

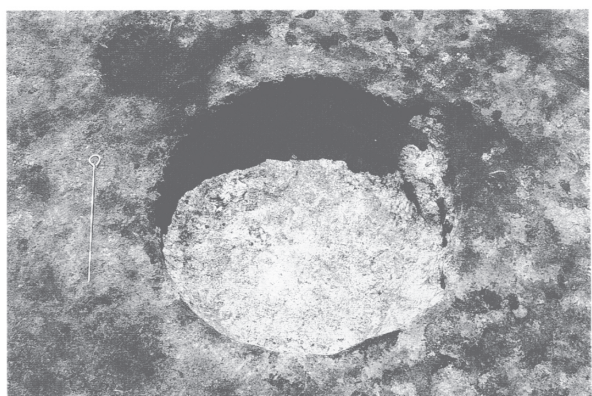
写真6



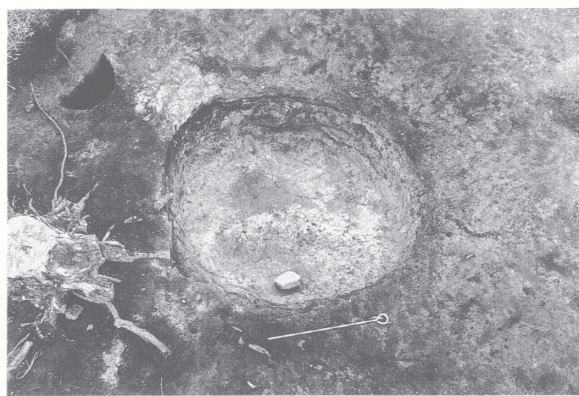
第5号土坑



第6号土坑



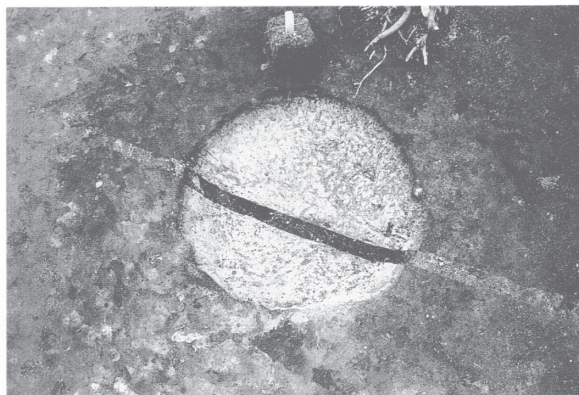
第7号土坑



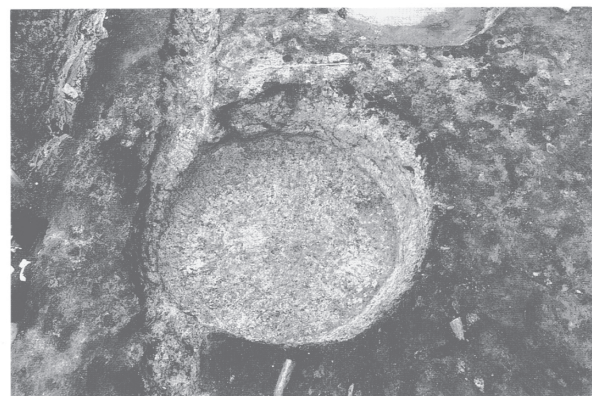
第8号土坑



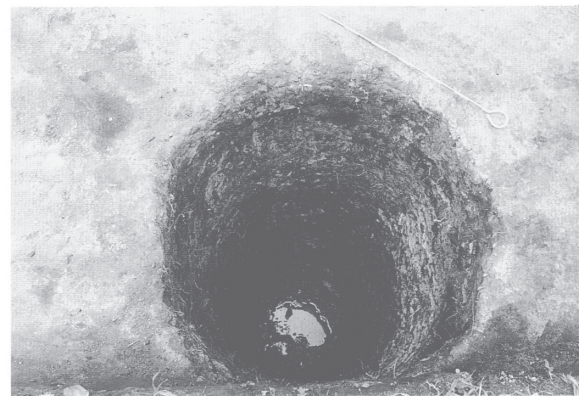
第9号土坑



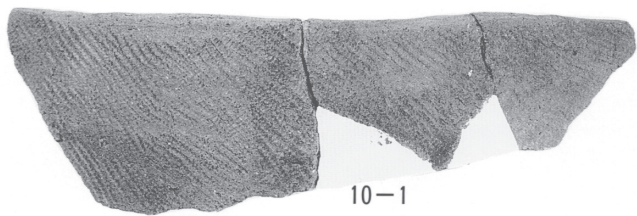
第10号土坑



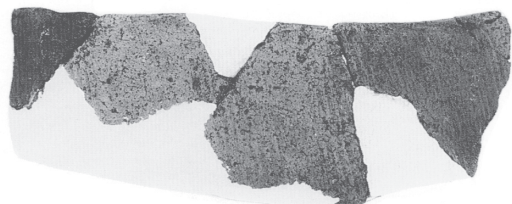
第11号土坑



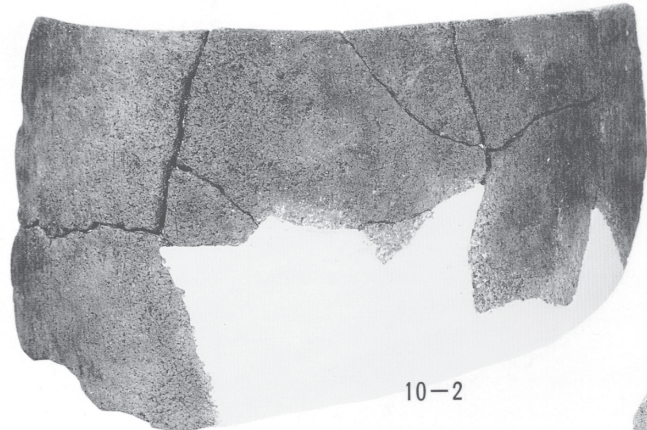
第1号井戸跡



10-1



10-3



10-2



10-4



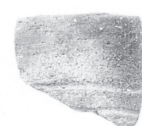
11-5



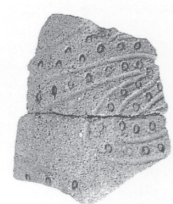
11-6



11-7



11-11



11-10



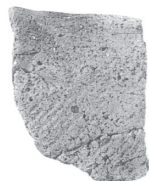
11-8



11-9



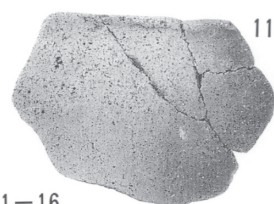
11-12



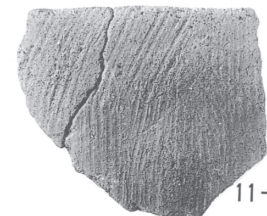
11-14



11-15



11-16



11-17

縄文遺物



11-18



11-19



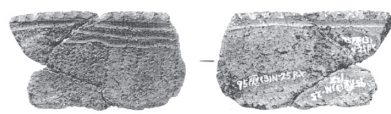
11-20



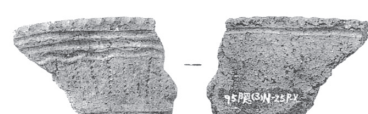
11-21



11-22



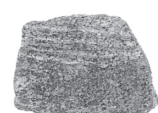
12-1



12-2



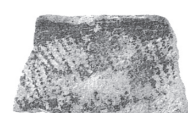
12-3



12-4



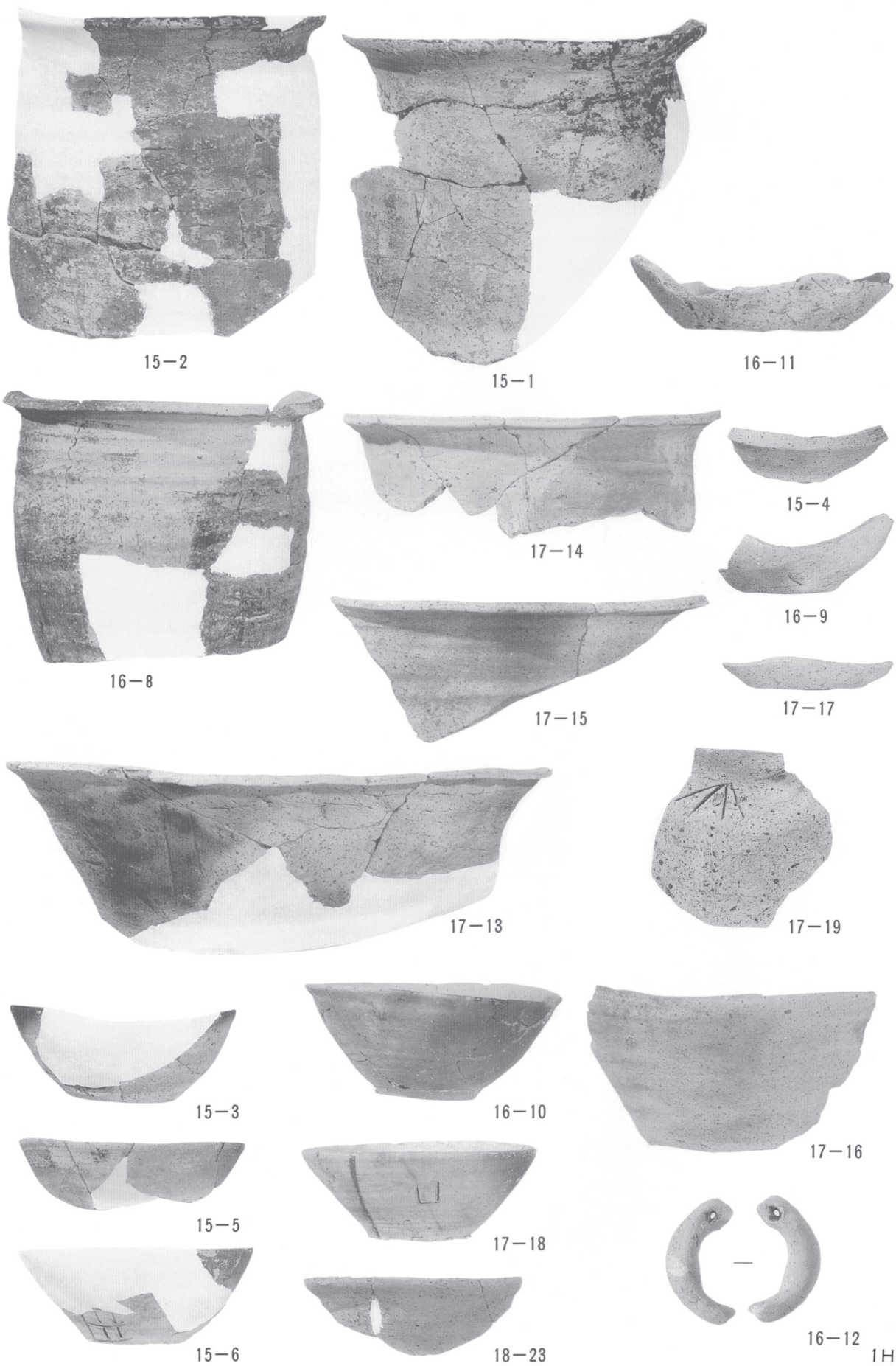
12-5

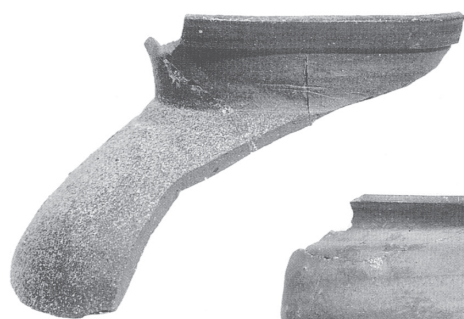


12-6

弥生遺物

写真8





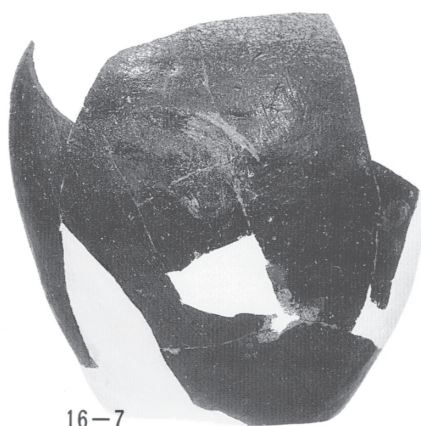
18-20



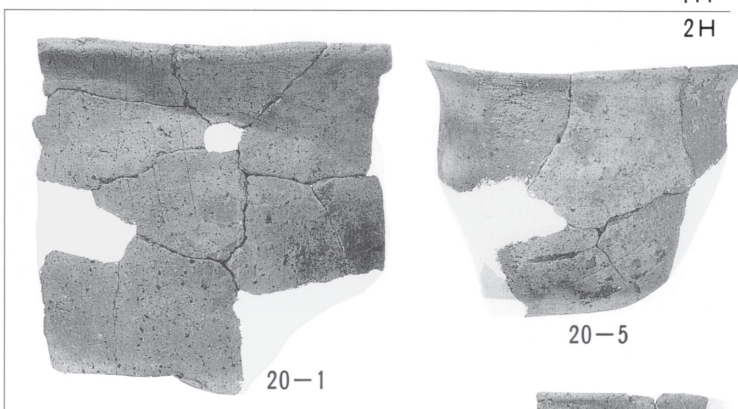
18-22



18-21



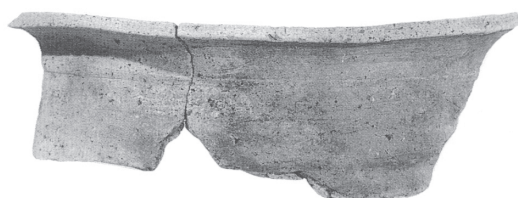
16-7



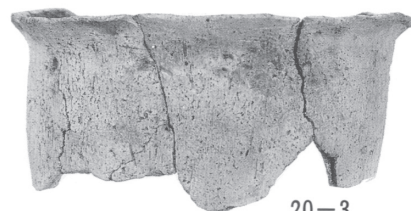
1H
2H

20-1

20-5



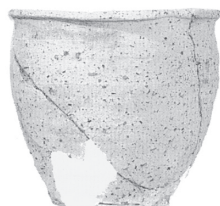
20-2



20-3



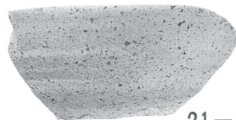
20-6



20-7



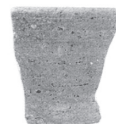
20-8



21-10



21-11



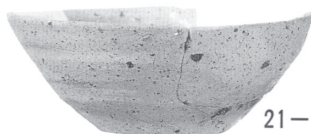
21-13



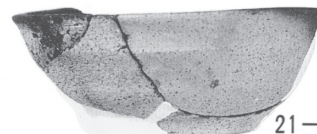
21-20



20-9



21-12



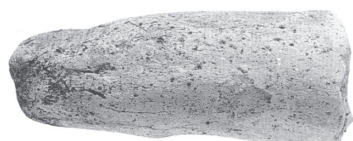
21-16



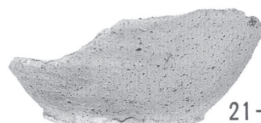
21-18



21-14



21-19

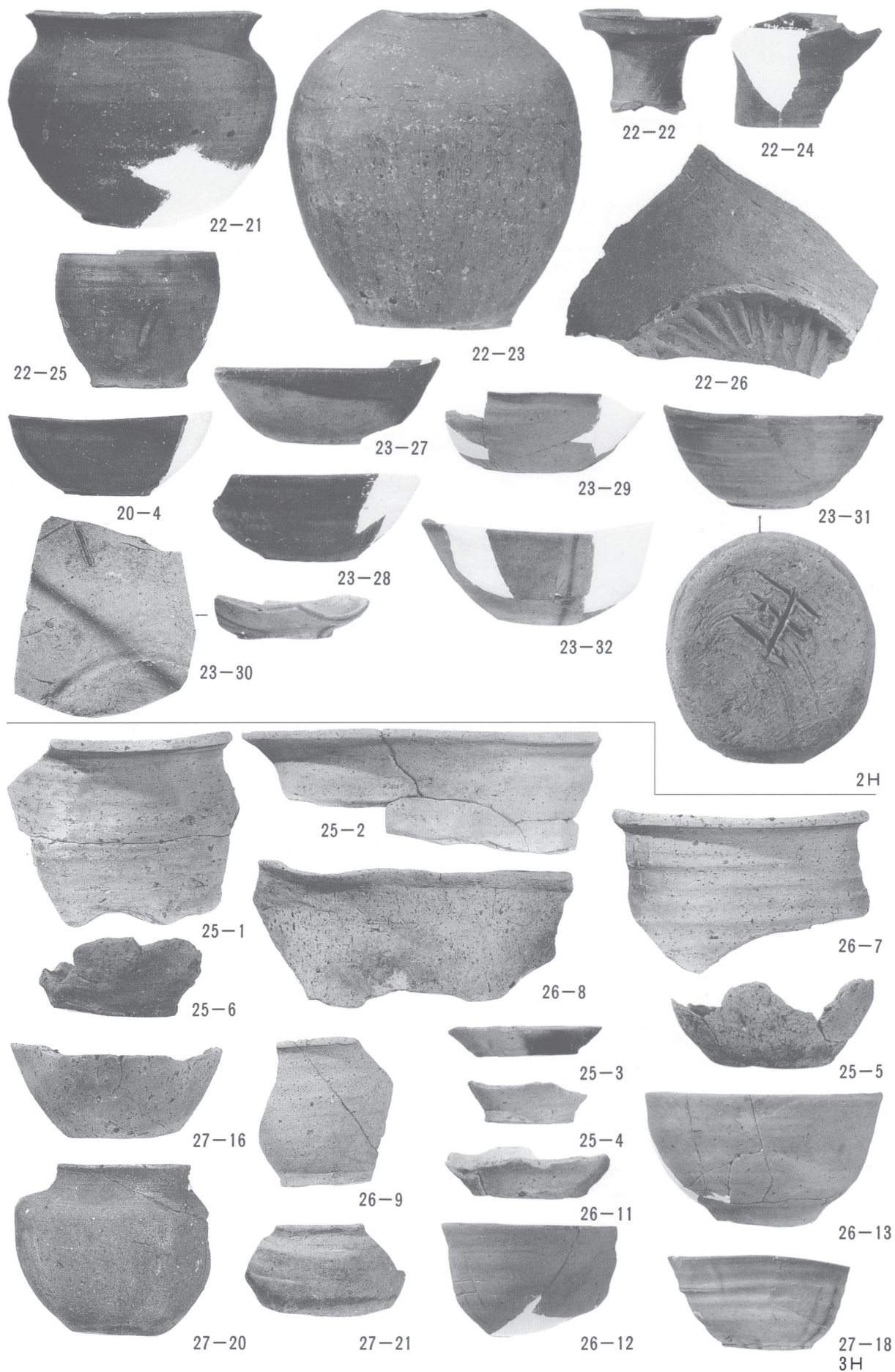


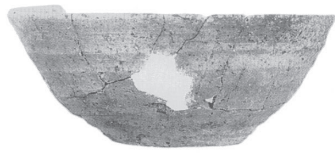
21-17



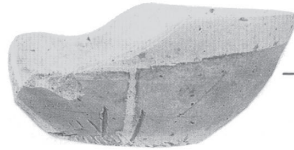
21-15

写真10

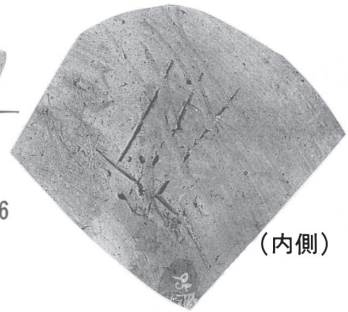




26-14



27-16



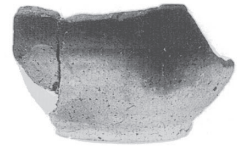
(内側)



27-17



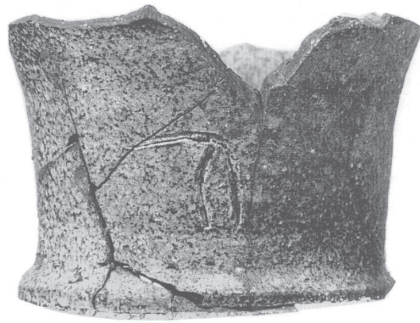
27-19



26-15



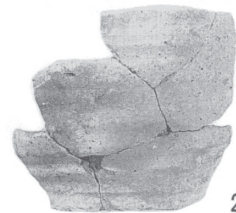
29-1



29-2

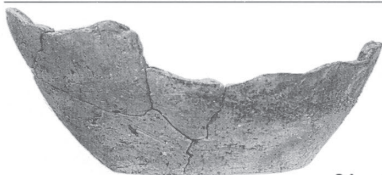


29-3

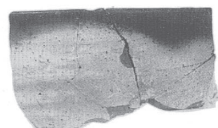


29-4

4H



31-1



31-2

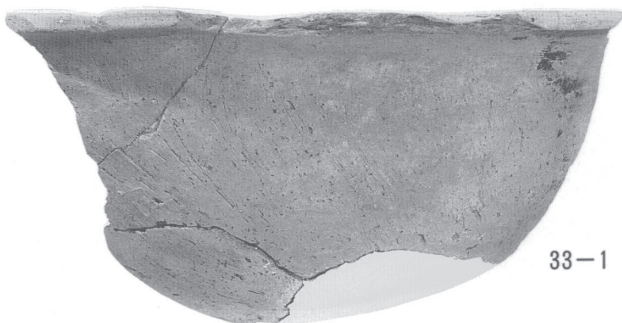


31-3



31-4

5H



33-1

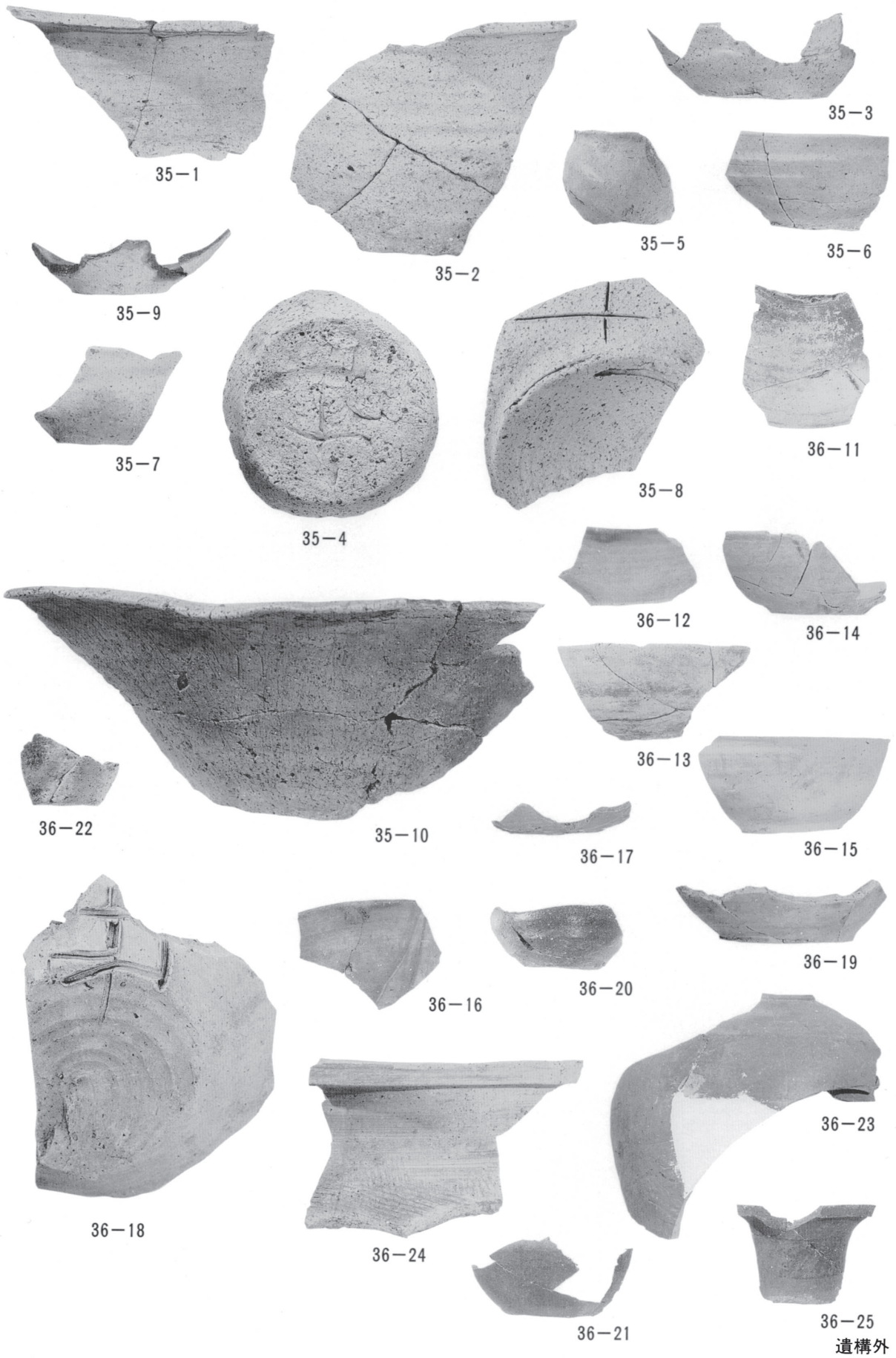
6H



34-1

2溝

写真12

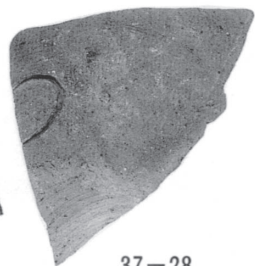




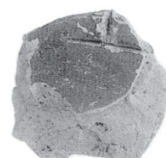
37-26



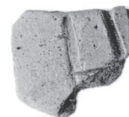
37-27



37-28



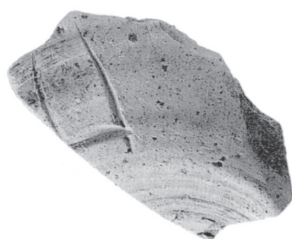
37-29



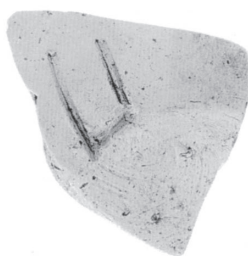
37-30



37-31



37-32



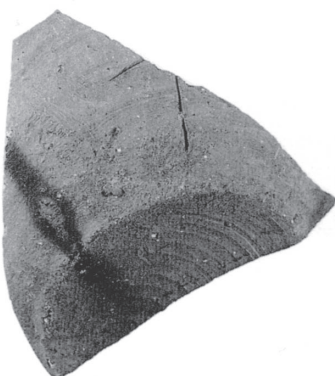
37-33



37-34



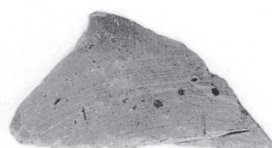
37-35



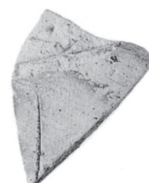
37-36



37-37



37-38



37-39



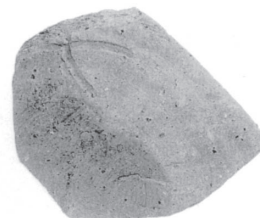
37-40



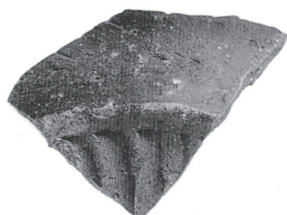
37-41



37-42



37-43



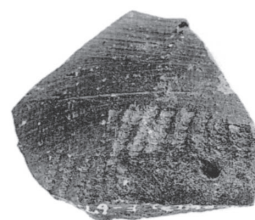
37-44



38-45



37-46



37-47
遺構外

報告書抄録

ふりがな	かくれがわさんいせき							
書名	隠川(3)遺跡							
副書名	国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第210集							
編著者名	木村鐵次郎・田澤賢治							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038 青森市大字新城字天田内152-15 TEL 0177-88-5701							
発行年月日	1997年 3月 31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面接	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°'〃	°'〃		m ²	
かくれがわさんいせき 隠川(3)遺跡	あおもりけんごしよがわらし 青森県五所川原市 おおあざもつこざわあざ 大字持子沢字 かくれがわほか 隠川616、外	02205	05063	40° 44' 49"	140° 30' 00"	19950424) 19951102	12,200	国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
隠川(3)遺跡	集落跡	平安	竪穴住居跡 6軒 掘立柱建物跡 2棟 溝跡 2条	土師器 須恵器	平安時代の集落跡 掘立柱建物と外周溝を伴う住居跡を検出			
		縄文	土坑 11基	土器片、石器				
		弥生		土器片				
		時期不明	溝跡 12条 井戸 1基					

青森県埋蔵文化財調査報告書第210集

隠川(3)遺跡

—国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行日 1997年3月31日

発行 青森県教育委員会

〒030 青森市新町二丁目3-1

編集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038 青森市大字新城字天田内152-15

TEL. 0177-88-5701 FAX. 0177-88-5702

印刷所 川口印刷工業株式会社 青森営業所

〒030 青森市松原一丁目4-7

TEL. 0177-34-0748 FAX. 0177-74-6906

